

0022205000

2

0022205-000

332.22-H142s

支那資本機構・財閥政権

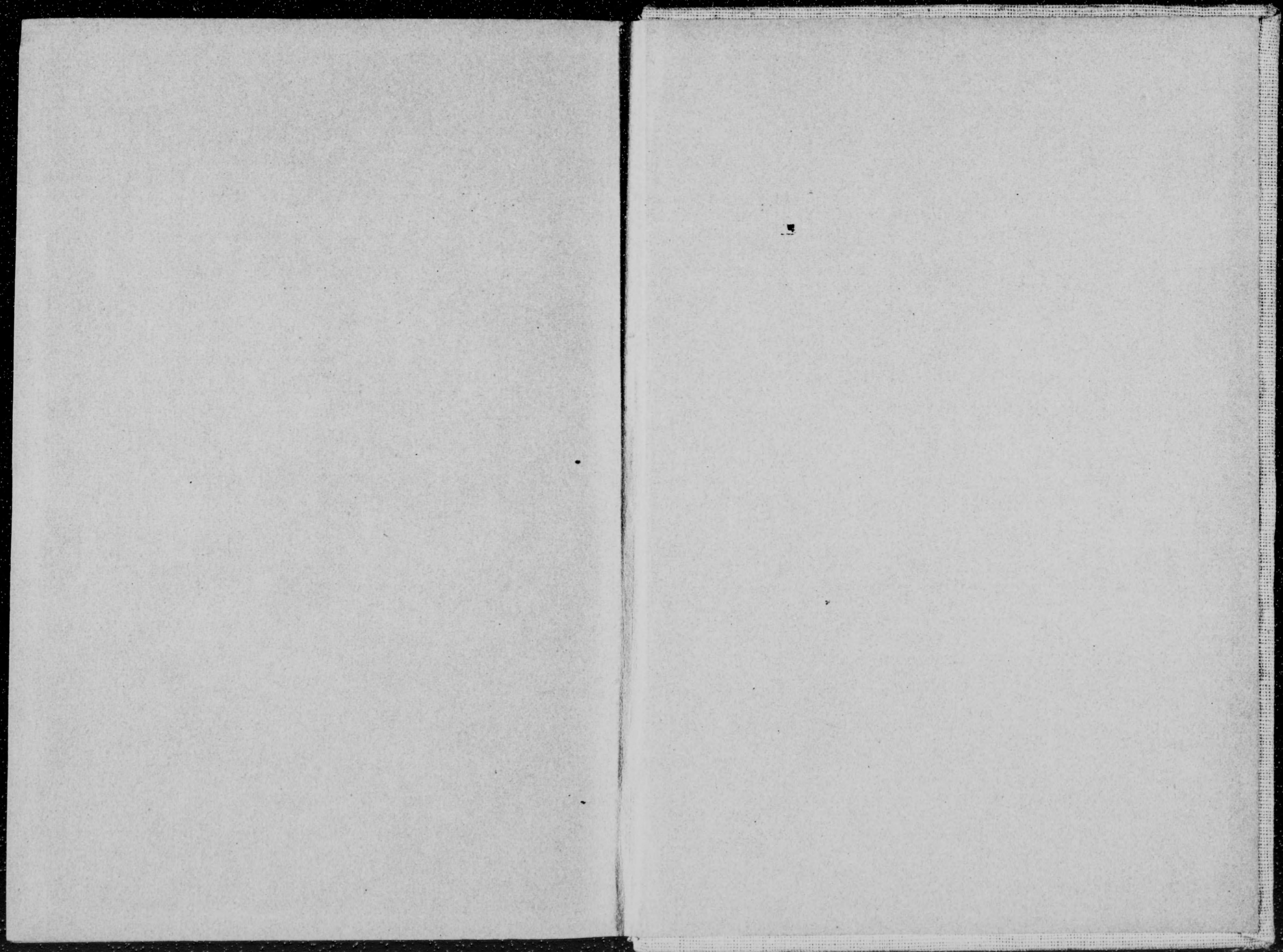
浜田峰太郎・著

叢文閣

1937

ADC

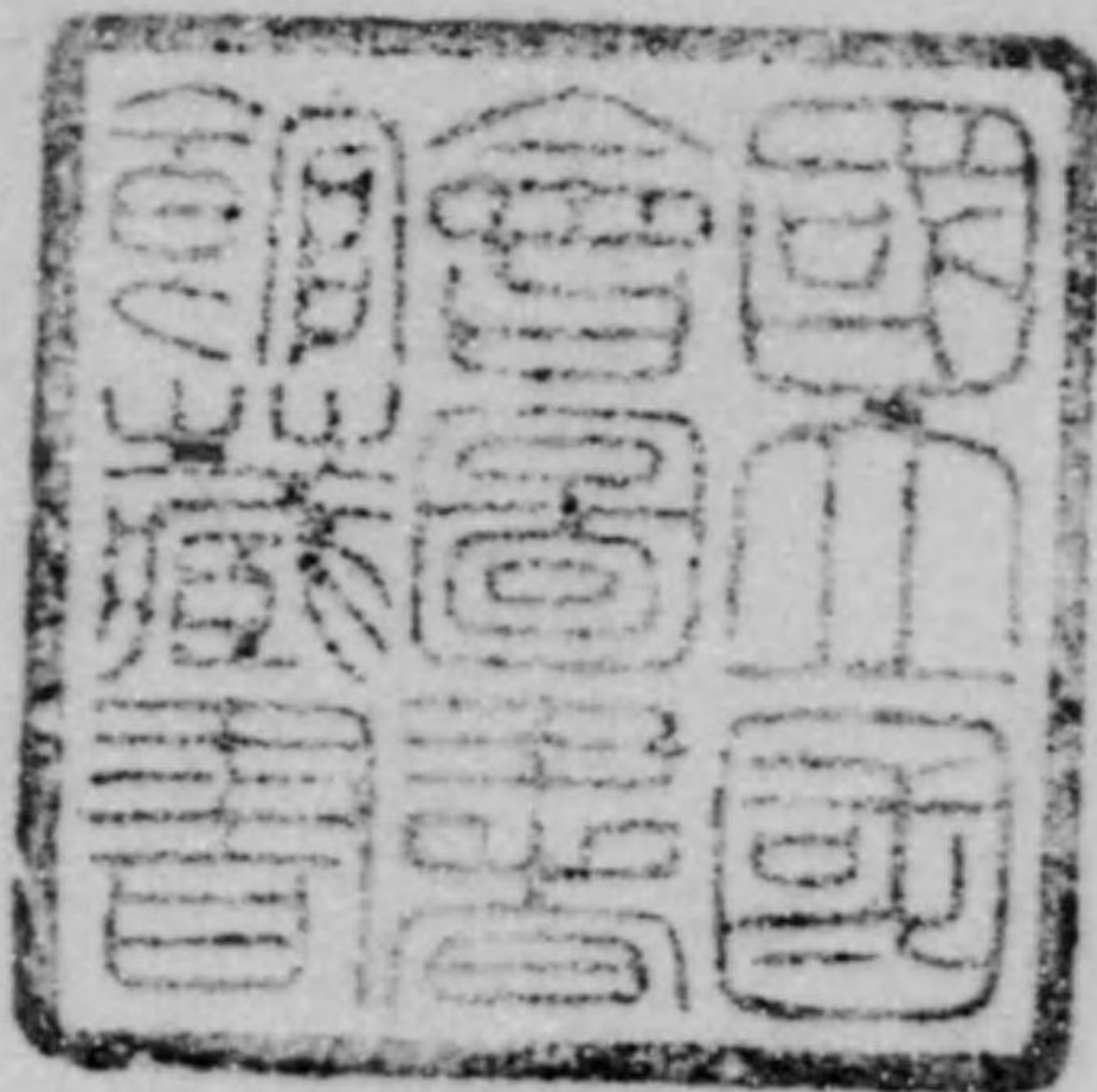
この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月23日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。



濱田峰太郎著

支那資本機構・財閥政權

332.22 H 1420



31854

自序

さきに私は「轉換期支那の全貌」(昭和八年七月プロク經濟研究所出版)、及び「中國最近金融史」(昭和十一年三月東洋經濟新報社出版)、並びに「現代支那の政治機構とその構成分子」(昭和十一年八月學藝社出版)、または「支那經濟の現勢及び動向」(昭和十一年八月上海出版社出版、本書は胡一聲氏の手で華文に翻譯され、上海現世界社から出版されました)、等によつて政治・經濟のあらゆる角度から、支那の本質及び現代支那に發生せる諸事象の分析と解剖とを試みましたが、本書も亦それらの姉妹篇のつもりで稿を起したものであります。この意味に於いて本書は支那經濟・政治の綜合的研究の序篇と申して差支へがないと思ひます。

但し本書はその前半に於いて、専ら私のイデオロギーなり、私自身の研究なりを表現することは、能ふ限りこれを避け、從來支那に於いて文献なり、または既に發表された諸家の研究の存する限り、努めてその代表的なものを可及的廣く引用することとし、同時にそれらの部分的な諸文献を或る一定の方法論の下に綜合するといつた手段をとりました。

それは支那には進歩的な研究家が可成り多いこと、とくにそれらの人々の研究が、どうした段階にあつたか、並びにさうした研究家の理論的立場なり觀點の基礎なりをも、併せて紹介したいといふ一種の欲望から出た所以に外

ならぬのであります。

然しながら第二編第三章以下、銀行資本及びその発展に關しては、未だ纏つた研究なり、分析なりが少ないので、本書起稿のため、とくに研究調査した私自身の「ノート」を採録したことは申すまでもありません。就中支那に於ける銀行資本の集積・集中及びその発展の段階、意義乃至畸形的金融資本への成長過程と、その支配形態等に對する研究は、從來全く行はれてゐなかつた關係上、本書では自然ここに重點をおいたことを一言申し添へておきます。勢ひ政權と財閥の解剖に至つても亦、同様で、この項目に關しては、從來の一般的認識または研究——浙江財閥と中央政權との關係——を全然度外視するの態度を採りました。

従つて本書は、本書を構成する體系に於いてその間、理論と、その理論の基調とに多少の非一貫性——幾分錯雜した點——のあることを免れないであらうと思はれます。蓋し斯うした點は、強ひて以上のやうな心構への下に起稿した著述に於いては寧ろ憚むを得ないことでありませう。これらの缺點は豫め讀者諸賢の御諒承を得ておきたいと存じます。

斯くの如くにして、本書が、結局何を説かんとしたものであるかは、ここで事新らしく申上げるまでもありませんが、本書によつて、從來「謎の國」「不可解の國」としてのみ、一般的に認識されてゐた支那が、そこに一たび、科學的に分析・解剖のメスを加ふるならば、決してそれは「謎」でも「不可解」でも、何んでもなく、寧ろ一種の宿命的な、必然性的發展過程を辿つて來たのであり、將來も亦資本の集積・集中の趨勢と共に、既定の方向に趨る

であらうことと、殆ど名狀し難いまでに錯雜した支那現實の諸相も亦、同時にその複雑・錯綜こそが、半植民地支那の經濟集中の表現として必然性を表徴してゐる所以であるといふことを暗示し得るならば、それこそ望外の幸といはねばなりません。

日本に於いても今後、支那——支那問題——に對する科學的理論的研究が、旺盛になつて行くであらうし、自然支那研究の進歩發達が齎らされるであらうと思はれますが——古い支那觀を修正しなければならぬといふことは、今次の西安兵變を機會として一般に痛感されたらしいからであります——若し本書がそれらの研究を刺戟するのに幾分でも役立つならば、本書の使命はそれだけで充分に果たされたものといつて好いでせう。

尙ほ本書に採録した文献乃至諸家の研究は、本文のなかで、各々その出所を明らかにしておきました。

昭和十一年末

濱田支那問題研究所にて

著者 謹識

支那資本機構・財閥・政權 目次

自序	一
第一編 總說	三
第一章 支那の資本主義化とその程度	五
第一節 緒言	五
第二節 農村經濟の崩壊	三
第三節 手工業の凋落と近代工業化	二〇
第四節 近代資本主義化の範圍	二五
第二章 國際資本の支那に於ける支配形態	二六
第一節 緒言	二六
第二節 國際金融資本の支配形態と作用	三三
第三章 民族資本を圍む主要條件	五〇
第一節 緒言	五〇
第二節 民族資本の特異性	五三

第三節 民族資本と封建關係…………… 二五

第二編 支那民族資本機構の解剖…………… 三三

第一章 官僚資本の形成と商業資本の畸形的發展…………… 三五

第一節 緒言…………… 三五

第二節 支那の商業經濟と商業資本…………… 七〇

第三節 商業資本と高利貸資本…………… 七六

第四節 商業資本の支那經濟上に於ける地位・作用…………… 八三

第五節 現段階の商業資本…………… 八七

第二章 工業資本の發展とその停滯性…………… 九四

第一節 緒言…………… 九四

第二節 工業資本の發展過程…………… 九六

(一) 近代工業發展の史的經過…………… 九六

(二) 停滯期を経て恐慌期に於ける概観…………… 一〇九

第三節 近代工業化を圍む主要條件…………… 一二三

第四節 民族工業發展の停滯性…………… 一二九

第五節 現段階の工業資本と産業部門の分散…………… 一三五

第三章 銀行資本の集積と膨脹…………… 一二九

第一節 緒言…………… 一二九

第二節 新式銀行の發達とその現勢…………… 一四〇

第三節 銀行資本の驚くべき膨脹…………… 一五五

第四節 銀行資本の機能と作用…………… 一八四

第五節 銀行資本の發展を圍む主要條件…………… 二〇七

第四章 民族資本の買辦性とその問題…………… 二二九

第一節 緒言…………… 二二九

第二節 所謂買辦資本の特質…………… 二三三

第三節 買辦資本主義經濟の形成とその特徴…………… 二四四

第五章 畸形的金融資本への成長…………… 二五三

第一節 緒言…………… 二五三

第二節 國家銀行資本トラストの形成…………… 二六四

第三節 變體的金融寡頭支配への動向

- (一) 變體的金融資本への成長……………二七五
- (二) 銀行資本の農村經濟支配への新様式化……………二七五
- (三) 畸形的金融資本への成長形態中に於ける經濟建設運動……………二八二
- (四) 分散的産業部門に對する一種の獨占形態の萌芽……………二八八

第二編 支那財閥と政權の分析

第一章 中央政權の統一制覇と獨裁強化

- 第一節 緒言……………三〇一
- 第二節 中央派の獨裁強化とその基調……………三〇一
- 第三節 中央政權の歐米依存性及び獨裁と憲政の關係……………三三三
- 第二章 中央政權を繞る財閥……………三三三
- 第一節 緒言……………三三四
- 第二節 所謂中央財閥の構成分子と中央政府との關係……………三四二

支那資本機構・財閥・政權

第一編 總 說

封建的農村の胎内で分化しはじめた農業、と家内工業とは、それが一定の程度に達したとき、初めて都市經濟を喚び起し、さらにマニファクチュア時代にまでその發展を促進され、次いで大工業時代に入った。そしてこの大工業時代の出現は、一方機械による異常な生産力の發展、即ち産業革命の段階を経たのち、さらに飛躍的な發展を成し遂げ、そこには既に封建制度が打破せられ、封建的自給自足性が潰滅して了つた。以上は先進資本主義國に於ける近代資本性生産化への發展の過程である。然るに支那の資本性生産化は、斯うした必然性運動を過程し得ないで、先進資本主義國の資本主義的支配によつて、外部からの破壊作用と、その壓力とを受けつゝ、直ちに封建的自給自足の性能が解體されるに至つたがために結果づけられたのであつた。即ち自國に於ける封建的農村の胎内で分化しはじめた農業と、家内工業とが、一定の程度に達し、次いで都市經濟、マニファクチュア時代にまで發展しながら、遂に大工業時代に到達したものではなかつたのである。従つてそこには當然半植地的な、半封建的な、且つ畸形的な發展段階を過程せざるを得ないのであつた。斯くの如くにして支那の民族資本の發展は、資本主義的構成と、その發展の一聯の正常的な諸段階を歩まなかつた必然の經過として、殆ど名狀し難いまでの複雑な關係をば支那に齎らした。故にこゝに錯綜した諸關係を解剖するこ

とによつてのみ、支那經濟・政治の本質を掴み得るのである。「支那經濟・政治の綜合的研究」は、先づ以上の點から出發する。但し注意しておきたいのは、支那の資本主義化は、先進資本主義國の資本投下乃至商品輸出の結果であると謂ふこと——勢ひこの支那の資本主義化は、また國際資本主義諸國に對する支那の關係、並びに國際資本主義國の關係をも發生せしめ乍ら、行はれて來たと謂ふことである——。

第一章 支那の資本主義化とその程度

第一節 緒言

「封建社會の經濟組織が進化し乍ら、莊園制度の衰微と共に、都市經濟の勃興を促し、次いでギルド制度の發生と、商業資本の產生を招來しつゝ、生産に對する商業資本の支配力の擴大と、その強化後、大陸發見による市場の獲得、資本の原始的蓄積が行はれ、手工業、家庭工業による生産力の發展と共に、産業革命の段階を経て、生産力の躍進が齎らされた」。

以上は先進資本主義國に於ける資本主義化への主要なる前提条件であつた。然るに支那の封建社會には斯うした資本主義化への前提条件は全くこれを具備してゐなかつた。従つて資本の原始的蓄積も、商業資本の極度の發展も手工業による生産の増加もなく、自然大陸發見への強い要求などは毫も起きず、唯都市經濟の勃興と、手工業の比較的隆興とがあつたのみである。

而かも一面に於いては廣大なる國內市場に恵まれてをり、とくに封建制度の搾取が、歐洲諸國のそれよりもより激烈であつたため、過度の搾取が、商業資本と、手工業の發達を阻礙すること夥しかつたことは謂ふまでもない。従つて支那の封建社會は、全般的には自給自足の上に立脚し、當然生産の増加や、生産方法の改善が起り得ないで、

産業革命に趨るべき準備要件を缺いてゐたのである。

然るに數千年來に渉れる支那の封建社會は、前世紀の中葉以來、即ち國際資本主義の政治的、經濟的勢力が侵入してこのかた、一種の産業革命に似た變化を起し、少くともさうした段階を進めながら、封建的な外被が漸次剥ぎ取られて、既に近代社會化への域にまで飛躍するに至つた。謂ふまでもなく國際資本主義の影響と、作用とを受けながら、支那の社會經濟機構も亦、漸を追ふて特定の近代資本主義化への展開を開始するに至つたのである。以上の経緯に對し、ラディック氏の「支那歴史の理論的分析」では、次の諸項に分類、叙述してゐる。

- (一) 歐洲資本主義の支那に侵入した當時の状態（土地私有が既に存在してゐたか否か。大量の土地に對する佔有形態の有無）。
- (二) 支那國家の起源（イ、封建時代の政權——秦始皇の政制改革、それは商業資本の政權であつた。ロ、大朝の政權と商業資本の關係）。
- (三) 農民政策の建立（農民政府に轉化した原因——王莽の改革、王安石の變法、歴代政權の特質）。
- (四) 歐洲資本主義の支那侵入（武力進攻の結果による。南京條約、天津條約、買辦階級の發生及びその作用、支那の商工業と國際資本主義）。
- (五) 支那の東方日本の勃興（日清戦争と馬關條約——これにより各資本主義國は支那の無能力なることを認識した）。

(六) 露國の必然的東侵（過去の露支關係、露西亞の滿洲に對する野心、シベリア鐵道の建設）。

(七) 獨逸の極東進出（獨逸の統一、發展、その極東進出と露・佛・獨の日本に對する威嚇）。

(八) 國際資本主義の支那植民地化への要望（露西亞の借款、李鴻章等の賣國行爲、租界・債務・鐵道等による侵略政策）。

(九) 上層の改革運動（康有爲の改革論、戊戌維新——その運動の失敗と教訓）。

(十) 下層の反抗運動（義和團の暴動、八國聯合軍の討伐、辛丑條約）。

(十一) 國際資本主義の支那に於ける鐵道建設政策、銀行團の產生とその作用、鐵道と支那の産業。

(十二) 鐵道政策と鑛山の開採、租借地の讓與に至る各國勢力範圍の形成。

(十三) 國際資本主義の支那に於ける工場の開設と、それによる搾取、支那資本主義の發展開始（國際資本主義と支那資本主義の關係）。

(十四) 支那の政權は國際資本主義の壓力と財政の負擔とによつて弱められた（資本主義の農村破壊の間接方法——農村の破壊と賦税の増加）。

(十五) 土地佔有の形成（近代地主の起源と農民の物質的近狀）。——以上辛壘書店出版の「中國歴史の理論的分析」から——。

元來國際資本主義の植民地或は半植民地に對する開發は、その商品の販賣、資本の輸出、原料の採集が主要な目

的であつた。と共に自己の資本の増殖とその壽命の延長とを圖ることに全力を傾注した。従つて斯かる際殖民地乃至半殖民地社會をして資本主義化への過程を辿らしめることは、以上の目的達成の上に於ける根本的な阻礙をなすものであり、この意味から國際資本主義の積極的進出に伴ふ、殖民地乃至半殖民地の資本主義化的發展は、國際資本主義にとつて結局自己の墓穴を掘るに等しい作用を將來づけるものであるがため、これを好まなかつたと雖も、このことは未開國に對する資本主義的進出の齎らす原則的作用であつて、これを絶對的に避け得ない定律であつた。自然そこに國際資本主義の未開國に對する進出を繞つて一種の基本的な矛盾の醸成を忌避し得なかつたのである。而かも斯かる矛盾の局面は、國際資本主義の進出が積極化すればするほど益々激化して行つた。この矛盾と矛盾の激化の限りなき發展こそは、半殖民地支那に對し、その社會經濟機構をして、畸形的な發展段階（半封建的半資本主義化）を過程せしめた基礎的な要素であつたのである。

而して斯くの如き矛盾激化の局面は、さらに國際資本主義の進出に基く作用の一面——即ち未開國に對する資本主義的發展への基本條件の醸成とその發展——と、他の一面——即ち國際資本主義の政治的壓迫力の作用が齎らすところの殖民地乃至半殖民地に對する近代資本主義化への抑壓、封建性の破毀に對する或る程度までの阻礙（寧ろ封建性の保存）——との交錯により、支那社會をして一層その複雑化を加へしめ、一種の特質をすら形成させた。就中かうした特質は、その後少しもその機構を改變しないで現在にまで持ち越されてゐる。

然らば國際資本主義の進出が、半殖民地支那の資本主義化に如何なる具體的な交渉をもちつゝ進展するに至つた

か。——以下李達氏著「中國産業革命概観」から——

支那産業革命概観

- (一) 國際資本主義者の支那侵略の目的は、第一に商品の販賣を、第二には原料の採集にあつたが、この二つの目的達成のために、一斑の買辦と洋商とを利用せざるを得なかつた。そしてこれらを外貨の販賣代理と原料買入れ代理——即ち中間者——たらしめた。このことは支那の商業資本を發展せしめ商業資本家階級を成立させた。
- (二) 國際資本主義者の第三の目的は資本の放出にあつた。資本放出の方式として先づ支那の交通の發展に着手した。それは交通の不發展が商品と原料の運輸に多大の不便を感じしめたからである。それがために不平等條約と當時の封建政府とを利用しながら、支那に於ける交通事業の發展のために借款を供給した。
- (三) 交通の發展には當然鐵と石炭とを需要した。石炭と鐵とを採るには礦山の採掘を必要とした。こゝに於いて國際資本主義者は路權を取すべく、その手段として借款に應じたのである。斯かる借款供給の一面に於いては、また必らず借款を交渉するための官僚が介在し、これらの官僚をして漁夫の利を獲得せしめた。官僚は斯うしてその私囊を肥やし以て官僚資本を形成した。自然そこには官僚資本家階級を産生せしめた。
- (四) 封建的國家は元來が保守的であり、通商に對しても亦兎角その門戸を閉鎖し勝ちであつた。然しながら兵器の不良と戦備の不整頓とその幼稚さの結果遂に外力によつて征服されて了つたのである。こゝに於いて封建的官僚は、これに對立すべく、自然自強の策を求め、外國兵器の精良と機器の精巧なるとに直覺的美望を感じつ

つこれを模倣することに汲々として、先づ軍事工業を創設した。

(五) 然しながら軍事工業は、新式の工業技術を有しない限り成功しない。従つて技術的人材はこれを國際資本主義國に求めねばならなかつた。そこで漸次新式工業の重要性が知られ、同時に兵戦が商戦に如かざるの所以を覺りつゝ、新式工業の企業化が発生するに至つた。

(六) 封建社會の企業家には、素より新式企業的能力がなかつた。自然新式工業企業に對する官僚の唱導が成功するに至らなかつたため、これらの官僚は封建國家を利用することにより、新式工業企業の發展を助成した。官僚民衆の發生は斯うした経過によつて成されたのである。

(七) 一斑の商業資本家は、漸次生産組織を獲得して、家庭工業を起し、手工工場を擴張したが、さらに國內に於ける國際資本主義者の新式企業に刺戟され、進んで近代工業を興した。

(八) その他海外在留の資本家(華僑資本家)は、比較的豊かな資本主義的教訓をとり入れて歸國し、内地で新式企業に従事した。

右は國際資本主義の支那侵略の發展途上に於いて必然的に過程した段階であり、斯くの如くにして支那の社會は、外力の壓迫と、刺戟とにより初期資本主義の域に入つたのであるが、蓋しそれは社會發展の必らず過程すべき段階であつた。

然しながら半植民地は、所謂半植民地であり、産業革命に似た一種の段階を過程して、初期資本主義の機構を

構成するに至つたとは謂へ、到底半植民地たるの域を脱せず、半植民地的資本主義の發展史としての内容をしか具備しなかつた。即ち半植民地の資本主義的發展は、單に國際資本帝國主義によつて助成されたのに過ぎぬからである。従つて現代支那の資本主義は、一面國際資本帝國主義の羽翼の下に於いて相當の發展を遂げ得たと雖も、同時にまた國際資本帝國主義の巨大なる政治力、經濟力の支配によつて壟斷されるところとなり、支那經濟の實權を掌握する可能すらが與へられなかつた。この間支那の新興民族資産階級が、國際資産階級に對立し、支那の所有する新生産國貨が、舶來品の國內に於ける市場を蠶食し得たとは謂へ、これとても亦支那の幼稚なる工業資本は、國際金融資本の競争者でなく、國際資本帝國主義の政治力と經濟力との及び得ないところの時間と空間とに於いて一小部分の睡餘に潤ひ得たに過ぎなかつた。斯かる情勢はもとより半植民地的資本主義發展の必然性であつて、爾來支那社會の新生産力は、早くも既に國際資本帝國主義の生産關係による牽制を受けてそれに制限され、少しも發展の餘地を有しないのであつた。況んや封建勢力と封建制度とが、その發展を阻礙すること著しかつたに於いてをやである。勢ひ現代支那の經濟情勢を觀察するとき、そこには次の幾多の傾向を見出し得るのである。

(一) 新式工業が相當の發展をなしたとは謂へ、それは單に粗工業の段階に止り、尙ほ且つ甚だしき停滯性をもつてゐた。

(二) 農業は現に破産の趨勢を呈し、原料と食糧に於いて夥しき制限を受けつゝある。

- (三) 手工業も亦漸次破産するに至つた。
- (四) 國際資本帝國主義と、國內封建勢力の壓迫が加重しつゝ、生産力は既に限りなき束縛を受け、利潤の獲得とその發展とが至難であつた。

(五) 貧窮の程度が益々加はり、労働問題と、農民問題とが愈々峻烈となつて行つた。(以上「中國産業革命概観」第一章第三節「中國の産業革命」を抄譯)

第二節 農村經濟の崩壊

「資本主義の特徴は、商品の生産と、生産手段の私有と、工賃労働の三つの要素にこれを歸納出来るとせば、この三つの要素が農村に侵入して以來、農村は次のやうな變化を起した。(一)自給自足を以てする自然經濟の農村社會が、資本主義的商品生産の法則の下に於いて、自然に解體するに至り、農民の大部分は、自己の生産物中の剩餘生産物を賣つて貨幣と交換し、再び貨幣を以て農具、肥料及び日用品を購入し乍ら、生活を營んだ。斯くの如くにして農産物の價格が必然的に漸次低落し、直接農民生活に重大な影響を與へた。且つ斯うした交換の過程に於ける——賣買により、農民は商人より二重の搾取を受けねばならなかつた。時には主要生産物が好悪なる投機的商人の投機對象物となり、商人をして莫大な利益を獲得せしめた。その結果農民の困窮により却つて商業の發達を促進した。(二)資本主義要素の一つである生産手段の私有が、農業上に重要な表現となつたのは、土地

の私有であつた。元來土地私有制は資本主義と同時に發生したものではないが、私有者がこれを自由に使用し得るに至つたのと(使用權)、その收益の處分權を得るに至つたのは、資本主義制度の發生後確立したものである。土地私有制の下に於いては借地耕種者は必ず一定の佃租を交付したこと勿論であるが、一方地主の搾取が峻烈であつたため、農民をして普通の利潤を獲得することすら困難ならしめた。同時に耕種の餘暇に營む労働によりて獲得する工賃も亦極めて少なく、これがために農民は生産に對する技術の改良の如き、自然これを顧るの餘裕すらなかつた。尙ほ且つ一方地租を收得する地主はその所得の幾分を農業上の生産技術の改良に割くことを肯せず、さらに有利なる商業に投資し、或はこれを浪費した。さうした結果農業の萎靡不振を加重し、農民の生活は益々低下せざるを得なかつた。(三)工賃労働の發展により、農業收益が工賃の雄厚なるに及ばなかつたのと、小作農は自己の租借地に於ける勤務による僅かな收益のみでは、生活を維持することさへ困難であつたため、隨時にまたは季節的に農業から離れて工賃労働に従事した。工賃労働が農業上に少なからぬ影響を及ぼした所以はこゝにあつた。而かも耕種地の分散により、労働者は常にその工作の種類と、工作地點とを轉換せねばならなかつた關係上、農民は農業労働の品質に對してこれを明瞭に判斷すること能はず、このやうにして農業労働者の能率は自然低下すべく餘儀なくされた。而かも農民に對する搾取の程度は資本主義の發展に隨伴して増大し、時間的延長、工賃の低下により、農民生活は非常に悲惨なる状態に陥つた。勢ひそこには優秀な労働力が生れ得なかつた。また多くのものは都市に走り、工場労働に従事した。

以上は先進資本主義國に於ける資本主義の發展が、農村經濟に及ぼした影響と作用との主要な點であつた。支那の農村經濟も亦さうした資本主義の三つの大きな特質が農村に侵入して以來、資本主義の一般的法則に基づく作用を受けつゝ、漸を追ふてその封建的形態を解體するに至つたことは謂ふまでもない。然しながら支那の資本主義化が、結局半植民地のそれであり、半植民地的の特質を帯びてゐただけに、半植民地的經濟の束縛の下にその發展を過程した結果、先進資本主義國に於ける農村經濟の凋落の程度に較べて、さらにより深刻化し、より複雑化したことを看過出来ない。

即ち國際資本主義の輸出商品が、支那在來の手工業と、半自然的生産方法を粉砕したと共に、他方に於いてまた支那の封建地主と、高利貸資本家とが、農村經濟の解體に伴つて生ずる危険をリスクし、或は農村經濟の崩壊によつて直接、間接に受ける不利益を他に轉嫁するため、從來よりも一層露骨にその搾取を加重したからである。

従つて支那農村經濟——農民——は、かうした封建地主——高利貸による封建的の壓迫力と、國際資本主義の進攻に伴ふ壓力との挟み撃ちに遭はなければならなかつたのである。こゝに支那農村經濟の特質が横はつてゐた。農業國たる支那にとつては、農業經濟が國家經濟の基礎をなしたことが勿論である。國際資本主義が支那に侵入した結果、封建式の生産關係を破壊し、支那の社會經濟を變化せしめたと雖も、さらに國際資本主義自身の包含する幾多の矛盾は、國際資本主義と密接なる聯繫をもつ支那社會に對しても亦、多くの矛盾の交錯を基礎づけしめ、そこに各種の矛盾の形態を表現するに至り、當然支那經濟上に於ける多面性、複雑性、特殊性の諸關係が顯現した。

同時に支那は産業革命の段階を過程しなかつたのと、そのために根本的に封建關係を克復することが不可能であつた等、自然一種の過渡期的な商業資本主義の長期の發展を過程させた。斯くて國際資本主義の侵入以降、資本主義的矛盾は、都市から農村にまで深く普遍し、また一面複雑な商業資本主義の發展に隨伴して各種の矛盾形態をも表示せしめたのである。然らば斯かる特質を基礎として支那農村經濟の破産が如何なる経過によつて展開されたか以下雜誌「自決」第一卷十三期凌青氏の「中國農村經濟問題」から——

支那農村經濟の破産

支那の農村中に於ける搾取の關係と、農村經濟破産の原因とは、支那農村經濟の特質を究明することによつて、明白に決定することを得るのであるが、支那農村中の搾取關係を解説する以前に、先づ農村中に於ける封建的搾取と、資本主義的搾取の區別を明らかにせねばならぬ。封建的搾取の特徵は（一）封建的領主或は地主が農民に對して一種の「外的壓迫を以てする經濟力」を施行しつゝ、農民が地主に對し、完全な服従の地位に墮ち、地主は無制限に農民を凌駕する威權をもつてゐた。農民は實際上（或は名義上）自身の自由を喪失した（この場合に於ける搾取は強迫的な性質を帯びてゐた）。（二）以上の如き力と威權とを根據として地主は、農民の剩餘生産力を搾取したほか、甚だしきに至つては、農民の労働の所得である工資の一部にも侵蝕した。（三）主要な搾取を除くほか、また幾多の附帶的搾取（生産物、勞力、金錢等）をも加へた——等々に代表されてゐた。これに反して資本主義的搾取の特徵は（一）資本主義的農業生産は先づ農業企業家が農民に代替することとなり、斯うした農業企

業家は、土地に投資し、雇傭労働を利用し乍ら、耕作することにより、一定の利潤を獲得しなければならなかつた。然らざればその資本を他の生産部門に投じた。(一)資本主義的農業生産は雇傭労働を求めた。斯くの如き雇傭労働者は、自己の労働力に對する一定の價值——勞賃——を獲得せねばならなかつた。(二)地主の土地壟斷により自由競争を妨礙し、農業と非農業企業間の利潤の平均化をも妨礙した。このために地租が既に地主の絶對所得となり、而かも較好の土地に對して地主は尙ほ等差地租をすら附加した。斯やうにして地主は、土地の私有財産權を以て、企業家の投資の平均利潤としての餘分の一部分を除く、農業剩餘價值を獲得した。それは資本主義農業生産の造成せる剩餘價值を二つの部分(一つは平均利潤として農業資本家の所得となり、一つは地租として地主の所得となつた)に區分する必要があるからである——等々がこれを代表してゐた。支那農村中の搾取關係は、以上のうちのどの種類の形態をとつたであらうか。(一)地主の小作農に對する無制限の「外的壓迫を以てせる經濟力」は、頗る多くの地方に存在し、甚だしきに至つては、小作農に對し終身地主に服従せしめ、餘暇には地主のための奉仕労働をさへ強ひた。小作契約成立の際に於いてその大權は全く地主の手中に操られた。即ち卒直に謂へば地主は農村中の實際統治者たるの地位にすら立つた。(二)地主の小作農に對する搾取は全部の剩餘産物に對する掠取であつたのみでなく、尙ほ且つ小作農の労働によつて所得せる工賃の一部にも侵略した。(三)地主は農戸に向つて幾種かの附加地租を納めしめた。(四)地主を兼ねた富商(商業資本家)も亦、小作農に對して同様の搾取を施行し、或るものはさらに殘酷であつた。(五)貨幣地租は實際上、物納地租の貨幣表示に過ぎなかつたと共に、搾取の實質及びその殘酷さの程度には少しも變化がなかつた——。以上の如くにして支那農村の小作農制度下に於ける搾取關係は、疑ふべくもなく、封建的搾取關係であつた。而かも國際資本帝國主義と、支那封建制度とが結合して、支那の農村中に於ける搾取關係の相互作用を形成した。このことは決して簡單な問題でなく、國際資本帝國主義が、農村中の搾取關係を加重した所以を結果づけたものであつた。いま國際資本帝國主義の支那に對する壓力を解剖するならば、遺憾なくこの間の経緯が、そこに表明されてゐる。勢ひこゝに現在に於ける農村經濟の破産の原因を探究するとき、當然國際資本帝國主義の侵略以後に於いて展開された經濟情勢を基調としてこれを分析、解剖しなければならぬのである。同時に國際資本帝國主義の經濟侵略は、農村中に一種の特殊階級——買辦階級を形成せしめた。而してこの階級の利益は國際資本帝國主義の商品侵略の上に寄托したことは看過出来ない。それはこの階級は國際資本帝國主義の農村の搾取進行中に於ける仲立人となつたからである。國際資本帝國主義が農村より原料を採集し、または農村に商品を販賣するに當り、買辦階級の仲立人としての過程を経過しなければならなかつた。買辦階級の勢力が、國際資本帝國主義の侵略の發展に隨伴して發展したのは、そのためであり、買辦階級の發展と共に、反對に農村經濟の崩壊は愈々急迫するに至つた。

(一) 外國商品の侵入 農業經濟の崩壊は一面に於いて産業の發展に基因してゐた。それは産業企業の發展が農民をして都市の工場に集中せしめるに至つたからである。然しながら支那農業經濟の破産は、都市工業の發展不能が益々これに拍車を加へるに至つた點を看過出来ない。このことは支那農業經濟の崩壊が、國際資本帝國主義

の侵略の致すところであつたのと、封建勢力の存在が、産業發展の一つの大きな障碍をなした所以によつて基礎づけられた當然の歸結であるとは謂へ、一方支那農業經濟の崩壊過程中に於ける失業農民が、既に歸るべき家をも持たぬに拘らず、而かも都市工業發展不能は、これらの失業農民を收容し得ないで、ために失業農民は農村中に於いて不斷に騒動を起すに至つた事實が、この間の經緯を最も的確に證明してゐる。さらに一面に於いて支那の産業は國際資本帝國主義の經濟侵略による嚴重なる壓制の下にあつたのみでなく、國際資本帝國主義の經濟侵略の重點が農村に置かれてゐたため、同時に買辦階級の排斥をも受けねばならなかつた。即ち國際資本帝國主義の商品の販賣が農村を最大の對照となし、原料の吸收も亦農村から直接これを探つた等、この場合買辦階級の大部分が地主であり、その利益は常に國際資本帝國主義のそれと一致してゐたが故に、國際商品は彼等を利用して以て國産商品の販路を強迫的に制止したことが、一層都市工業の發展を不能ならしめた根本的の要素であつた。斯くの如くにして支那の資産階級は、國際資本帝國主義の工業發展への阻止により、及び軍閥の混戦が支那の産業を發展せしめなかつたことにより、遂に農村に入つて地主となるに至つた。自然地主・買辦階級をして都市に於ける、將たまた農村に於ける中心勢力たらしめたと共に、鞏固なる地盤の築造をも、そこに許したのである。

(二) 内戦の影響。循環的に絶えざる内戦は、一面農村經濟の破産を促し、土地問題をして益々峻烈化せしめたのみならず一面産業の發展に限りなき打撃を與へた。即ち戰爭のために企業家の負擔を増加せしめ、産業企業家としては捐税の加重に伴ふ夥しき損失を蒙つた上、また交通に對する影響が商品の流通を阻滯せしめたため、そ

れによる間接的の損失を受けること、さらに著しかつたからである。然しながら斯くの如き戰爭の發生は、封建割據の形態下に於ける必然的の現象であり、半封建的半植民地支那としては到底これを避け得ないものであつた。従つて封建割據による軍閥の混戦は循環的に擴大しながら、産業の基礎を動搖せしめ、都市の産業はまた國際資本帝國主義の侵略に基く牽制を受けつゝ、その發展を停止し、こゝに於いて國際商品のみが、支那農村に於いて獨り強大なる勢力を占め得たのである。勢ひ農村の自然經濟は、漸次貨幣經濟のさらに大いなる支配を受けねばならなかつた。但し農村に於ける貨幣經濟の支配化は、單に商品經濟の擴大であつて、農村經濟は、國際資本帝國主義經濟の支配を受けたのと、とくに斯うした現象自身は支那の封建關係の消滅を齎らさないで、依然在來の舊生産方法と、生産關係の上に、さらに封建的な搾取を加重するに至つた結果、それらによる二重の壓迫を受くべく餘儀なくされた。

(三) 災荒との關係。以上の如き各種の形態による支那農村經濟破産への過程の下に於いて、さらに災荒の頻發は支那農村をして極度の衰退、極度の窮乏に陥らしめた。然しながらこのことも亦、まさに支那農村經濟が各種の峻烈なる搾取を受けつゝある渦中に於いての技術的後退に反映してゐたのである。例へば水災、旱災は頗る適當なる灌漑及び排水の設備と、植林事業の建設等によつて、その災荒の大部分はこれを避け得た筈であり、害蟲による災害は、較好の生産技術及び科學的方法によつて、完全にこれを消滅し得ないまでも、大部分は防止することを得たのであり、荒廢の土地は、農業技術と、科學的方法によつて、土地の肥沃にこれを改進することが

出来、自然生産の増加を促し得た所以である。斯くの如くにして支那農村經濟の生産は、増加しないのみでなく、却つて益々減退の趨勢を加へ、この種の生産の低下は、食糧の輸入に於いて驚異的の増加を示したのであつた（海關の貿易統計を看よ）。これらの諸事實は支那農村經濟の急激なる崩壊の過程を遺憾なく表明してゐる。（雜誌「自決」第一卷第十三期「中國農村經濟問題」を抄譯）。

第三節 手工業の凋落と近代工業化

「資本主義の發展は、ギルド的組織の権力を掘り崩した。そして何よりも第一に生産力の労働を單純化した。機械の應用は今や生産組織に重大な變革を齎らした。それは益々人間の労働を單純化した。小企業は機械を使用する大工場によつて容赦なく驅逐され、農村の副業も亦漸次に破壊された。少數の大資本は多くの小資本を倒し、微弱な親方は無論のこと、自ら産業資本家たらんとした親方たちも、この競争に於いて、もとより巨大な資本を擁したる商人の敵ではなかつた。現實に大工業資本家となつたものは、以前の商人階級であつた。生産を支配してゐた商業資本は却つて産業資本の従僕たる地位に成り下つた。工業資本の勝利によつて近代的資本主義の時代が開かれる」（山川均氏著「資本主義以前の經濟史」から）。

謂ふまでもなく、先進資本主義國に於ける資本性生産化は、その個々についてはその形態と過程とに於いて多少の差違こそあれ、大體以上の如き過程の下に發展の段階を進めたのである。

支那に於ける近代資本主義化への發展過程も亦、ほゞ右のやうな經過を辿つた。即ち手工業が家内工業に、家内工業からさらに近代的工業への發達を示現しつゝ、農村に於ける手工業が漸次解體されて行つた。然しながら支那の近代工業化の發展は、前に叙述した如く、生産の増加と商業資本の發展に基く必然的の自轉運動——産業革命——の段階を過程せず、ただ國際資本主義商品の作用が、封建的農村經濟を分化せしめたのに過ぎなかつた結果、手工業の解體も、家内工業への進化も、マニユファクチュアの形態も、大工業による生産の段階も——換言すると封建社會から近代工業化に至るまでのその間に於ける各々の段階——何れもこれをはつきり區劃づけることが出来ないであつた。このことは各々の發展段階に於いて、内部的な因果關係の強烈な作用が發生し、舊が減んで新が起つたのではなく、外力の影響と作用とが遂に近代工業時代を現出せしめたのであるからであつた。従つて資本性生産が特徴づけられるに至つた時代に於いてでも、そこには依然手工業の生産形態も、マニユファクチュアの生産形態も残され、甚だしきに至つては頗る濃厚な封建的殘滓すらが未だ解消されないのみでなく、相當強烈に作用してゐるのである。

と謂つたからとてこの場合、國際資本主義商品の侵入は、その形態と作用とに於いて支那資本主義化への前提條件（主として生産の増加と同一の作用と結果）を齎らしたことは看過出来ない。而かも支那は天恵豊かに殆ど無限に近いまでの重工業原料と、豊富な輕工業の原料とに於いて、何れも資本主義發展への必須條件を具備してをり、人口の多數、領土の廣汎、海岸線の延長も亦、資本主義發展の必要條件に適應してゐた上、國際資本主義商品の侵

入に次いで、國際資本による企業化が實現し、一層資本主義化への發展を助長したに於いてをやである。

斯くて支那に於いても亦、近代資本主義化への發展過程が特徴づけられ、就中手工業の凋落が益々その趨勢を顯著ならしめたのに、何んの不思議もなかつた。然らば支那に於ける手工業の凋落は如何なる過程の下に展開されたか——以下「中國産業革命概観」から——

手工業の凋落

支那に於ける手工業の組織は、産業革命期以前の英國の手工業制度と相似てゐた。即ち手工業生産は年期的の徒弟制によつて行はれ、主要な生産はすべて家内作業場となされたのである。作業場は多くは親方の家庭または店舗で、工匠と徒弟とが同一に操作した。徒弟の年期は各一定し、三年、四年、五年、七年等に定められ、この一定の年期内に於いて徒弟は工作に従事しつゝ手藝を學習して工賃の支給を受けなかつた。唯親方から最低限度の衣食住を供給されたのみである。而して徒弟は一定の年限後工匠となり、自由に職業に従事し得たが、工匠の工作條件は手工帮（ギルド）の規定に照らして實行した。然るに以上の手工業の中に於いて、漸次簡單なる機械の使用が普及するに至つた。例へば各省に於ける織布手工業は、従來簡單な手織機を使用してゐたが爾來足踏機の採用に轉じ、それが急激に普遍した等それである。また製紙業の旺盛な地方は近年比較的新的の製紙法に改用し、頗る高率な利益を擧げてゐる。唯工場濫設の弊が破産の危険を多からしめてゐる缺點なしとしないが——。これを要するに支那の家内工業は、既に舊式手工業の域を踏み越へて、簡單な機器を利用する家内小工業の段階に過

程したのである。さらに別の方面に於いて現在外國資本の支那境内に於ける新式機械工業の發展を見るに至つて以來、國內資産階級の新式企業も亦、漸を追ふて發達し、手工業者の生産品はこれらに壓倒されるに至つた。このことは當然の経過であつたとは謂へ、加ふるに舊式手工業組織の缺點（徒弟に工賃を支給せざる勞働形態の如く）は、加速度的に手工業組織を破壊し、自由競争を以て根本原則となす近代工場に集中せしめるに至つた。これがために支那社會の紐帯をなす大家族主義と、ギルドの社會連帶的道德とが破壊され、自由勞働者階級を發生せしめ、階級意識が支那社會の中に侵入した（李達氏著「中國産業革命概観」第三章「手工業と手工業凋落の過程」第二節「手工業の凋落」抄譯）。

而して以上の手工業の凋落及び支那の近代工業化が、國際資本の支那に於ける跳梁跋扈せる形態のなかに於いて如何なる地位を占めてゐたかは、支那の工業發展が結局國際資本主義の侵入に隨伴しながら過程した點、及びその理論的基調を分析することによつて、自ら判明するのである。この間の経緯に關し、任曙氏編著の「中國の工業」は、次の如く解説してゐる。

「我等は支那工業資本が自發的の發展でなく、外力的發展（外力の作用とその刺戟とによつて來たした發展）であると認める。それは一面半植民地の地位を根據としてこの問題を觀察すると共に、一面に於いて工業資本の發展が廉價の勞働を基礎として成されたと謂ふ點とによつて考察した結果からである。即ち問題の本質はかうである。（一）歐洲資本主義の侵入しない以前に於いては、支那は半自然的經濟の制度であり、商業が相當發展したと

雖も、生産組織と生産手段とが異常なる落伍を示現し、支那の歴史上或る一つの歴史的時期に於ける相對過剰人口の形成が、同時に現代の如き労働後備軍にまで延長しなかつた。このことは手工生産が人手を需要すること多く、従つて根本的にこれらの過剰人口を生産關係から驅逐するまでに至らなかつたと共に、國內外の市場の未擴大はまた生産方式を根本的に改變することを不可能ならしめたからである。故に最近百年前の支那の工業は自發的な發展をば起し得なかつた。(一)歐洲資本主義の侵入は本質的に歴年の生産關係を破壊し、漸を追ふて舊手工生産を解體した。自然在來の手工生産者は、次ぎ次ぎに生産組織の中から驅逐され、そこに廣大な過剰人口を形成するに至つた。彼等は最初國際資本關係機構の建立を助成する一要素となつたが、その後外來の投資と、内地の蓄積が相當の數量に達し、また政治、經濟の侵略の刺戟と、新技術と、新生産手段の輸入とにより、全く労働後備軍の地位に墮ちた。然しながら一方彼等はその生命の延長を必要としたがために、苛酷な労働條件を接受して、そこに労働後備軍の地位から新しい生産關係に加はり、支那境内に於ける工業資本の柱石となつた。(二)こゝに於いて分業の發達の結果、廉價労働者は、單に剩餘價値の源泉となつたのみでなく、また國內市場の一面を構成したがために、高度の利潤の基礎ともなつたのである。斯くの如き廉價の労働と、高度の利潤とがなければ、而かもその不順利な客觀條件の下に於いて、的確に支那工業の發展は望み難いことであつた。斯うした廉價労働と、高度の利潤の主觀條件によつて、客觀條件が極めて不順利であり、關稅の自主が不能であり、舶來品との競争に於いて頗る不利であつたにも拘らず、支那工業の發展が相當の程度に達したのである。而してこの主觀

條件の充實は、歐洲輸入商品の結果であり、商品を以てせる破壊と、これに次ぐ資本關係の建設にあつたことを看過出来ない。こゝに於いて支那境内の工業は、支那の植民地化への進展中に於いてその發展を過程したのであつた。自然それ自身の發展も亦植民地化の順序によつて進んだことは調ふまでもない」(「中國の工業」四「外鏢的發展と廉價労働の主觀條件」から抄譯)。

第四節 近代資本主義化の範圍

以上の各節に概観したるが如く、支那の近代資本主義化への發展過程は、國際資本主義の作用と、影響とを受けつゝ、その間相當の程度までに、工業資本の構成と、商業資本の成長及び銀行資本の集積等々の諸形態を現出したことは周知の通りであるが、然しながらそれは頗る制限的な、且つ畸形的な發達でしかあり得なかつたがために、大體次に指摘するが如き、諸條件を具備しながらその段階を進めたのであつた。従つていま支那の近代資本主義化の範圍を瞥見しつゝ、この點——その具有する諸條件——を明らかにしておきたい。——以下「中國産業革命概観」から——

「支那の産業は、初期資本主義の過程に踏み入つたと雖も、未だ粗工業の段階に停滯してをり、支那の工業資本は、國際資本主義の政治力、經濟力の割據の下に處して、それによる桎梏から脱すべく努力したに拘らず、それは、なか／＼容易なことではなかつた。さらにこれを他の一面から見ても、支那の工業資本家は、外國資本との競

争の必要上、資本の結合、集中の趨勢（例へば華商紗廠聯合會の如くに）を現出するに至つたとは謂へ、斯うした工業資本の集中は、國際資本帝國主義の盤据する支那市場のなかに於いては、單に滄海の一粟に過ぎなかつたのである。従つてその結果國內の小資本を壓倒する力をこそ發揮し得たれ、國際資本帝國主義との競争の力は著しく渺々たるものであつた。但し商業資本の作用に至つては、工業資本に比較して、その趣を異にした點があつた。それは國內の新式工業の甚だしき不發展により、商業資本家の營むところのものは、外貨の取次販賣と、原料を國際資本家に供給する仕事に重きを置き、自然國際資本帝國主義下の仲立人となつて了つた事實に徴して、さう謂ふことが出来るのであり、而かもその所得する利潤は、工業の利潤よりも遙かに高度であることを失はなかつた。勢ひ同時に全國の小商業資本家と連絡して全國經濟の動脈を形づくり、地方の小商業をこれに隨着せしめることによつて、その發展をも助長した。商業資本が獨り畸形的な發展を過程するに至つた所以はこゝにある。とは謂へ商業資本の斯うした畸形的な發展は、その作用に於いて、國際資本帝國主義の支那農民に對する搾取に代替することにより、自身の成長をも、促進したのに過ぎなかつたのである。僑商資本（華僑資本）と、歐洲最初の商業資本とが頗る相酷似してゐた。彼等は國外で蓄積した資財を持つて歸國し、國內に於ける生産組織に加はり、漸次工業資本の集積にまで進んだのであつた。そしてその經濟實力に於いて、國內商業資本家に比し、多少の優れた點を有してゐた事實を注目しなければならない。新式銀行資本は、近代的都市生活の需要に適應して發生したものであつたが、全國の大市場にこれを流通せしめることが出来ず、同時に工業に對して、その資本を供

給することを得なかつた等、單に銀行の經營を利用しながら、商業に投資し、官僚の預金を吸収したのみに止つた。とくに彼等のなかの大部分は、投機事業の專營に趨つたのである。いま以上の要項によつて我等は支那經濟の情勢を次の諸傾向に區分することが出来る。

(一)農村經濟は、特殊の農産原料に於いて稍や發展したのみ、食糧の生産に著しき制限を受けつゝその破産状態をして益々顯著な趨勢たらしめた。(二)新式工業が漸次發達し、資本集中の趨勢を顯出せしめたと雖も、その生産力は大いなる制限を受けた。(三)舊式手工業の凋落につれて、新式工場工業が幾分の發展を見せたと雖も、これまたそれ以上に發展の可能がなかつた。(四)大商業が急速なテンポを以て發展したに拘らず、それは結局外國資本に依據せねばならぬ畸形的な發展でしかあり得なかつた。(五)銀行事業は投機の性質に富んでゐた。(六)商業の偏畸的發展と工業進歩の停滞性。(七)失業者の増加が、廣大なる産業豫備軍を形成した。(八)生産事業の困難に拘らず、非生産事業は却つて過度の發展を示し、このことは資本に生産的現象のない所以を顯出した。(九)六、七、八の三種の現象は多くの資本の政治的投機に作用し、失業者が兵匪に變ずるの現象を形成した

〔中國産業革命概観〕第五章「中國境内の資本主義の發展」第三節「中國産業の前途」を抄譯。

第二章 國際資本の支那に於ける支配形態

第一節 緒言

「自由競争が完全に支配してゐた舊資本主義にとつては、商品の輸出が典型的のものであつた。獨占が支配してゐる最新の資本主義にとつては、資本の輸出がその特徴となつてゐる」如く、資本主義諸國の支那に對する進出は、商品の輸出から、産業的資本の輸出に進み、現在さらに金融資本の支配にまで進展しつゝある。

「金融資本が後進國に向つて爲すところの産業資本の輸出は、該後進國の政府に對する資本の貸付、及びその條件としてのさまざまの利權の獲得と密接に結びついてゐる。例へば鐵道敷設權、港灣使用權、鑛山採掘權、森林伐採權等々の如く——。そしてこれ等の進出は、國家と同化して「外交」を自己に奉仕せしめる金融資本の獨占でなければならぬ。資本輸出が發展すればするほど、そして金融資本の利害が、後進國の政治經濟と密接に結びついて來れば來るほど、後進諸國はますます深く、經濟的に隷屬せしめられ實質上の屬領たらしめられねばならぬ(中略)。獨占的金融資本が登場し、その不可避的な政策としての資本輸出が發展するにつれ、半開國や後進國に對する政治的態度に重要な變化が生ずる。單純なる貿易の時代に於いては、彼等に對する先進國の關係は、主として狹義の經濟の範圍に止り、彼等の政治的社會的構成への干渉は、あまり行はれず、影響も亦少なかつた。

しかるに資本輸出の時代となり、鐵道の敷設、土地の經營、港灣の建設、鑛山の採掘等が行はれるやいなや「秩序の維持」は、もはや「半開後進國」に委せて置けなくなり、直接の干渉支配が必要となる。この必要とそれに基づく外交的、軍事的努力は、一方では先進資本主義國と、半開後進國との間の隔執を生み、他方では競争的な先進資本主義國をば、相互の衝突へと導き入れる。そしてこの關係は、時とともに益々緊張する。新たに半開後進國に輸入されたる資本主義は、その壓迫によつて彼等が國民意識を喚び覺まして、強く侵入者に抵抗せしめると同時に、それ自身もたらす經濟的發達によつて、彼等が抵抗の力と手段とを増大する。かつては先進資本主義國の理想であつたところの經濟的文化的自由のための統一的國家の建設は、今やこれらの半開後進國の國民の努力の目標となる。かゝる獨立運動と共に資本國の資本は、その最も有望にして價值ある搾取地域に於ける自己の存在を脅かされ、ますます武力に依頼することに依つてのみ自家の支配を維持しなければならぬ。自己の獨立的支配を資本輸出によつて全世界の上に確立させんとして鬭争する。各國金融資本は、世界の隅々にまで自己を擁護してくれるところの強大なる陸海軍を有する強大なる國家權力を欲する。海外に投下された資本にとつての最大の祝福は、當該地域が自國の國家權力の直接支配下に持來される時に實現される。その時にのみ獨占は完全である。最後の言葉は征服であり、併合である」(猪俣津南雄氏著「金融資本と帝國主義」から)。

國際資本の支那に對する進出も亦、まさに以上の如き法則の下に於いて行はれ、且つ發展したことは謂ふまでもなく、國際資本主義の支那に對する進出と、その影響及び作用に關しては、前章に於いても各節でこれに觸れたた

め、多少重複する點なしとしないが、その發展段階に對して、これを支那民族資本に及ぼした作用を考慮し乍ら叙述することゝしよう。——以下雜誌「文化批判」第二卷、第五期金海如氏の「轉形期中國經濟の特質」から。——

國際資本の支那進出とその影響

初期の時代に於ける資本主義列強の支那經濟上に齎した作用は(一)その過剰工業商品を支那の都市と農村とに進出せしめて、恣に支那の封建經濟を浸蝕した。(二)その價廉物美の商品は、恣に支那の商品を排斥した。(三)この場合資本主義列強は、大部分自由競争主義を採りつゝ、支那の資本主義經濟の發展に對しては比較的壓制的でなかつた——。然るに一八九五年の日清戰爭以來、馬關條約の締結後、資本主義列強は、支那に對し一致して侵略的攻勢に出で、同時に種々の特權を要求し、借款の強迫、鐵道の建設、勢力範圍の劃定、鑛山利權の奪取、租界と租借地の設定等々を敢行の上、各大通商口岸に工場を設置した。このことは一面支那の民族企業をしてその順調なる發展を遂げ得ざらしめたと共に、別の一面に於いて、民族企業は却つてそれによる強烈な刺戟を感受したのであつた。従つて一八六二年から一九〇三年に至るまでの間に於いては、これを支那の民族資本主義發展の第一期と稱すべく、大體次の如き特徴を呈現した。(一)資本主義列強の支那經濟に對する作用は、相對的に支那の民族企業の發展を阻止し、乃至これを排斥した。然しながら支那の民族企業は、さうした阻止、又は排斥を受けたのち、發展への段階に躍進することが出來た。それは資本主義列強は、當時工業資本主義の段階に踏み止つてゐたため、市場の奪取と、商品の販賣とを主要な任務としてをり、本質的には自由競争的であつたからであ

る。(二)支那の民族企業の發展は、官營企業から、官民合辦企業の時代を経過した。このことは支那の資本家が大部分封建勢力との結合から轉向し、然るのち、民族資本主義者と結びつき乍ら、遂に一體となつたからである。(三)資本主義列強によつて導かれた支那の資本主義經濟は、専ら輕工業に於いて相當の發展をなし得た。とは謂へ、それによつて支那は、既に相當の程度まで、産業革命を過程するに至つたと稱し得るか、否かは、夥しい疑問であらねばならなかつた。

然るに第二期の段階に入るに及んで資本主義列強は、工業資本の段階から金融資本の段階にまで進み、本質的には自由競争から獨占到至り、そこに資本帝國主義を形成した。國際資本帝國主義の支那進出に對する作用と、影響とは、第一期時代に較べて、全くその趣を異にした。即ち民族資本主義の發展を阻止したのであつた。これを換言すれば、相對的の意義から變成して、絶對的意義をもつに至つたのであり。資本帝國主義が、經濟上既に獨占の形態を形成し、次植民地下に於ける民族資本主義經濟に對しては、徹底的にこれを抑壓しつゝ、相對から絶對へ、自由競争主義的から獨占形態へと進展しながら、とくに政治的にも亦、必然的にさうした政策を採るに至つたのであつた。さらに資本帝國主義の主要な特徴は、金融資本を以てする壟斷にあり、金融資本の輸出を、資本帝國主義の内容となした。斯かる時期に於いて、設立された支那に於ける外國銀行は、少くなく、何れも經濟上、支那經濟を統制せんとする企圖であつた。但しこの期間に於いて、支那の民族經濟は、既に相當程度の發展を來しながら、一九一一年に於ける政治變動(第一次革命)の基礎をすら造成するに至つた。然るに斯うした政治變動

は失敗に終つた。その主要な原因は、(一)民族資本主義經濟が尙ほ著しく脆弱であつたのと、(二)國際資本帝國主義が、直接或は間接に、封建勢力を扶助しつゝ、支那の民族經濟の發展を阻止した——等々の結果によつた所以である。一九一四年には、世界大戰が発生し、支那の民族經濟の發展に絶好の機會を與へた。爾來、輕工業を主とする民族企業の隆興を促し、一般産業の進展と共に、輸出入貿易額も亦漸増しつゝ、支那には既に幾多の經濟發展の基礎を作つた。勢ひ斯かる情勢の下に於いては、民族經濟の隆興が必要であつた。この點に於いて、一九二五—一九二七年の支那に於ける大革命は、斯くの如き經濟條件の發展に適應して產生したのであつた。即ち民族經濟の發展は、對内的には、封建經濟の排斥、對外的には、國際資本帝國主義經濟への抗争が政治形態の上に反映し、遂に反帝、反封建に趨らしめたのであつた。自然そこに國際資本帝國主義の次殖民地經濟政策が生れ、民族經濟の阻止方針を採つた所以である。支那の民族經濟の、國際資本帝國主義經濟に對する、抗争に向つては、國際資本帝國主義は死力を盡くして、これに對抗し、以て民族經濟の發展を阻止したと共に、支那をして漸次殖民地化せしむべく、これを誘導するに至つた。その結果、國際資本帝國主義は、その目的を完成したのである。而かもこのことは、直接經濟上に於いてのみに止らず、政治上に於いても亦、同様の舉に出で、さらに封建勢力を扶助し、延ひてそこに封建的經濟の殘滓を保存せしめてゐる。斯くの如くにして支那の民族經濟は、斯うした二重の束縛の下に、當然その發展を阻止され、遂に落伍せざるを得なかつた。この時動勞無産大衆の組織運動(國民黨の國民革命運動が容共政策の下に共產黨を抱擁してゐた結果、當時の革命運動は殆ど共產黨によつて指導さ

れてをり、尙ほ且つ、共產黨の勢力は益々増大するに至つた)の隆興は、さらに民族經濟の構成分子に莫大な脅威を與へねば熄まなかつた。従つて民族資本家階級は、國際資本帝國主義及び封建勢力と結び、これに對應するに至つた。即ち民族經濟の本來の面目が失はれて、買辦經濟となり、同時に支那はさらに一步を進めて殖民地化へのコースをすらとるに至つたのである」(「文化批判」第二卷、第五期金海如氏の「轉形期中國經濟の特質」三「中國資本主義經濟發展の史的經過」の各個所を任意に摘錄抄譯)。

第二節 國際金融資本の支配形態と作用

國際資本主義が、金融資本の形態をとり出してからの、支那に對する進出は、多々益々積極化し、同時に峻烈の度を加ふるに至つたこと、さきに略述した通りであるが、如實の國際金融資本の積極的進出の結果は、現代支那の社會的經濟機構の下に於いて、その政治上、經濟上、それらのあらゆる部門をして、完全にこれを國際金融資本に隷屬せしめて了つたのである。

然らば、國際資本の支那に於ける完全なる支配形態は、如何にして形成せられ、且つ發展するに至つたか。——以下章乃器氏の「國際投資市場の中國」から——

「はしがき」 支那は世界の支那となつたと謂ふ。然しながら、この世界的と稱する言葉は、獨り支那のみでなく、現代の地球上に於ける、如何なる國と雖も、恐らく世界的潮流の支配を受けない國があらうか。斯くの如く

にして「支那が世界の支那となつた」と謂ふ言葉に對しては、「支那は列強支配の争奪下に於ける支那となつた」と認識せざるを得ぬのである。即ち支那が一つの半植民地國となるに至つたこと、それ自體こそが「支那が世界の支那となつた」所以である。この意味に於いて、列強の所謂「對支投資」は、彼等の支那支配に對する一種の方式であり、または一種の手段なのである（下略）。

「國際投資と戦争」 國際投資は、列強の支那支配の一種の手段であるがために、國際投資と、支那の植民地化とは、一種の密接な聯繫が發生するに至つた所以である。而して列強の對支投資に關しては、レーマー教授の「外人の在支投資」の一著を紹介せざるを得ない。我等はその觀點に對して、必らずしも共鳴するものではないと雖も、その蒐集した數字を採用するに躊躇せぬものである。即ち彼の「外人の在支投資額の趨勢」を示した數字によると、左の如く、

一九〇二年.....	七八七、九〇〇、〇〇〇弗
一九一四年.....	一、六一〇、三〇〇、〇〇〇弗
一九三一年.....	三、二四二、五〇〇、〇〇〇弗

と、これを根據として、次のやうな結論を下してゐる——「義和團事變より歐洲大戰に至るまで、外人の在支投資は、一倍に増加し、歐洲大戰より、滿洲事變までの外人の在支投資は、さらに、また一倍の増加を示した」と。レーマー教授の、斯くの如き不用意のうちに出た結論は、我等に一つの好個な暗示を與へるのであつた。そ

れは外人の在支投資の數字的な増加は、戦争爆發のバロメーターをなしてゐると謂ふことである。斯くて自然我等をして、列強の半植民地に於ける投資の争奪は、戦争の唯一の素因である所以を、認識せしめねば措かぬのであつた。このことは資本輸出の増加は、疑ふべくもなく帝國主義の成長を代表し、帝國主義の成長が、そのある一段階にまで達したとき、必然的に世界戦争を造成せしめるのが、避くべからざるところの因果律であるからである。と共に外人の在支投資の基礎の進歩も亦、事實上、戦争によつて造成されたものであつた。阿片戦争以前に於ける外人の在支投資が、頗る微弱であつたが、支那が一八二四年阿片戦争に失敗してから、江寧條約により、香港を割讓し、廣州、福州、厦門、寧波、上海を通商港として開港して以來、外人の支那に於ける投資の基礎は安定するに至つた。一八五七年、英佛聯合軍の役による天津條約の締結後、さらに牛莊、芝罘、臺灣、瓊州、淡水、江寧、鎮江、漢口を通商港として開港し、一八六〇年英佛聯合軍が、再び北京を侵した際締結された北京條約によつて、宜昌、蕪湖、温州、北海、重慶を通商港として開港した。かうした結果、外人の在支商業投資の範圍は、益々擴大されたのみでなく、海岸より内地にまで深く侵入するに至つた。爾來帝國主義の植民地と半植民地に於ける投資は、商業投資から發展して産業投資にまで達した——このことは彼等が、商品輸出から發展して、資本輸出にまで到達した順序と、密接なる聯繫をもつてゐたのであり、それは必然的の過程でもあつた——。一八五七年の米支天津條約に於いて各國の内河航行權を許してのち、列強の支那に於ける航業投資は、既に漸を追ふて發展し、同時に商埠地に於ける公共事業も亦、ぼつぼつその發展を開始した——例へば上海の大英瓦斯會社

が、一八六三年に成立した等、それである——。然しながら斯うした微弱な産業投資の基礎が、當然彼等の發展に寄與すること少なかつた。従つて一八九四年日清戦争後締結された馬關條約によつて、沙市、蘇州、杭州等を商埠地となさしめたほか、頗る重要な條文——即ち外人の通商口岸に於ける工場設立權——が加へられたのである。そこで列強の支那に於ける産業投資の基礎が、彌よ安定するに至つた。一八九五年から一九一四年に至るまで、外人は續々として工場を設立したのは勿論、鑛權と路權の擡奪に於いて、十分に尖鋭化し、鐵道の外人直接經營によるものには、膠濟、滬越、九龍等々があり、その間接投資にかゝるものには、北甯、正大、汴洛、滬寧、廣九、滬杭甬、津浦、道清、奧漢等々があり、開鑿その他の炭礦が採掘された。その他政治投資が繼續的に行はれ、露佛借款、英獨繼續借款、クリスプ借款、善後大借款等々がこの期間に成立したのである。斯くの如くにして列強の對支借款の最盛期を現出した。一九一四年の歐洲大戰の爆發當時は、列強の對支投資争奪に既に端倪すべからざるものがあつた。元來當時の對支投資の磋商は、英、佛、獨の三國銀團によつて行はれてゐたのであるが、一九一一年頃、米國の對支投資に對する利益の分前にあづからんとするの欲望が、三國銀團への加入を要求せしめた結果、その後英、佛、獨、米の四國銀團が生れ、次いで日、露の二國も亦、四國銀團が、對支善後大借款を磋商中、その目的が、幣制の改革及び産業の發展を内容とし、範圍が滿洲に及んだため、當然これに参加を要求するに至つた等、遂に六國銀團が形成されて來た（但しその後米國がウキルソン大統領の反對と共に、退出したため、また五國銀團となつた）。斯うした経緯によつて列強間の衝突が、益々激化し、銀團の一再ならざる

改造に伴つて、愈々それが表面化されて行つた。のみならず、白國の京綏鐵道に對する一百萬磅の投資と、英國クリスプ會社の一千萬磅の借款締結等々、彼等が如何に對支投資に熱中してゐたかを證明するに足るものであつた。而かも歐洲は帝國主義の淵藪であつたがために、植民地と半植民地内に於ける斯くの如き衝突は、必然的に、歐洲に於ける衝突の一焦點たらしめるに至り、それがために世界戦争が歐洲を舞臺として爆發したのである。我等は國際對支投資と、戦争との聯關に於いて、固より投資の争奪が、戦争を爆發せしめた唯一の素因であるとは、斷定するものではないが、戰場が支那でなかつたがため、斯うした極東問題の破裂と、支那とに相關聯するところがなかつたとは謂へないのである。

「列強の對支投資の趨勢」 周知の如く、一八九五年から一九一四年に至る、列強の對支投資の方式は、商業投資の發展から、産業投資と、政治投資を経過して、二十年の飛躍ののち、さらに行き詰りに際會せざるを得なかつた。その歐洲方面に於いて、表現したものは、大戰であり、亞細亞方面に於いて表現したものは、日本の二十一箇條の提出であつた。二十一箇條の要求は、彼の直接投資の範圍を、通商口岸及び鐵道區域より擴大して、支那の内地まで至らしめんとするものであつた（中略）。斯うして列強の投資の發展は、帝國主義が、半植民地に於ける政治的支配權を取得することにより、投資の保護をなさんとするにあつた。従つて帝國主義はこの種の政治上の支配權の取得に對し、さらに大いに努力した。一九一四年より、一九三一年に至る列強の對支投資の發展の最も急速であつたのは、英、日、米の三國であり、佛國の増加したところのものは、頗る微弱たるを失はなかつた。

その他の各國は、寧ろ減退したのである。

	一九一四年	一九三一年	増加倍數
英國	六〇七、五〇〇、〇〇〇	一、一八九、二〇〇、〇〇〇	一・九五八
日本	二六九、三〇〇、〇〇〇	一、一三六、〇〇〇、〇〇〇	五・一七七
米國	四九、三〇〇、〇〇〇	一六九、八〇〇、〇〇〇	三・九九〇
佛國	一七一、四〇〇、〇〇〇	一九二、四〇〇、〇〇〇	一・一二三

(單位 米弗)

以上の數字が明らかに我等に告げてゐるが如く、現實の太平洋問題の内容は、十七年間に於ける間の對支投資の増加が五倍に達した日本が、支那の獨占を企圖しつゝあるに對し、その對支投資が約四倍に達したところの米國が、さらに一步を進めて西太平洋の事態の發展に注意しつゝある事實に表現されてをり、この間に於いて對支投資の増加が二倍に達しない英國は、支那に於ける、その第一位たるの地位から漸次すべり落ちんとしてゐるのである。太平洋問題の主角が英、米、日の三國にのみ残されてゐる點は、こゝに存してゐる。

「時代的區劃」 我等は前述の事實に基いて、列強の對支投資の歴史に對し、次の如くこれを時代的に區劃するこゝとが出来る。(一)一八四〇年の阿片戦争後、通商口岸の開港の方式の下に於いて、列強は對支商業投資の基礎を奠定し、商業投資の範圍が、爾來幾度かの戦争の結果によつて、通商口岸の増開の形式の下に、海岸から内地にまで伸展した。斯うした發展は、長江上流の重慶をまでも、その渦中に投ぜしめねば熄まなかつた。(二)一八九四

年の日清戦争後、列強は通商口岸に於ける工場設立の特権を取得し、ここに列強の對支産業投資の基礎を奠定した。同時に、支那の國權の削弱と共に、彼等の支那に對する政治投資の基礎を鞏固ならしめた。(三)一九一四年の歐洲大戰以後一部分の帝國主義——獨、露その他——の支那に於ける勢力の没落と、戦後の歐洲大陸に於ける資金需要の急迫とは、帝國主義間の在支勢力の對立の矛盾を緩和した。そしてこのことは、列強の在支投資の形態をして、寡頭的發展を過程せしめた。然しながら、一九二九年以後の恐慌は、この發展をして、また阻礙せしめた。(四)一九三一年後、日本の對支勢力が、頗る活潑となつた。——斯うした情勢の下に於いて、外人の在支投資の方面をして同時に畸形的な發展を過程せしめた。長江流域に於ける投資は、帝國主義の最も堅強な根據地上海に集中し、支那中部の經濟狀況をして極度の不平衡を特徴づけた。斯うして、一面に於いては、帝國主義の支那に對する投資の逐鹿は、分散、對立から寡頭となり、寡頭が、さらに獨占の趨向を生み、別の一面に於いては、投資の方式が、商業投資の發展から、産業投資或は政治投資にまで延長し、さらに別の一面に於いては、投資の範圍が、海岸から發展して内地に達し、内地からさらに奥地にまで侵入したのである。この種の趨勢の下に於いて、誰れかよく、支那が國際投資の進展と共に、さらに一步を進めて植民地化への趨向にある所以を否認し得るものがゐるであらうか」(民國二十四年四月發行「世界智識」に於ける章乃器氏の「國際投資市場の中國」を抄譯)。

x

x

國際金融資本の支那に於ける支配形態及びその作用を解説したついでに、金融資本の使命、銀行資本の活躍の形

態を管見せんがため、左に王承之氏の「中國金融資本論」から、次の一節を引用しておきたい。

「**外國銀行團の威力**」 國際金融資本は、いまや支那に於いて、最高の支配的地位を占めてゐる。そして政治上、軍事上に於ける外國の優勢と同じ程度で、最も根強い勢力をそこに建立してゐるのである。而かも現在に至るまで、その「黄金殿堂」は、ただの一度も動搖し、或は傾斜だにしなかつたこと程左様に、鐵壁の如き堅固さをもつてゐるのである。近年國際資本帝國主義は、その内部危機の増大と共に、植民地に對する侵略を益々強化し、自然その政治的威嚇と、軍事的進攻の下に於いて、「吸血管」たる國際金融資本は、さらにその侵蝕作用を加重するに至つた。このことは單に支那をして政治的軍事的に植民地化せしむるのみに止らず、尙ほ且つ經濟金融の方面に於いて、國際金融資本に隷屬せしめなければ熄まないまでの意義と作用をもつてゐる所以を看過出來ぬのである。而してここに謂ふところの國際金融資本とは、その代表的なもの、英、米、日、佛、伊、獨、和蘭、白、等の支那に對する借款、投資、及びそれらの銀行資本を指すのであるが、本章では、専ら銀行資本を主として、これに政治借款及び産業投資を配してこれらを總稱することとした。斯くの如くにして外國銀行團は、英の「匯豐」米の「花旗」、日の「正金」、獨の「德華」、佛の「匯理」、和蘭の「荷蘭」、白の「華比」等の諸銀行が、支那に於ける活動の主腦となつてをり、その主要な使命は、消極的には預金の吸收、貸附、及び國際爲替等の正常な業務を除くほか、さらに積極的には、何れもその本國を代表して、支那に對する貿易の發展、及び經濟的侵略の進行に當り乍ら、各自本國の對支政策——支那をして植民地化せしむべき政治上の目的——の達成に努めつつあるこ

とは謂ふまでもない。勢ひ在支外國銀行に斯うした使命と目標との下に於いてその政治上、法制上の不平等條約による特權と、雄厚なる資本とを挾んで、數十年來の擄取を續けつつ、支那に於いてその黄金殿堂を建立し得たのである。勢ひ在支外國銀行が、支那の金融界に於いて、その覇權を握りつつある實例としては、頗る多く、殆ど枚擧に暇ないと雖も大體に於いて次の諸項を擧げなければならない。

(一) 在支外國銀行は支那の金融行政上に於いて全く支配的地位を占めてゐる。自然從來金融方面の改革、刷新事業に關し、支那金融界と財政當局とが單獨に進行すること極めて少なく、往々先づ在支外國銀行の同意を求め、或はこれとの共同協作をなすことを常態とした。例へば上海に於ける外支銀行及び銀行以外の金融業者との組織にかゝる「國際銀錢公會」の如き、十六名の委員中に、在支外國銀行から八名を出してゐるのに對し、上海銀行公會からは五名、銀行以外の金融業者から三名が選出されてゐるに過ぎない上、麥加利銀行の支配人、或はその代表者を主席委員となすことに決定してゐる等、この間の經緯を表明しつつあり、その他上海市場に於ける爲替ブローカーが、外國籍のもの五十三名に對して支那籍のもの僅かに十六名に過ぎない事實や、一・二八事變後、上海銀行業公會の組織した聯合準備委員會にも亦、匯豐銀行の支配人、花旗銀行の支配人、麥加利銀行の支配人を、それら保管委員のなかに加へたのみでなく、民國二十二年國民政府の廢兩改元後に於ける新幣審査委員會にも亦、匯豐、麥加利、花旗、東方、匯理、華比、美華、德華、荷蘭、沙遜等の各銀行支配人を委員に依頼した等等、斯うした些細な事實を以てしても、支那の金融資本と財政とは、すべて外國金融の助を藉りなければ

ならぬ所以を物語つてゐるのである。これがために支那の金融資本は外資と、本國の封建勢力（錢莊業に反映した封建勢力）に對し、曾て勇敢な抗争を試みたことがあつたと雖も、その結果は、自身の植民地的金融資本の附庸性を少しも改變し得なかつた。

(二) 在支外國銀行の雄厚な資本は、華商銀行を壓倒した。即ち外國銀行の偉大なる資本は支那の工業を支配し、支那の巨額の預金を吸収し、同時に紙幣を發行し、債券株式をも侵略手段の下に容納し乍ら、金融界を操縦し、整個の企業を統制しつつ、支那の經濟生命をして、完全にその巨掌の下に屈服せしめた。斯くの如くにして帝國主義の代理人——外國銀行資本は、政治、經濟の二つの動脈より以てする侵略の威力を充分に發揮したのである。試みに在支外國銀行中の首魁たる匯豐銀行以下の英國系各銀行の資本額を列擧して、その雄姿の如何に堂々たるかを瞥見しよう。

銀行名	資本總額	在支發行紙幣額
匯豐銀行	一〇,〇〇〇,〇〇〇米弗	四一,八三三,六五五元
麥加利銀行	三,〇〇〇,〇〇〇磅	二一,〇六三,四一八磅
有利銀行	三,〇〇〇,〇〇〇磅	二九〇,六二六磅
大英銀行	五,〇〇〇,〇〇〇磅	—

右の如き巨大なる資本額に對しては、支那銀行が到底その足下にも寄れないのであり、支那銀行は、中央、中國、

交通等の五行の資本が二千萬元以上を超過してゐるほか、その他は數百萬元のものが多い(中略)。更にこれを在支外國銀行(匯豐、花旗、正金、匯理)と支那に於いて主要なる二十九銀行(中央、中國、交通、上海等)の營業とを比較するとき、實に雲泥の懸隔があることを發見し得るのであり、これを見ても亦、國際金融資本の支那に於ける勢力の如何に雄厚であり、如何に支那銀行を壓倒しつつあるかを窺知することが出来る。

匯豐、正金、花旗、匯理四銀行と支那主要銀行の營業比較表(一九三一年——單位元)

	支那主要銀行	四大在支外國銀行
拂込資本	一五五,七八四,〇〇〇	五一六,〇〇〇,〇〇〇
積立金	四七,三四七,〇〇〇	二五七,六〇六,〇〇〇
預金	一,八六〇,六五六,〇〇〇	六,八〇三,一五二,〇〇〇
發行兌換券	三九二,三六七,〇〇〇	三五二,九四一,〇〇〇
本年純益	二一,〇六五,〇〇〇	五四,七四五,〇〇〇
資産總額	二,五六九,六〇六,〇〇〇	八,四七二,三一四,〇〇〇

(レリーマの報告書による)

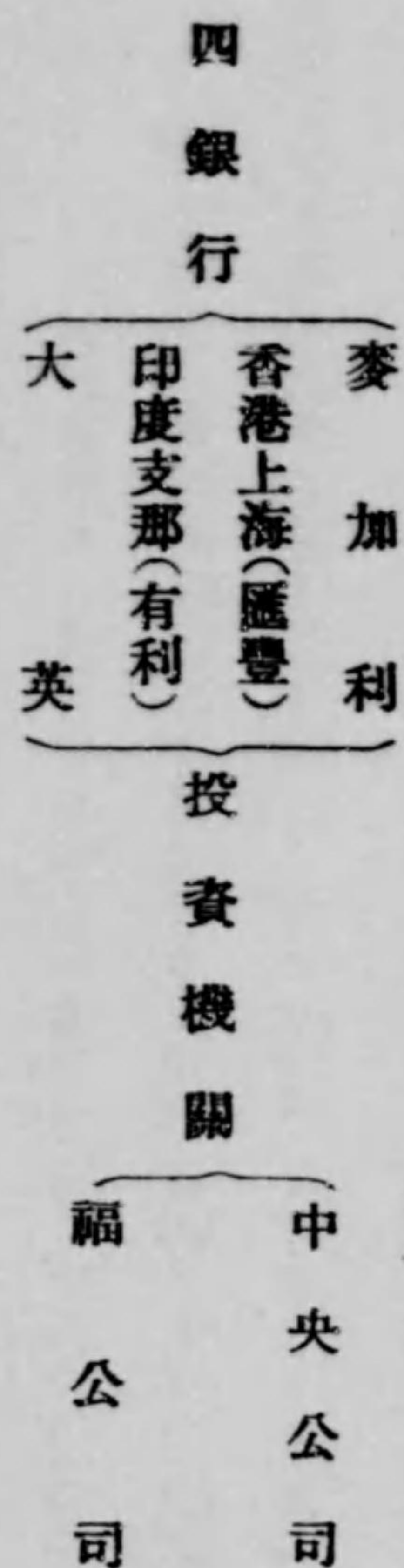
尙ほ且つ在支外國銀行は、支那境内に於いて治外法權を享有せるがため、支那政府と、法制上の拘束を受けない結果、任意に紙幣を發行してゐた。尤も一九三三年以來、斯うした兌換券の發行は漸次減少し、爾後市場に流通してゐたものは、匯豐、麥加利、美豐、花旗、東方匯理、華比、有利等の數行の發行せるものに過ぎなかつたが、

一九三五年在支外國銀行が、何れもその手持ちにかかる大量の現銀を輸出して、漸く手許資金の枯渇を來たしたのと、間接的には帝國主義者の支那分割闘争の激化を招致したのと、就中英、米、日の三國を中心として、その最後を決定すべき支那に於ける金融貨幣權の争奪を尖鋭化せしめた等、諸外國銀行はまた兌換券の増發を準備するに至つた——一つは現銀吸收のために、一つは貨幣の流通市場を把握して支那に於ける金融經濟の全權を掌握せんがために——。とくに在支外國銀行の兌換券増發の主要作用は後者にあつたことは勿論である（著者註——その後國民政府の幣制改革斷行と共に、在支外國銀行の兌換券はその機能を失つたが、支那に於ける貨幣の支配權争奪は、英、米の兩國を主として愈々劇烈を加ふるに至つたことは後章にこれを叙述した）。

(三) 在支外國銀行は治外法權と、不平等條約の保護により、支那政府及び財政當局の拘束を受けないで、任意に支那の金融を操縦した。一九三五年在支外國銀行が、大量の銀を海外に輸出したのは、唯利を圖るのみにあり、支那金融界の安危は、少しもこれを顧みなかつた。一九三五年末支那金融界が驚異的な金融恐慌を發生するに至つたのは、支那金融界自身に恐慌發生の病菌を保有してをり、甚だしく不健全であつたからであるとは謂へ、その恐慌は在支外國銀行が、一手にこれを造成したものであつた。而かもこの原因に對しては、一面在支外國銀行の信用が巨大であるため、取付けの慮れが、比較的少なかつた事實を挙げねばならぬと共に、別の一面では、在支外國銀行が、その政治的優勢力を挾んで、間接的な、破壊を加へた結果である所以を看過出來ぬのである。このほか民國二十一年、上海市政府の發行にかゝる「戰後復興公債」六百萬元が、英商安利洋行の手によつ

て引受けられ、その利拂償還基金を匯豐銀行に保管するといふ條件の下に、八五替への好條件で、而かも三時間の内に、これを處分して了つたことがあつた。斯うした事實などは支那政府が、如何に在支外國銀行の助力を利用したかといふ一例である。同時に支那の官民が、如何に在支外國銀行を過度に信頼しつゝあるかを物語つてゐる（下略）。

「**全國支配の金融網**」 國際資本帝國主義の支那金融界に於ける最も強力な支配者は、英、日、米、佛の四國であり、この四國は各々異なる獨占的地位を占めつゝある。例へば英國は鐵道、航運、煙草等の方面に最も優越なる地位を占め、日本は礦山、紡織業等の方面に、米國は、航空、電氣の方面に、佛國は雲南の鐵道と、金融の方面に於けるが如く——。而して各帝國主義の個別的獨占は、早くも、支那分割の局面を形成し、これを全體から看るとき、支那は帝國主義に分割されて、一點の餘隙もない状態にある。英國の金融資本の勢力は、大戰以後、稍や下り坂にあり、日本の勢力は増進したと雖も、支那に於いて、最も早くから建立してゐたところの英國の半として抜くべからざる勢力は、依然堅固な地位を保持してゐる。試みに英國金融資本の陣容を見ると次の如く、



と、英國金融資本の陣営中には、その四基本銀行を除くほか、二つの投資會社があり、これらを何れも支配機關としてなしてゐる（英國系銀行には匯豐、麥加利、有利、大英、沙遜及び達商等があると雖も、實際上、英國の金融資本の支那支配の主權は匯豐銀行、怡和洋行、太古洋行、廣東聯合保險會社等にある。さらにこれを具體的にいふとき英國金融資本の支那に於ける支配網は各方面に普及してゐるのである）。斯くの如くにして、英國金融資本の支那に於ける特徴としては次の數項を擧げることが出来る。（一）鐵道投資は英國資本の獨占するところとなつた。（二）煙草事業も亦英國の獨占に歸し、英米煙草公司是、支那に於ける絶對的支配地位を占め、支那の南洋兄弟煙草公司、華成公司、巴昌公司等は、すべてその支配を受けてゐる。（三）航業に於いては怡和、太古の兩公司を主幹として、支那の内河航業上に於いて主要な地位を占めつゝある。（四）亞細亞石油公司是、英國の石油トラストの代表であり、米國、蘇聯の兩國の石油公司と共に鼎立してゐる。これに次ぐ日本の金融資本の勢力は、その本國に於ける大銀行の支那分支行を、活動の中心となしてゐるが、そのうち、最も重要なものは、橫濱正金銀行であつて、大戰以後、英國の匯豐銀行と共に、支那金融市場に於いて重きをなしてゐる。就中日本の支那に於ける銀行は、他國に較べて、その數が多いのである。その在支勢力に至つては、老大國たる英國を凌駕することを得ないと雖も、到底忽視を許すべきでない。現在日本が、日支經濟提携の工作への歩を進めつゝある渦中に於いて、日本銀行團は、全力を擧げて支那進攻に向つてゐる（中略）。橫濱正金銀行の指導下に於ける十一銀行は、支那各地に支店を持たないが、橫濱正金銀行は、爲替をその主要業務として、僅少な事業投資を行ひつゝあるほ

か、その投資團としての各銀行、各公司是、すべて支那に對する經濟侵略を以て主要使命となしてゐる。日本の銀行の對支經濟侵略は、武士道的封建性の或る一面を帶有し、この點に於いて「高等紳士」的の英國資本家の侵略手段と異つてゐる。且つ日本の銀行、商業家は、往々買辦を利用して、これを彼等の侵略の手先となしつゝある。例へば河南に設けた煙草採集號と、山東に開設された棉花號の如く——。斯くて日本銀行團の支那に於ける支配形態を大體次の如く指摘することが出来る。（一）日本金融資本と、紡織會社とは、支那の紡織工業を支配するに至つた。（二）鑛業は殆ど日本金融資本の獨占するところとなつた。（三）燐寸工場の生産品も亦、日本資本によるそれが、支那の燐寸工業界を壓倒して了つた。（四）製油業、電氣等の方面に於いて日本金融資本は、英、米資本と激烈な競争をなしつゝ、航業の方面に於いても亦、英國に追従し、且つ近年漸次活躍するに至つた。次いで米國の金融資本の支那に於ける勢力は、英國の強力なるに及ばないと雖も、これまた重要な地位を占めてゐる。金融の部分は Rockefeller 系の資本であり、貿易金融の方面の業務に中心をおいてゐる。この點に於いて英國や日本が、多くの借款をなし、企業投資を行つてゐると、その趣を異にしてゐる。

米國の支那に於ける金融機關

銀行名	本店	支那に於ける支店	資本額
花旗銀行	紐約	上海、廣東、香港、漢口、北平	一〇〇,〇〇〇,〇〇〇弗
大通銀行	同	香港、上海、天津	二,〇〇〇,〇〇〇弗

第二章 國際資本の支那に於ける支配形態

支那資本機構・財閥・政權

四八

通運銀行	同	香港、北平、上海、天津	六、〇〇〇、〇〇〇弗
中華懋業	上海	天津、漢口	一〇、〇〇〇、〇〇〇弗
華東銀行	福州	廈門	二五〇、〇〇〇弗
統一銀公司	上海		四〇〇、〇〇〇弗
普益銀公司	上海		六二、三五〇弗

而かも米國金融資本の支那侵入は、列強に比較して、著しく落伍してをり、自然重要部門を占めてゐない所以であるが、米國の對支事業は學校、病院、その他の文化事業の方面に於けるそれをその特色となしてゐる。然しながら、我等は、米國金融資本の勢力が、新興事業の部門に於いて伸張しつゝある事實を忽視出來ないのである。とくに近年電力、航空、無電等の事業に對し、一日千里の勢力を以て發展しつゝあるのが、それである。その他米國は鐵道の方面に少量の投資があるほか、海運機關に對しては、頗る少ない。斯くて米國の支那に於ける金融支配の關係は、大體次の特徴を表示してゐるのである。(一)米國は支那の新興事業に對して巨額の投資をなしてゐる——電氣事業、無電、飛行機等の如く——勢ひこの方面に於いては、その壟斷に任せてゐる。(二)米國の投資は多く金融機關に集中してをり、總投資額の二分の一弱、約一億弗に達しつゝある。(三)米國金融資本の支那支配の主幹は、落克費烈及及び摩爾根系である。最後に佛國金融資本の支那に於ける支配勢力を見るに、同國のそれは雲南に於いて最も優勢であるが、英、米、日、の諸國に比較して、餘りに過少に過ぎる。但し雲南に於いては「虎なき山の猴王」の觀を呈してゐる。而して同國の雲南に於ける金融機關は次の如く、

(一) 東方匯理銀行

(一) Dosoursot. Cofond 機械會社

(三) Sufiraandoptos 貿易會社

が、その主なるもので、東方匯理銀行は、佛帝國主義者の支那侵略の投資機關であり、その雲南に於いて經營せる事業が頗る多く、雲南の經濟金融を操縱すると共に、且つその發券が市場に流通しつゝ、雲南の現銀を吸収し、雲南の爲替は完全に、それに壟斷されてをり、實際上、東方匯理銀行は、雲南に於ける經濟支配の最高機關となつてゐる。その他の會社は、貿易統制上の機關として、これまたその獨占の使命を果たしてゐるのである。以上のほか支那に於ける佛國系銀行には、中法銀行、江商銀行（何れも佛支合辦）並びに匯源銀行、美品銀行（何れも白佛合辦）等がある（中略）。かやうにして佛國金融資本は、滇越鐵道と、貿易關係とを利用して、深く雲南の農村にまで侵入し、雲南は全く佛帝國主義の重壓と、侵略との下に於いて、その經濟が破産し、第二の安南たらんとさへしてゐる」（「中國金融資本論」第二章「國際金融資本の中國に於ける支配形勢」を抄譯）。

第三章 民族資本を圍む主要條件

第一節 緒言

斯くの如くにして、支那民族資本の發展過程には、その主要な一般的條件として、國際資本帝國主義の作用と影響とを、度外視し出来ないものである。國際資本帝國主義と、支那經濟の關係を分析することによつて、民族資本の發展過程に於ける一般的主要條件を、はつきり認識し得るのであり、これらの點に關し、雜誌「文化批判」第二卷第五期「轉形期中國經濟の特徴」では、これを次の如く論斷してゐる。

「帝國主義の支那經濟に對して、及ぼしたところの影響と、作用とは、非常に大きく、且つ強烈であつた。一八四二年の阿片戰爭より、一九〇三年に至る期間に於いて、資本主義列強は、工業資本主義の段階にあり、その植民地に對する經濟侵略は、一般的に、また商品の輸出を主となし、投資を従となした。自然植民地の民族經濟に對する壓迫作用も亦、相對的であり、絶對的ではなかつた。即ち大體に於いて、自由競争の形式をとつたのである。然るに一九〇三年以後、資本主義列強は、既に工業資本の段階を飛躍しつゝ、金融資本の段階に入り、帝國主義を形成するに至つた。勢ひ帝國主義の植民地に對しての經濟作用も亦、投資——投資を主となした。それは資本の輸出と、商品の輸出とにより、金融上植民地の經濟を統治せんとするにあり、植民地をして資本の輸出地、

商品の販賣地、廉價な原料の供給地たらしめんとしたのであつた。これがために植民地の民族經濟に對する壓迫は、相對的の意義から、絶對的の意義をもつやうになつた。斯くの如く觀察して行くとき、帝國主義が、支那の民族經濟の發展を、絶對的に阻止しなかつたか否かは、自ら判明するのでありこれを極言するならば、帝國主義は、經濟上に於ける支那統治のために、必然絶對的に支那の民族經濟の發展を阻止したのみでなく、彼をして買辦化へのコースにすら趨らしめたのである（中略）。然るに斯かる渦中——一九〇四年より一九二八年に至る期間——に於いて、何故民族經濟が、相當の發展を過渡するに至つたかは、その原因が非常に明白である。即ち支那の民族經濟は、數十年來既に發展の基礎を築きあげつゝあつた際、偶ま帝國主義者が、戰爭直前と、戰爭期間及び戰爭後の各期間を通じて、支那に對する進出を休止すべく餘儀なくされたために、絶好の機會を得て、伸び得たのであつた。換言すれば、帝國主義が顧みるの暇なかつた間隙に乗じて、如實の發展を成し遂げ得たに過ぎないのであつた（中略）。以上によつて帝國主義の次植民地的支那の民族經濟に對する阻止工作と、その壓制の絶對的であつた所以を暗示し得たのであるが、斯くの如くにして、支那の民族經濟の發展は、一九二五—二七年の大革命をすら爆發せしめたのであり、これは、その特殊な原因と條件とである。一九二八年以後の帝國主義は、没落期への段階に沈淪し、全世界に普遍化するに至つた恐慌と危機とは、多々益々深められ、遂に尖鋭化して行つた。當然帝國主義は、恐慌克復への手段として、統制經濟に憂身をやつしたと雖も、危機は何等解消されなかつたのみでなく、愈々加重、強化しつゝ進展した。斯うして、國際資本帝國主義は、その加速度的に迫り來る危機を喰

ひ止むべく、さらに植民地及び半植民地に對する搾取を強化し、以て恐慌の深化に伴ふ打撃の一半を、これらの植民地及び半植民地に、これを轉化しようと試みた。即ち植民地及び半植民地に對する過剰商品のダンピング、金融資本を以てする搾取等が具體化されて來たのであつた。而して、斯うした渦中に於いて、支那の經濟は、大體次のやうな作用を受けねばならなかつたのである。

(一) 國際資本帝國主義は、支那民族經濟に對する破壊と、浸蝕とを主となし、積極的の建設には、何等の寄與をもなさなかつた。

(二) 都市に於いて、農村に於いて、國際資本帝國主義は、最高統治者——支配者となるに至つた。

(三) 支那の封建關係はために破壊された。然しながら、農村のなかに於ける封建的生産方法は、依然相對的に保留され、遂にそこには生産方法と、生産關係との著しい不調和が形成された。

(四) 同時に封建的生産方法は、破壊と、保留の二つの意義の下に於いて、封建的搾取關係が、反對に濃厚を加へて行つた。

(五) 斯うした錯綜複雑な作用が、支那經濟の發展の上に、重大な桎梏となつて現はれた。

(六) 國際資本帝國主義は、封建經濟の殘滓に對する掃蕩を希望しなかつたのみでなく、そのことは同時に不可能でもあつた。

(七) 勢ひ政治手段の上に於いて、常に直接或は間接的に封建勢力と、買辦資本主義とが結合して立つた(「雜

誌「文化批判」第二卷、第五期「轉形期中國經濟的特質」四「帝國主義と中國經濟」を抄譯)。

國際資本帝國主義と、支那經濟との間に於ける以上の諸關係は、そこに民族資本家及び、官僚支配者は勿論、封建的地主及び土豪劣紳等、すべての民族關係者をして、國際資本帝國主義者に、それ／＼隷屬せしめるに至り、封建軍閥、地主、官僚、民族資本の地方的割據をすらし、現出させながら、その對立の尖鋭化が、遂に不斷の内戦をすら誘致したことは前章に指摘した通りである。

さらにまた國際資本帝國主義が、前述の如く、支那に於いて封建勢力を支持した結果、民族資本の發展を阻止すること夥しかつたことも亦、勿論である。こゝに支那民族資本の發展過程に於ける一般的な主要條件があつた。

第二節 民族資本の特異性

大體以上略述したるが如き經過に基いて、支那の民族資本は、さらにそれを圍む一般的主要條件の、限りなき發展と共に、必然的に、それによつて引き出されるところの特殊條件に圍まれるに至つた。

このことは、近代工業化によつて、前面に押し出されたところの、勞働者階級の勢力の擴大と、その脅威とが、極めて複雑な作用を、民族資本の上に齎らした結果、新たなる段階にまで發展しつゝあつたところの民族産業資産階級の、國際資本帝國主義への對立すらが、著しく後退しながら、完全に國際金融資本の前に叩頭せしめるに至つた過程を指すのであることは謂ふまでもなく。

即ちこれを具體的に謂ふとき、支那に於ける共産黨の存在と、その勢力の擴大とは、民族資本を制約するところ夥しいのであつて、その結果支那の民族資本は、世界の何處の植民地、若くは半植民地諸國の民族資本にも比較して、異つた特質をもち、特異な條件に圍まれてゐる所以を最も有力に證明してゐるからである。

無論支那の民族資本——主として工業資本によつて代表せられる——と雖も、民族資本家階級の、民族的意識の盪頭と共に、その基礎の上に、或る程度までは、國際資本帝國主義に對立し、帝國主義への反對を、意識的に實踐してゐるのであるが、微弱な民族産業資本の集積状態を以てしては、到底對立の能力さへもない、上述の如き客觀情態の下に於ては、資本家階級としては、階級的反定律的な共産黨——ソヴェート政權——に對立しつつ、國際資本主義と結びつかざるを得ないのであつた。

斯くの如くにして支那の民族資本は、その階級的利益を代表せる國民黨をして、一九二七年四月のクーデター以來（所謂清黨運動として共産黨との分離後と雖も、依然國民黨内、またはその統治圈内に残存しつつあつた共産黨系分子に對する大弾壓を加へ、引續き國內全般に涉る徹底的な共産黨狩を斷行した）、江西省に建立された中華ソヴェート中央政權を包圍攻撃するために、その全力を傾注せしめ、同時に、國際資本主義の積極的な援助をも受くるに至つた等、支那民族資本の國際資本帝國主義に對する附庸關係は、一層その濃度を加へ、愈々深化して行つたのである。この間の経緯——支那民族資本及び民族資産階級を圍む特異條件に對し、進歩的な批評家は、これを次の如く評價してゐる。

「民族資産階級は、革命の戦線から後退して、國際資本帝國主義に投降し、さらに封建勢力と妥協しつつ、部分的な政權を獲得した。勢ひそこには絶對的に國際資本帝國主義と、封建勢力とを排除して、自らの階級の政權を樹立することを得なかつた。現在の統治階級は、國際資本帝國主義の指揮下の地主、官僚、買辦、資産階級の聯盟であり、國民黨は、この聯盟の一つの具體的形式に過ぎない」（孫偉章氏著「怎樣幹」から）。

これを要するに、一九二八年以來の支那の民族資本は、その微より細に入り、大部分買辦資本となつて了つたところはその特異性があるのであり（このことは第二編でさらに別にその考察を進めることとした）、この特異性が、著しく成長しながら、現在の支那經濟の畸形的發展現象を示現せしめてゐるのであるが、斯うした點に關し「轉形期中國經濟の特質」の筆者は、次の如く結論してゐる。

「買辦資本は、帝國主義の指導の下に、全く帝國主義者の手先となつて了つた。これがために帝國主義者と同様、支那に於ける封建經濟の殘餘を肅清することが不可能であつた。而かも支那の經濟は既に世界經濟の一環となり、全世界の經濟恐慌の渦中に於いて、支那も亦これに例外たり得なかつたのは勿論である。とくに支那は最近幾年來の天災、人禍の下に於いて恐慌の程度が必然的に深化するに至つた。その故に、この機に乗じて、支那の買辦資本は、實際上、その殘酷なる搾取の限りを盡くしたのであつた。のみでなく尙ほ且つ消極的の浸蝕作用をすら、そこに發揮した。従つて積極的建設作用の頗る寥々たる買辦資本は、封建的經濟の殘滓と封建勢力に對する徹底

的な肅清は、全くこれを不可能とされたのである。而して買辦資本は、そのみに止らず、勤勞大衆への壓制のために封建勢力とすら、勾結するに至つたのであつた。これを要するに没落期に於ける帝國主義の植民地に向つての經濟作用は、殘酷なる搾取を専らにするのみであつた。勢ひ没落期の帝國主義の指導下に於ける支那の買辦資本も、その殘酷なる搾取を實踐せねばならなかつた所以である」〔文化批判〕第二卷、第五期「轉形的中國經濟の特質」四「帝國主義と中國經濟」を抄録。

第三節 民族資本と封建關係

本節では専ら支那の民族資本を圍む主要條件の一つとして、民族資本の發展過程に於いて、封建勢力が、如何なる作用を、支那民族資本、及び支那社會全般に對して、及びしつつあるか、並びに封建關係が、如何なる形態の下に残存されてゐるかを解説せんがため、便宜上「文化批判」第二卷、第五期「轉形期中國經濟の特質」から、左の一節を要約摘録することとした。

「買辦資本主義經濟は、全國の經濟成分の上に優勢に占着しつつあるが、さらに封建關係も亦、支那經濟の全局面に涉り、依然濃厚たるを失はない。その第一は、支那經濟の發展が地域關係によつて、とくに不均衡を示してをり、そこに封建經濟の殘滓と、封建勢力とが、非常に廣汎なる範圍に涉つて存在してゐる事實を看過出来ないことである。いま全支那を地域的に見るとき、東南一帯は、交通の發達と共に、資本主義經濟の層分が、比較的

強大であるのに反し、西北一帯は、交通の不發達と、地勢上、資本主義的經濟が著しく脆弱であり、封建經濟が、比較的強大である。就中青海、川康、甘肅等の各省には、封建的經濟と、封建勢力とが、その色彩を頗る濃厚ならしめてゐるのみでなく、これらの多くの地方には、奴隸社會的の統治すらが實行され、奴隸社會の生活さへ殘されてゐる。第二には支那の軍閥、官僚、地主、豪紳、民團等の、毎年徵收する苛捐雜稅が、支那の經濟生活上、非常に嚴重な意義をもつ點と、而かもこれらの苛捐雜稅には、深刻な封建的意義を帶有してゐる事實から生ずる封建關係とを擧げねばならない。支那の官僚、軍閥、豪紳、地主等は、それ自身に於いて、兩面の性質を帯びてゐる。謂ふまでもなく、その一面は封建的であり、他の一面は、資本主義的である。然しながら、この種の官僚、軍閥、豪紳、地主等が、それ自身の代表する性質は、依然封建性を、その重要な部分となしてゐる。而して支那に於ける一切の苛捐雜稅は、その名目が、數百種を下らないと共に、これらの苛捐雜稅は、最も單純であり、一種の財政々策の表現であるとは謂へ、それが既に軍閥制度の基礎となるに至つた點に、著しい特質をもつてゐる。苛捐雜稅の支那各地に於ける存在は、支那に殘留しつつあるところの封建關係が、依然濃厚であることを示現するものであり、同時に、買辦資産階級が、その殘酷なる搾取を進むるに當り、資本主義式の搾取以外に、さらにその封建式の搾取をも、加重せねば熄まない所以を、表現してゐる。斯くの如くにして、次植民地化の支那經濟は、その一面に於いて、依然濃厚なる封建關係を、保有しつつある。支那の所謂軍閥、官僚等は、封建社會の遺物であることは謂ふまでもなく、自然、これらは社會の資本主義化と共に、それ自身をして、轉向せしめねば熄まない

かつた。然しながら、この場合、地域的に受けた資本主義經濟化の、濃淡如何によつて、自ら轉向の角度に、少なからざる差異があつた。即ち資本主義經濟の、比較的落伍せる地方では、その帶有する封建性が、強烈であり、資本主義經濟の發展せる地方では、その帶有する封建性も亦、薄弱であることを失はなかつた。従つて、その搾取した所得の作用にも亦、二つの性質を帯びてゐた。その一面に於いては、封建式搾取と、苛捐雜税によつて得た資財は、大部分、これを銀行に投じ、その一部分が企業の創辦に用ひられ、以て資本主義化への運動に、參與したのに反し、別の一面に於いては、それらの大部分が、戦争（封建性的軍閥の自己の地盤擁護、または地盤の獲得のための武力行使によつて、引き起された内戦）のために使用されて、全く消耗し、一部分は、個人の濫費に任じ、以て何等資本主義經濟化への運動に、参加しなかつた。斯うして支那に於ける軍閥、官僚等の、苛捐雜税を利用しながら行ふところの搾取形態は、封建式であるとは謂へ、その搾取した資財の用途から、これを見るとき、半ば資本主義的經濟性を帯び、半ば封建的であつた。これを換言すれば、封建式から、資本性への過渡的形態が、軍閥、官僚等の搾取過程に遺憾なく表現されてゐるのであつた。第三には支那の農村に於ける商業資本と、高利貸資本の隆興が、農村資本主義經濟の落伍を表示しつゝある點を擧げねばならないのであり、このことは、支那經濟のなかに於ける、封建關係の例證として、とくにこれを指摘し得る。そもく商業資本と、高利貸資本の大半は、前資本主義的形式を帶有しつゝ出現してをり、そのなかに夥しい封建的關係が含まれてゐるのである。元來商業資本と、高利貸資本とは、封建社會のうちに於いて、若干進歩的の意義をもつてゐた。それは

商業資本の蓄積が、産業資本發展の前提條件であつたからである。この意味から見て、商業資本と、高利貸資本とを、完全に封建的經濟の表現であると看做すのは、機械主義者の一面的觀察に過ぎぬのであつた。このことは、商業資本と、高利貸資本とは、何等生産を浸蝕することがないのでなく、寧ろその發展の過程に於いては、封建經濟を浸蝕すべき作用をすら、帶有してゐるからである。然しながら、商業資本と、高利貸資本とは、資本主義經濟の産物ではなく、商業資本と、高利貸資本の最も盛行しつゝある地方には、資本主義經濟が、一層落伍してゐたのに徴して、これを知ることが出来る。以上の経緯に従つて、商業資本と、高利貸資本とに、封建性經濟を破壊するの作用を、有してゐるのは、單に相對的積極作用——資本蓄積の形態——に現はれたところの、それに過ぎぬのである。なほ且つ支那農村のなかに於ける商業資本と、高利貸資本とは、直接、間接的に、國際資本帝國主義と、買辦資本家階級とに、指導せられながら、その有機組織の一環となるに至つた。自然本質的には、資本主義的であると雖も、そこには前資本主義的形式を帶有しながら出現するに至り、一般資本主義社會に於ける、商業資本、高利貸資本に比較して、形態上に於いて、本質上に於いて、それ／＼異つた存在を示し、そこに當然、半封建性的、乃至半資本主義的特徴を表示するに至つたのである。第四には支那農村のなかに於ける地租と、地權の上に、著しく濃厚な半封建性が帶有してゐる事實を、指摘しなければならないのである。その結果、支那に於ける資本主義化への過程には、なほ頗る強烈な封建的形態を殘留しつゝあるからである。現實の支那の佃租關係は、大半、封建的關係である。地主の農民に對する殘酷な搾取は、單に農民の剩餘價值を搾取す

るのみに止らず、その生活に必需する一部分をも搾取し、さらにその最低限度の生活資料をも奪つて了つたのである。斯かる残酷な搾取は、資本主義的でなく、明らかに封建制的である。これを地租の形式から見ても亦、(一)力役地租、(二)自然品地租、(三)貨幣地租、等の混交が支那の農村のなかに於いて一般的の存在となつてをり、就中「自然品地租」は、内地各省に普遍的に存在しつゝある。「力役租」は落伍せる各省に於いて未だに残存し、「貨幣地租」は、多く東南地方の、比較的進歩せる各省に於いて、盛行しつゝあるが、全国的に見て普遍化されてゐない。と共に、この「貨幣地租」を以て、直ちにそれが資本主義的地租であると、断定するのも亦、正確ではないのである。資本主義的地租の先決條件は、地主、小作企業家と、工賃労働者の三つの階級が、明らかに並存してゐる事實を、もつてせねばならぬ。この意味に於いて、現在の支那には、比較的進歩した各省にありては、資本主義的地租が、優勢と謂ふことを得ないまでも、多少ながら占有してゐることを否定出来ない。而してこれらの地方では、地主と、小作企業家とが、常に合して一體となつてをり、その斯うした形態は、封建的でなく、資本主義的であることは謂ふまでもないのである。これらの事象を推し進めると、現在の支那に於いては、農村に於いて、既に資本主義的地租が、發生してゐるのであるが、それは著しく普遍化するに至らず、たゞ進歩せる幾省かの、部分的地域にのみ限られてをり、勢ひ資本主義的地租は、全國の農村經濟の、小部分に於いて存在するに止り、比較的優勢でないといふ結論が出て来る。さらに支那に於ける地權から、これを見ると、支那現在の土地占有の形態と、その使用形態との間に於いて、著しく濃厚なる半封建性が帶有されてゐることを看過出来ない。

いのである。即ち地主は、廣大なる土地を占有して、農民に耕種を分配、配給しながら、残酷なる超經濟的搾取方法を用ひつゝある事實が、それである。次いでこれを、土地の集中と、その占有形態とから見るならば、資本主義性を帶有し、土地の使用形態から見るとき、さらに限りなく濃厚な半封建性を帯びてゐる。而して一般的に見て、現在支那の土地集中の形態は、支那農業經濟の、資本主義化への過程を、證明しつゝあり、それは獨り、貧農の失地によつて、これを表示してゐるのみでなく、中農の失地にも亦、このことを表明し、同時に、自給自足の封建經濟を破壊して了つた。とくに農村經濟中に於いて、(一)貧農と雇農の増加、(二)富農と地主の形成、(三)而かもその兩者の對立が益々尖鋭化するに至つた、(四)貧農と雇農との絶對的多數、(五)富農と地主の絶對的多數——等々の事實を、益々顯著ならしめて來たのは、支那に於ける土地占有形態が、資本主義的である所以を證明して餘すところがない。而して地主は、既に廣大なる土地を占有したのち、またその土地を細分して、これを極小の單位に分け、小作農の耕種に租給した。斯くの如き集中と、分散——これが一面に於いて、支那の農業資本主義經濟の不發達を表示してゐる所以でもあつた。富農は、農民分化の過程中に於いて、資本主義的の成分をもち、且つこれを顯現したと雖も、このことは、同時に、耕種條件の上に、一種の制限を設けしめる結果を齎らした。延ひて農業資本主義化をして、非常に困難ならしめたのである。と謂ふのは、富農が、一面に於いて、土地の分租を必要とし、最も残酷なる封建的方法を利用して、小作農に對しての搾取に努めたからであり、また他の一面に於いて、商業と、高利貸とを經營することをも要したからである。そして、これらの結果は、農業生

産上に於ける廣汎なる技術的革命的發生を不能ならしめた。現在支那の土地の占有と、使用の形式には、半封建性を帯有したと雖も、その土地集中と、その封建的搾取とに於いて、純封建的土地占有と、その使用形式とに比して、著しくその趣を異にしてをり、同時に資本主義的土地占有形式と、その使用形式とに、比較しても亦、同様ではなかつた。斯くしてこれを卒直に評價するとき、以上の二つの性能を帯びつゝ出現したと断定して好い。即ち一面資本主義的であり、一面封建的であつた。そしてその特質は半封建的たるにあつた」(「文化批判」、第二卷、第五期「轉形期中國經濟の特質」六「轉形期中國經濟中の封建關係」を抄譯)。

第二編 支那民族資本機構の解剖

商業資本の發展と、生産に對するその支配力の擴大及び強化が、商品の捌け口を見出すべく、大陸發見を経て、資本の原始的蓄積、工業資本の發生、生産力の飛躍的發展を齎らし、資本主義制度の確立となり、企業の結合、資本の集中、獨占及び企業家聯盟を形成しながら、益々資本の威力を加へ、遂に金融資本の段階にまで到達した。そこには當然輸出資本を以てする植民地の征服、産業合理化による生産力の強化が特徴づけられ、益々資本の激増を促し、遂に利潤の低下に苦しみ出した。延ひて資本主義の内包する矛盾の擴大を惹起し、恐慌の發生と、その激化とにより、資本主義の安定、保持への修正が行はれなければならなくなつたのである。これが先進國に於ける資本主義發展の過程であつた。然るに支那は半植民地であるがために、その資本主義の發展過程は、以上のやうな軌道を歩まなかつた。そこには當然變態的な、畸形的な發展を齎したのである。そしてその過程に於いては、商業資本の發達も、工業資本の形成も、銀行資本の集中も、それらの延長であるところの一種の畸形的な金融資本(それは頗る變態的な金融資本であつて、嚴密な意味での金融資本とは謂へない)への成長をすら示現するに至つた。こゝに半植民地支那に於ける民族資本機構の特質的な本質があつた。然らば如何なる段階を経過しつゝ、畸形的金融資本にまで延長するに至つたか。本編では専ら斯うした問題を

とりあげた。蓋し半植民地に於いては、國際金融資本が、その最高支配地位を占めてゐる。勢ひ支那民族資本の發展過程も亦、國際金融資本の命ずるがまゝに、その希望する通りの形態を保持してゐることは謂ふまでもない。かゝる秋——先進資本主義國が、その資本主義的發展の内包する矛盾と、矛盾の激化によつて、深刻なる恐慌を發生しつゝ、それに苦しめられてゐる際——、國際經濟の一環として支那經濟も亦到底これに例外たるを得なかつた。而かもその恐慌の原因は、先進資本主義が自身の恐慌を克復せんがための植民地または半植民地に對する壓迫の加重（恐慌の一部を植民地または半植民地に轉嫁せんとした）によつて、結果づけられたのであるだけ、破局的な危機に當面せざるを得なかつた。斯かる渦中に於いて民族資本は何處へ行くか。本編ではこれらを考慮しながら稿を進めた——。

第一章 官僚資本の形成と商業資本の畸形的發展

第一節 緒言

「それ自身の流通過程のうちに生産行程を含まないところの商業資本は、文字通りの $W-C-W$ （ $W+C$ ）であつて、~~商~~^{生手}に分化しないばかりでなく、同一形態の商を以て終始する。従つて（ $W+C$ ）における小文字の貨は、商業資本自身の流通行程内で生じた剰餘價值を表はさない。商業資本家の利得乃至利潤は、一部は産業資本の流通行程内に生じた剰餘價值乃至は利潤のうちから引出される。商業利潤の他の部分は、或は市場價格の變動に起因する投機利得から成り、或は獨占利得から成る。これらの利得は、社會に於いて新たに増加した價值の一部をなすものではなく、爾餘の商業資本家や、産業資本家の失ふところ、乃至は労働者その他謂はゆる消費者の失ふところのものにあたる。産業に於ける企業結合が發達するにつれ、商業資本の活動區域は狭められ、全體としての商業利潤は、絶對的にも相對的にも減少するの傾向をとる」（猪俣津南雄氏著「金融資本と帝國主義」から）。然るに支那に於いては、商業資本は封建制度の過度の搾取によつて、手工業と共にその發展を著しく阻礙されてゐたゞけ、そこには先進資本主義國に於けるが如き、商業資本の生産に對する支配力の擴大及び強大化を見ることを得なかつた（自給自足の經濟が充分に出來てゐたことも亦、さうした原因の一つである）。

但し國際資本主義の侵入以來、國際資本主義商品の輸入が漸増を來たしたのと共に、手工業の生産組織が、漸を追ふて解體されて行つたに拘らず、その間に於いて獨り商業資本のみが、畸形的な發展過程を辿つた。然らば國際商品の侵入が、何故に、及び如何にして支那の商業資本をして畸形的な發展を過程せしめるに至つたか。支那民族資本機構の解剖の第一歩として商業資本の發展を叙述すべく、先づこの點から始めよう——以下「中國産業革命概観」から——。

商業資本の畸形的發展

「國際資本の侵入によつて誘致されたところの支那の資本集積の状態は、その借款投資の一部が官僚の搾取を経過して、一種特別の官僚資本に變形せしめ、同時に貿易の上に於ける商品の輸入と、原料の輸出の處理により、漁夫の利を占め得た買辦をして、一躍これを新興商業資本家たらしめた。國際資本帝國主義の侵略發展の過程の中に於ける支那は、工業資本の集積に於いて夥多の困難に遭つたと雖も、商業資本の集積に於いては、頗る恵まれてゐた。現在の資産階級は、大部分は商業の發展に隨伴して形成されたものである。例へば支那は近年來内亂の頻發と共に國家財政は勿論、國民經濟の疲弊甚だしかつたに拘らず、輸出入貿易は依然として逐年増加し、寸毫もその影響を受けなかつた。このことは商業資本の發展をして、最もこれを容易ならしめた所以である。これに反して工業資本に至つては決してさうでなかつた。もとよりその工業資本が如何にして集積難に陥らしめるに至つたかの原因を知ることが容易でなく、一般的の觀察に従へば、支那の資本家には企業經營の才能に乏しいため、

當然その發展を阻礙したのであると説かれてゐると雖も、我等の看るところに據れば、彼等には必ずしも企業經營の才能に缺けてゐたとは謂へない。たゞ國際資本の支配下に於ける現實の支那に於いては、雄厚な資本を抱擁することなしには、實際的の競争に打ち勝つことが不可能であつた結果、一般資本家は、確實な利益を取得することの見透しがつかない限り、工業投資を行はなかつたのに反し、商業投資には適確な利潤が、而かも相當大きな利潤が絶えず約束されてゐた點が、商業投資の隆興を促し、自然商業資本を發展せしめた原因であると謂へる。例へばこれを上海について謂ふとき支那資本家の經營するところの近代紡織工業は、何れも甚だしい困憊状態に陥つたにも拘らず、歐米式の百貨大商店の成績が、却つて頗る良好たるを失はなかつた等、この間の経緯を語る一つの實例であつた。斯くの如くにして、毎年の貿易統計上に於ける輸入超過は、結局最大消費者にして原料生産者たるところの農民階級の負擔に歸し、農民階級は疲弊困憊を極め、遂にその負擔にすら堪えなくなつたと雖も、而かもその間に於ける商業資本家階級の利益は、これに反して増加しつゝその熾むところを知らない状態であつた。これがために現代支那に於ける資本集中は、結局に於いて商業資本家階級の手によつて行はれたのであると稱して差支がなかつた。こゝに商業資本の畸形的發展の過程があつたのである。このほか僑商資本（華僑資本）は、當然商業資本と區別して、これを説明すべきである。同時に僑商資本も亦元來商業を基礎としてその集積を來たすに至つたのであるが、彼等は帝國主義の直接統治下の外國に於いて、充分に工業企業の重要性を感じたがために、多くは工業投資に従事する希望を抱きながら歸國したのであつた。勢ひ僑商資本家は、官

僚資本家及び商業資本家とは、自ら別個の存在であり、自然別の方向を採つたこと勿論である。彼等が民族革命を賛助し、その運動に努力した原因はこゝにある」〔中國産業革命概観〕第五章「中國境内の資本主義的發展」第二節「國內資本集積の過程」二「商業資本の畸形的發展」抄譯。

商業資本の畸形的な發展は、一面官僚資本の形成に負ふところが多い。而かも支那の如き官僚資本の形成とその發展の過程は、先進資本主義國に於いて、殆どその比を見ないところであらう。就中官僚資本と名づくべきものも亦先進資本主義諸國に於いては、支那に於けるその如き形態を採らなかつたであらうと思はる。然らば支那に於ける官僚資本は如何なる形態によつて發生し、且つ發展するに至つたであらうか——以下「中國産業革命概観」から——。

官僚資本の形成

「外人の獨占せる近代企業が支那を中心に夥しい利潤を擧げつゝあつた期間に於いて、支那人の企業も亦漸次發生するに至つた。而して支那の近代企業は、軍事工業に始まり、諸官吏の手に委された官業經營が成り上り、その後軍事工業の生命が繼續して存在したと雖も、最初の國防計畫への目的が遂ひに失敗に終つて、のちには軍閥私闘の手段に轉化して了つた。斯くの如くにして農民經濟組織の崩壊過程のなかで、軍閥と土匪とが目増しに横行し乍ら、その揚句、産業革命への進行を阻碍し、徒らに消費のみが増加した。とくに日清戦争と義和團事變の際、清朝の財政基礎が、兩次の大賠償金の支拂によつて破壊したため、既に一切の企業は國營によらざるを得な

くなり、そしてこれを諸官吏の經營に委せつゝ、すべての企業資金も亦、外國借款に仰ぐに至つた（外國借款には、たゞ國有と謂ふ名義のみがわづかにその信用を繋ぎ得たからである）。而かもその尤なるものが鐵道であつた。元來鐵道の建設は、封建階級に於いては、たゞ軍事上の必要にかられたのに過ぎなかつたが、外國企業家は、これを絶好の投資目的となしたのである。斯くの如くにして列強が鐵道敷設權の爭奪に競争した所以のものは、一面に於いて彼等の勢力範圍の基礎を作る準備であつたのと共に、一面に於いてはその生産貨物の販路の擴張と、工業生産原料の出廻りに資せんがためであつたが、こゝに於いて當時の支那官僚と、外國資本家の聯絡を發生せしめ、同時に一斑の富商は官督商辦の事業經營の下に於いて政商となり、官僚と結合するに至つた。もとゞ鐵道の敷設經營を擔任した官僚は、清朝の「郵傳部」であり、民國になつてからは交通部がそれであつた。而して政府の財政は財政部と交通部の兩方面に分れ、鐵道、電政等の部門に關しては交通部がこれを支配し、鐵道收入を擔保として國債を發行し、外債を募集し、財政の一部分を掌握したのである。所謂「交通系」と稱する系統は斯かる過程の下に形成された。これらは謂ふところの官僚資本家の一派であり、以前には盛宣懷によつて代表されてゐたが、のち梁士詒がこれを代表した。梁士詒が當時「財神」と呼稱されたのは、彼は交通銀行を根城として國債の發行を功迫し、同事に軍閥をも左右するに至つたからである。官僚資本家は、また地方軍閥の擄取した民膏民脂を把つて、これを生産資本となした。現代相當の規模を有する商工企業は、多かれ少なかれ、直接または間接に軍閥と關係をもつてゐた。斯くの如く有力な官僚・軍閥は、一面機關新聞を發行し、一面また機關銀行

をも掌握してゐた。例へば梁士詒の交通銀行、新華儲蓄銀行、王族商業銀行の如く、乃至王克敏の中國銀行に於けるが如くに——。その他彼等は外國資本との合辦事業に放出した資本も亦少くなかつた。勢ひ官僚資本の特徴は、外國銀行と不可分のな點にあつた」(「中國産業革命概観」第六章「中國境内の資本主義の特徴」第二節「國內資本の集積過程」一「官僚資本の形成」抄譯)。

以上の解説に従つて、官僚資本のなかには、當然軍閥資本をも加ふべきであらう。そもく「軍閥とは「隨兵制度」(エンゲルスの家族私有財産及び國家の起源)から、傭兵制度に變成した一種の私戰的團體(それは農村の過剰人口を利用した)であり、封建的割據を以て、農村に對する封建的搾取の上に立つてをり、農村に於ける地租の封建的搾取を、その財政上の源泉となしてゐた。従つて軍閥資本も亦、斯かる農村搾取によつて形成されたものであつて、支那に於ける資本の形態としては、官僚資本、地主資本、土豪劣紳の資本と共に、何れも封建的性能、封建的勢力を代表しつゝあつたことは謂ふまでもなく、同時に商業資本のなかに融合されてゐたのである。

勢ひ官僚資本は、土着商業資本と共に、國際資本主義商品の侵入により、國際商品の流通過程に於いて、集積されたところの新興商業資本に結びつき、遂にそれと、一體となり、商業資本として集積・集中したこと勿論である。

第二節 支那の商業經濟と商業資本

支那に於ける商業資本がその畸形的な發展——それは前資本主義時代に生産を支配してゐたものが商業資本であ

つたにも拘らず、資本性生産の發達と共に却つて産業資本の從僕たる地位に成り下つた先進資本主義國の發展の定律に反しながら——を形成するに至つた所以のものは、國際資本主義の支那に對する進出——その輸出商品の侵入と、原料の採集に基く支那の對外貿易界の驚くべき振興——に伴ふ商業經濟の發展をその原因となしたことは謂ふまでもない。然らば支那の商業經濟と國際資本主義とが、如何なる關係にあつたか。及び斯かる渦中に於ける支那商業經濟の特質を如何なる點に求むべきであつたか。本節では専ら斯うした問題に觸れない。——以下雜誌「自決」第三卷、第二期求知氏の「中國の商業經濟」から——

支那の商業經濟と帝國主義

「誰しも知る如く支那は一個の半植民地國である。地大物博、而かも人口の豊富な支那は、國際資本帝國主義をして、その商品市場、原料供給地、及び投資區域としての絶好の對象たらしめた。就中商品市場として最も重要な意義をもつてゐた。それは支那の商業經濟が既に相當な發展を齎らしてをり、且つまたさらに前進的な發展を將來づけてゐたからであつた。斯くの如くにして諸資本帝國主義國は、さうした前提條件の下に於いて、支那に對する積極的の侵略に邁進したのである。爾來國際資本帝國主義の無組織的、盲目的な大量の商品生産は、その本國に於いて一面競争の激化を來さしめ、商品價格の低下と、流通の停滞を引起し、一面にはまた大量の盲目的生産の結果、經濟恐慌と、失業の増加とを惹起せしめた。斯うした二つの峻烈な客觀情勢の下に於いて、依然その發展の局面を維持せんとするには、海外に向つて所謂植民地の開發に力を致さなければならなかつた。自然國際

資本帝國主義の植民地に対する侵略が益々強化されるに至つたのである。そしてこのことは經濟上に於ける必然の結果であつて、政治上、軍事上、文化上、乃至其他の野心から出たものではなかつたことは謂ふまでもない(中略)。國際資本帝國主義の植民地進出の眞の目的は、原料の獲得、商品の販賣、投資區域の擴大にあつたのである。周知の如く資本主義の再生産の過程——その主要な手段は、資本家をして、より多くの利潤を獲得せしめることにあつた。これを換言せば低廉なる原料と勞働力の購買にあつたのである。この二つを基礎としてこそ、資本家は充分なる剩餘價值を搾取して、そこにより多くの利潤を獲得し得るのであり、より多くの利潤獲得のあとには、さらにそれをまたもとの資本に加へて再生産に投入しつゝ、斯うすることの已まざるところに、商品の盲目的生産、その無政府的生産の擴大を形成せしめたのであつた。而してその結果は、商品の過剰を招來せしめたのみでなく、過剰商品の停滯に基く恐慌の發生と、恐慌の激化とを特徴づけるに至つた所以であり、そこに資本主義の最大の矛盾が爆發し、資本帝國主義はこの最大矛盾を解決せんがために、彌上植民地に対する侵略を強化せざるを得なくなつたのであるが、斯かる場合、支那の商業經濟は、これを幫助することにより、さうした侵略の最も有力な先鋒となつた。元來商業經濟の機能は、交換過程中の媒介をなすことにあり、生産方法を變更する能力がなかつた。かやうにして國際資本帝國主義の商品經濟が金融資本と勾結するに至つた所以であるが、その共同勢力の支那農村經濟に對する進攻の結果は、現實の支那經濟の畸形的現象を形成せしめ、その一端は支那の商業資本と國際資本帝國主義の金融資本との高度化的な結合の上に現はれ、他の一端は支那に於ける數百萬、數千萬の農民の困窮の上に表現されてゐる。従つて國際資本帝國主義の商品經濟が、支那の半自然經濟に侵入した以來、遂に支那の商業經濟も亦、そのために本質的の變化を來たすに至つたのである。それのみでなく支那に於ける商業資本發達の趨勢が、資本帝國主義の支那に對する政策の轉換に隨伴するに至つたことをも看過出來ない。國際資本帝國主義の最初の支那に對する進出の目的は、全く過剰商品の販賣にあつた。——このことは現在に於いても亦少しも變更されてゐないのであるが——。元來商品市場としての消化力は當然地域的の廣汎さと、大量の人口とを前提とした。この意味に於いて四億の人口を有する支那は、國際資本帝國主義に對し、その商品市場としての十二分の價值を提供してゐた。然しながら、一方支那の半自然經濟は、國際商品の流通を阻礙すること夥しかつた。勢ひ國際資本帝國主義としては、斯くの如き商品の販路を阻礙する半自然經濟を破壊する目的上、支那の土着商業經濟を征服することにより、これをしてその先鋒たらしめたのである。こゝに支那に於ける商業資本の發達の趨勢が資本帝國主義の政策に隨伴しながら本質的の變化を來たした第一の段階があつた。そして同時にこのことは支那の商業經濟が、國際資本帝國主義の落伍せる國家に對する侵略政策中に於いて、その支柱となるに至つた條件の一つでもあつた。も一つの方面に於いては、國際資本帝國主義は、支那を唯一の原料市場たらしめんとした政策の上から見るときも亦、同様の結論が成り立つのである。斯うして支那の商業經濟は、近年來、従前に於いて未だ見ることの出來なかつた程度の、大規模な發展と、集積とを招來せしめられるに至つたのであつた。

支那の商業經濟の特質

「支那の商業經濟は、如實の大規模な發展と、集積とを來たしたと雖も、それは先進資本帝國主義國のそれに較べて、全然その趣を異にし、そこに一種の特質を表示してゐたことは既述の通りである。もとゞ商業經濟存在の條件には二つあつた。第一は商品流通の事實が存在せねばならぬことであり、第二は必らず貨幣との交換の事實が存在せねばならぬことである。この二つの條件は、商業資本が、どの種類の生産行程にあるを問はず、——これを換言すれば商業資本が原始共同體の生産の上に、或はまた奴隸制度の生産の上に、乃至小農と手工業の生産の上に、乃至資本主義の生産の上にあると否とを論ぜず——すべて、それに附着して存在し、發展するものである。即ち商業經濟はその附着せる前述の二つの條件の存在によつて發生し發展するものであつた。この條件から見て、支那の商業經濟は、如何なる特質を帯有してゐたであらうか。

(一) 資本帝國主義の商業經濟は獨立的であり、民族資産階級の外に向つての侵略を代表し、資本帝國主義國家内に於ける商人階級は、對外侵略の第一線に立ち、その他の社會勢力を指導した——尤もそれは政府の指導の下に前進したことは謂ふまでもないが——。商人階級の市場を尋求する努力によつて交換の領域を擴大し、その結果航海術を完成させ、同時に大洋の航行に可能な大船舶を建造しつつ、その對外侵略の使命を果たしたのである。然るに支那の商業經濟はさうでなかつた。支那の商業經濟は國際資本帝國主義に依附し乍ら生存した。支那の民族資産階級が對外競争に於いて無力であるがために依然本國の勞農大衆の上に、その搾取を加重強化せねば

ならなかつた際、商業經濟は、國際資本帝國主義と、民族資産階級とを代表して、本國の勞農大衆に對する搾取の媒介をなしたのである。ここに支那の商業經濟の第一の特質があつた。

(二) 商業經濟の機能は、前述の如く交換過程に於ける媒介にあつた。資本帝國主義の商業經濟の負ふところの交換の使命は、その資本主義生産方法の生産——價廉物美の商品を以て、産業落伍國に於ける農村の舊生産手段によつて生産されるところの原料と交換することを主眼とした。本來商業經濟の發達は、到るところに於いて、生産をして交換價値の方面に發展せしめた。そして生産範圍の擴大を促し、生産の種類を増加させたのみでなく、生産の普遍化と共に、同時に且つ貨幣をして世界的貨幣たらしめたのである。以上の過程が支那の商業經濟に如何なる變化を來たさしめたかは、今更謂ふまでもないが、先づこれによつて支那農村の原料は、遂に商業經濟に壟斷されることとなり、同時に商業經濟の一部分は買辦經濟に脱化したのであつた。而してその一部分はさらに國際資本帝國主義と極めて密接なる關係を結び、寧ろ専門的に國際資本帝國主義の原料収集と、その商品に對する代理販賣とを受持つに至つたのである。もとより支那の封建社會には商業經濟が漸を追ふて發達し、八十餘年前の支那には、既に商人が確かに少なからざる勢力を占めてゐたと雖も、當時の商人は、大多數は「庶民」であつて「君子」ではなかつた。然るにそのなかの一部分が、前記の如く國際資本帝國主義と結合して、漸次資本主義化するに至つたのである。そこで外國に渡航して商業に従事するものが出現した。所謂「華僑」がそれである。また外國に於いて資本を蓄積して巨商となつたものは、支那に於いて原料を収集し、これを輸出するなり、尙ほ

且つ外國商品を支那に輸入して販賣するなり、または大規模の百貨商店を經營するものも出た。斯くの如くにして華僑中の巨商と、國內の巨商とは、益々濃厚な買辦性を帯有するに至つた。斯うした情態は、廣東商團事變に於ける陳炯明と英國資本帝國主義との關係によつて遺憾なくこれを表徴してゐる。以上の如き経緯に基く都市の官僚勢力と、巨商との買辦階級への發展は、國際資本帝國主義者をして、この階級を通過せしめるのに最もこれを容易ならしめた。即ち支那に於いて政治上、經濟上の優勢權を獲得するに至り、而かもその過剰金融資本の輸出を自由ならしめ、同時に過剰の工業製品を輸出せしめたのであり、これが國際資本帝國主義の支那に對する侵略への進展過程であつた。次いで外國商人は、さらに地方都市に進出したため、地方に於いても亦、小買辦が産生した。そして都市の大買辦と、地方の小買辦とは、また地方と都市のなかに於いて、支那巨商に追隨し、農村に於いては土豪富農に追隨した。これがために、國際資本帝國主義の原料收買、商品の販賣が、益々擴大された。支那の商業經濟が、資本帝國主義列強のそれに較べて異なる點——即ちその特質の第二がここにあつた。

(三) 國際資本帝國主義の發達の最後の主要特徴は、資本の輸出にあつた。然るに現實の支那經濟の領域中には、商業經濟の活躍は、商業資本の蓄積に於いてのみ、これを見る事が出来たのみ、産業の長足な發展に於いてはこれを見ることを得なかつた。このことは支那が半植民地國であり、民族工業の發展が、國際資本帝國主義の經濟勢力の侵入以來、支那の社會に一種の産業革命に似た變化を起さしめたと雖も、さうした變化——民族工業の發展——は、國際資本帝國主義と相對的に矛盾せざるを得ないからであつた。然るにこれに反して商業經濟

の發展は、國際資本帝國主義にとつて、絶對的に有利であつたがために、自然國際商品の跳梁と、原料品の流出とにより、支那の對外貿易の發展は一日千里の勢を以て進展した。即ち右の経緯に基いて、支那の商業經濟は、信用經濟、とくに工業經濟に比し、國際資本帝國主義の卵翼の下に於いて、長足の發展を招來するに至つた所以である。支那の商業經濟が資本帝國主義國家の商業經濟に較べて異なる點及びその特質の第三の要點がここにあつた」(雜誌「自決」第二卷、第二期求知氏の「中國の商業經濟」を抄譯)。

さらに支那の商業經濟の發展と、その活躍とが、如何なる程度まで國際資本帝國主義——國際貿易——に附隨しつゝあつたかを知る例證として、商業資本の集積、乃至流通機關——匯兌莊または錢莊——に於ける資本の集中と、これらの舊式金融機關を中心とする商業資本の流通上に於ける機能の發展過程を擧げることが出来る。

匯兌莊(國內爲替を營業としてゐた)及び錢莊は、商業經濟に於ける封建性を代表する舊式金融機關であり、當時貨幣制度が地域的、分散的であつたため、國內爲替を業務とする匯兌莊または錢莊が、商品流通上の金融機關として發達し、同時に商業資本集積のために多大の役割を受持ち、益々信用制度の膨脹を促進した。

従つて錢莊、匯兌莊等、舊式金融機關に集中した貨幣資本は、一種の銀行資本と同様の形態をとつたと雖も、元來錢莊、匯兌莊等は、商業經濟の發展過程のなから、商業資本流通上の要求によつて産生した金融機關であつたため、そこに集中した貨幣資本は、すべて商業資本家によつて利用せられ、産業資本として——生産過程には、少しもこれに干與しなかつたことは謂ふまでもない。

兎まれ支那に於いては錢莊、匯兌莊等の舊式金融機關は、當時商業資本の畸形的な發展に隨伴しながら、著しく發達してゐたのであり、これらの金融機關が現在の新式銀行の隆興を促す素地を作りつつあつたことを看過出来ぬ。

第三節 商業資本と高利貸資本

前節に於いて略述した如く、支那に於ける商業資本の發展は、國際資本主義商品の侵入に比例しながら、益々その趨勢を顯著ならしめた。

と謂ふことは、商業資本が直接間接的に國際資本帝國主義者と、買辦資本家階級とに指導されつつ、その有機組織の一環となるに至つたからである。同時に商業資本は、農村に於いて、高利貸資本と結びついた。前節に一寸觸れておいた通り、土着商業資本に對する、新興商業資本の結合がそれである。斯くの如くにして商業資本の、産業資本に轉化し得なかつた理由の基調をここに求めることが出来る。

自然支那の商業資本は、本質的には、資本主義的であることを失はなかつたと雖も、そこには當然新資本主義的形式によつて出現し、一般先進資本主義社會に於ける商業資本、高利貸資本に比較して、その形態の上に於いて、將たまた性質の上に於いて、何れも異つた存在を示し、半封建的乃至、半資本主義的特徴を表現するに至つたのである。

自然斯くの如き經濟機構のなかに於ける商業資本は、依然として封建的搾取形態——とくに高利貸資本としての

形態——を頗る顯著に特徴づけてゐるのであつた。然らば支那の商業資本が、果たして如何なる形態によつて高利貸資本としての特質を帯びつつあるのか——以下「文化批判」第二卷、第六期「轉形期中國經濟の特質」から——

商業資本と高利貸資本の特質

「支那の農村中に於ける商業資本は、實に畸形的な現象を表示してゐる。それはその大半が前資本主義的形式を帶同しながら出現してゐると雖も、同時にまた買辦資産階級、及び國際資本帝國主義の直接的間接的の領導を受けつつある點を突き詰めることによつて、さう謂ひ得る。さらに知らなければならぬのは、商業資本が、支那農村全般に涉つて流通してゐるとは謂へ、それはただ支那農村に於いて消極的の破壊作用を起したに過ぎず、それによつて農村に於ける在來の生産方法が少しも改變しなかつたことについてである。而かもこれらは支那各地のすべてのものに顯現されてゐるがため、最も見易い事實なのである。尙ほ且つ商業資本の益々盛行しつゝある地方は、封建的搾取關係の最も濃厚な地域である事實をも亦同時にこれを認識しなければならぬ。このことは、また支那の資本主義經濟が、農村に於いて、著しく落伍しつゝある所以を徹底的に表示してをり、斯うした結果に基く必至的の趨向として、商業資本の盛行が、前資本主義的であると稱して差支がない。さうかと謂つて、さらに商業資本の實質上について仔細に分析するとき、それは必らずしも完全に封建的であるとも斷言出来ぬのである。即ち支那農村に於ける商業資本は、支那買辦資本の直接的の一分派であり、自然間接的には、國際資本帝國主義の支配下に隸屬しつゝあつたからである。これを換言せば、支那農村に於ける商業資本は、買辦資本主義

經濟と、國際資本帝國主義の指揮と支配とを受けてゐるからであつた。即ちそこには商業資本が買辦資本と合流し、或はその有機組織の一環となるに至つたのである。斯くの如くにして没落期に於ける國際資本帝國主義と、買辦資本主義との、支那經濟に及ぼした作用は、單に残酷なる搾取のみに止り、農村在來の生産方法の改變に對してはこれを企圖しなかつたのである。このことは事實上到底不可能であつたからでもあらうが——、而して支那商業資本をして、農村資本主義化の段階の上から歩み去らしめたのであつた。それは支那商業資本が、買辦資本及び國際資本帝國主義の指揮と、その御用の下に活動しながら、依然著しく濃厚なる半封建性を帯同し、その半封建性作用が、農村經濟の進歩を阻止することが夥しかつたからである。更に支那の商業資本の、農村中に於ける不斷の流通は、即ち農民に對する不斷の搾取を積極化し、それによつて、資本の蓄積を重ねた。先進資本主義國に於ける商業資本の増員と、その集中の過程は、蓄積された資本が都市に流入しつゝ、大部分銀行に預金され、銀行資本の活動力を加重するの形態をとつた——（支那に於ける商業資本の蓄積、集中の過程も亦、或る程度まではこれと同じ経路を辿つた。とくに支那では投機事業に對する活動が最も顯著なる事實をなし、その頗る小部分が産業資本のなかに投ぜられて再生産を擴大した）——。斯くの如き流通過程から、生産過程に至る間に於いて、資本主義を促進しながら、剩餘價値の搾取を擴大することが、資本主義社會中に於ける商業資本の具有する機能であつた。然るに支那の農村に於ける商業資本の發展と、その蓄積の過程とは、先進資本主義國に於ける商業資本の具有する機能に較べて、次に列擧するが如き相異つた二つの意義をもつてゐた。（一）その第一は、支

那農村に於ける資本主義經濟の落伍に表示されてをり、自然商業資本主義自身に濃厚なる半封建性經濟の特質を帶有しつゝあつた。（二）と共にその第二は、支那をして國際資本帝國主義の商品市場及び原料市場たらしめた事實に表示されてをり、勢ひ商業資本が強烈な買辦性を帯びるに至つた——。而してこの二つの意義は支那農村に對して、著しく強い壓迫力をもつてこれに迫つたことは勿論である。

支那の商業資本と、國際資本帝國主義との間には、前述の如き密接なる關係が形成されたと同時に、商業資本は、またそこに高利貸資本と合流するに至つた。支那の主要都市には、多くの外國銀行があり、これらの銀行は、商業資本に對して強烈なる作用をなし、支那の經濟に對する統治を形成した。このことは、外國銀行と支那銀行とが、商業資本と、高利貸資本とを利用しながら、支那農村に於いて残酷なる搾取を加重し、同時に商業資本と、高利貸資本との結合を形成せしめつゝ、さらに兩者の因縁を緊密ならしめた。マヂヤールは、その著「支那農村經濟」に於いて、次の如く——「植民地の財政資本は常に銀行資本の形成を抛棄し、以て高利貸資本に變轉した」——「吾等は支那に輸入された財政資本が、また高利貸資本の用をなすことを見た。且つ吾等はまた外國資本の大部分が、支那に於いて商業資本として用ひられたのを見た。而して商業と手工業とは、固より高利貸資本に依頼した。支那に於ける大工業の大多數も亦これを應用した」——と喝破した通り、支那農村に於ける高利貸資本と、外國銀行との間には密接な聯絡があつた。即ち前者は後者の支配と統制とを受けたのである。斯くて高利貸が搾取した利潤は、その一部分が銀行と、企業（中外を問はず）に投入され、而して資本主義的經濟活動の分子として參

與したが、このことはまた純粹な封建社會に於ける高利貸資本の具有する特質に對比して、少なからずその趣を異にしてゐたのである。と謂ふのは現在支那農村に於ける高利貸資本には、實際上、次に示すが如き二つの性能と、作用とを帯びてゐたからであつた。(一)その一つは封建的のそれであり、その一つは資本主義的のそれであつた。(二)而していまこの兩者を對比するに當然封建的のそれの方が優勢たるを失はなかつた——。勢ひ現在支那農村に於ける高利貸資本の一般的盛行の主要な點を擧ぐるとき、その一つは支那の農村中に於ける資本主義經濟の一般的落伍に表示されてをり、他の一つは中外資本主義の支那農村に於いて實行しつゝある殘酷なる消極的の搾取に表示されてゐる。尙ほこれを現實の實例に徴するならば、四川の川東或は川南の各縣に於いて、現在農工銀行が設立されてゐると雖も、それらは専ら中外資本主義の直接間接的指導の下に勃興したものであつたこと、及び而かもこの種の銀行は借款による高利貸資本の大本營であつただけに、一般的銀行資本の作用とは全然同一ではなかつた等々その一つである。斯うして支那農村に於ける高利貸資本には、前述の如く、封建性と、資本主義性との二つの特質を兼ね具へ、實際的には、封建的性質が異常に濃厚であり、資本主義的性質が比較的稀薄たるを失はないのであつた。このことはまた封建的性質から、資本主義的性質に轉換せんとする過程を表示しつゝある所以であるが、この間に處した高利貸資本は、没落期に於ける國際資本帝國主義と、支那買辦資本主義との直接、間接の指導の下に、その消極的殘酷なる搾取を實踐しながら、同時にその積極性(資本主義的性能)を發揮することには、頗る臆病であることを免れないのであつた。そのために既述の轉換の過程は、必然的に緩慢的

となり、自然支那農村に於ける資本主義經濟は、落伍の段階を飛躍し得ないでゐる」(雜誌「文化批判」第二卷、第六期「轉形期中國經濟の特質」七「中國農村中の商業資本と高利貸資本の特質」抄譯)。

第四節 商業資本の支那經濟上に於ける地位作用

順序上、本節では専ら商業資本の支那經濟上に於ける地位と作用とを瞥見するため、雜誌「中華月報」第一卷、第六期「商業高利貸資本と中國農村」と題する論文から、次の一節を摘録することとした。

「農産物の商品化と、農民の貧乏化とは、商業高利貸資本の活躍するに、最も有利な條件であつた。即ち商業資本は、本來農産物の商品化に随伴しつゝ、農民の農産物賣買の中間に於いて、その利息の掠奪を進めたのであるが、農民の貧乏化の條件の下に於いては、商業資本が既に商品市場を操縦することによつて、農民は當然その賣買の渦中に捲き込まれざるを得なくなり、高利貸の利息の擡高に對しては、農民も亦期せずしてその間に投入せざるを得なかつたからである。而かも支那の商業高利貸資本の發展は、中英戰爭(阿片戰爭を指す)以後、國際資本主義の侵入と共に、一つの新しい段階に進んだ。と謂つたからとて、支那の商業高利貸資本は、長期間に渉る農産の商品化と、農民の貧乏化との、二つの條件の下に於いて、その發展を進めたと共に、それ自身には根本的に少しも變革しなかつたがために、以上の二つの條件の一般的程度を維持し得たことに何んの變化をも見せなかつたのであつた。ただ國際資本主義の侵入後、この二つの條件の一般的程度が、益々加重されたのに過ぎな

いたのであつた。このことは次の二項によつて説明することが出来る。即ち(一)從來支那には、單に家庭手工業があつたのみで、交換の範圍も亦、ただ手工業生産、及び農産品に限られてゐた上、尙ほ且つこの生産品は、大部分自家消費に限りてゐたが、(二)資本主義商品の侵入により、單に物品の種類を増加したのみに止らず、資本主義商品による打撃が、固有の手工業生産品に代り、及び資本主義生産が、農業原料に對して、これを掠奪し、交換の範圍を擴大するに至つたからである。斯くの如くにして農民は、日用品の方面に於いて既に固有の手工業生産品を捨て、外貨を採用せなければならなかつたのみでなく、一面に於いてはまた、生産物を賣却してその報償を求めなければならなかつた等、商品化の程度が、従前に較べて夥しく強化されたのである。同時に家庭手工業は、もと農業生産に附屬し、數千年來、多くは農民の主要収入の一部分をなしてゐたのであつたが、資本主義經濟の侵入による固有の家庭手工業の衰退は、——その間同時に資本主義的手工業がこれに代つて興つたと雖も、然しながらその普遍性は未だ従前のやうな固有手工業の程度にまで到達し得なかつた——農民をして一部分の重要収入を喪失せしめ、勢ひその貧乏化を加重する結果を招致したのである。それに次いで國際資本主義の侵入と、資本主義經濟の普遍化に伴ふ資本主義生産方法の決定により、必然的に農業の凋落を促し、農民の窮乏化が、さらに激化するに至つた。元來商業高利貸資本の農村破壊と、農民の流亡の促進は、そこに資本主義が要求するところの市場の統一及び購買力の増高と相衝突すべき性質を帯びてゐた。一般的に資本主義の發展が、必然的に土着の商業高利貸資本の勢力を打破するに至つたと謂はれてゐる根本の理由はこゝにあつたのである。

然しながら、支那の如きは、自身に資本主義生産方法を產生すべき前提條件を具備せず、自然自發的の產生が特徴づけられなかつただけに、資本主義經濟の侵入が開始されたのちには、却つて土着の商業高利貸資本に對して、その發展、活躍の機會をすら與へたことを看過出来ない。當然こゝに支那の資本主義化と、商業高利貸資本との間に於ける一つの根本的の矛盾が横はつてゐたのである。同時に新興商業資本は高利貸資本に屈服せざるを得なかつたことも亦、如上の根本的の矛盾をして一層濃厚ならしめねば熄まなかつた。然るに斯うした結果は、また土着の商業高利貸資本を、買辦性に染め上げ、各種の方法を透過して、これを資本主義に附庸せしめた點を重要視すべきであつた。斯くの如くにして支那社會——とくに農村社會に於いては、充分なる條件の具備の下に於いて、商業、高利貸資本が、多方面に涉り最も顯著に表現されてゐたのである。とくに商業資本の農民に對する擄取は、農産の賣買に由らざるを得なかつたとは謂へ、支那農村に於ける生産方法の落伍に基因して、商業資本は凡ゆる機會を利用しながら、多種の形態を以てする作用をそこに表現したことは謂ふまでもない。(一)支那に於ける各市場の隔離は、商業資本にとつての最好の機會であつた。それは一面に於いて小農が經濟能力に限られてゐたため、自身の農産に對し、これを直接市場に運搬して、賣出す力がなく、自然商人の手を通せなければならなかつた結果、一切の價格はただ商業資本家の操縦するところに任せられたからであり、各地の農村に於ける米行、棉行、糧商等は農産物賣買の機關であつて、これらの手を通じなければ農産物が市場に出る方法がなかつた。而して農産物を賣却して得た農民の所得は、彼等の得た代價よりもより低かつたことは勿論である。他の一面に於いては市場

の隔離により、富裕な商業資本家は、その間賣買を壟斷することによつて厚利をむさぶつた。等々、その主なる點である。(二)農産物の價格の變動は、また商業資本の農民搾取に對する絶好の機會であつた。商品市價の變動には、元來所謂商業の自然法則の存在がなく、而かも生産落伍の支那農村中に於いては、それらがすべて商業資本家の操縦の下に、引き起されたのであつた。即ち商業資本家は、農村金融の季節性を利用しつゝ、農産物收穫の後に於いて、その農産價格を暴落せしめたことなどがその一例である。かゝる場合農民は、借金の返還、地代の納入、その他公課の納付等々のために、現金の需要にかられた結果、農産物を廉價に賣却せざるを得なかつた。尙ほ且つ端境期に於いては、農産物價格の暴騰に基く影響を蒙ること夥しく、農民は斯かる経緯によつて商業資本家の高利の搾取を受けたのであつた。さらに商業資本家は、市場の不統一を利用しつゝ、不同的價格を保持し、以て常に農民に對する搾取の強化を圖つた事實をも亦、これを看過出来ぬのである。(三)生産落伍の特徴の一つであるところの、支那に於ける度量衡の不統一も亦、商業資本に對して農民に對する搾取強化への機會を與へた。支那各地に於ける度量衡の不統一と、その紊亂とは著しく、斯うした度量衡の不統一は、常に商業資本家をして、これを以てする農民搾取の手段の一種たらしめた。(四)農村金融の季節性と、農民の一般的貧乏化とは、商業資本家をして、さらに残酷なる方法による農民搾取を加へしめねば熄まなかつた。例へば農産物の抵當借入れ、或は農産物の賣却豫約(所謂青田賣り)等その一例である——。以上叙述したるが如く、支那農村中に於ける商業資本は、そのすべてに高利貸的性質を帯びてゐるのであるが、唯その高利搾取の鋒芒が、交換關係によつ

てカムフラジ―されてゐるため、交換關係の背後に隠蔽された高利貸的作用は兎角忽視され勝ちであると雖も、支那農村中に於ける貸借制度の上に表現された商業高利貸資本の農民搾取に對しては、誰しもこれを看過するものがないこと程左様に、露骨であり、且つ残酷たるを失はないのであつた。換言せば支那農村中の貸借制度は、農民の搾取に對して、さらにまた一步を進め、商業の搾取に比し、一段の峻烈さをもつてゐるのである。それは(一)農村に於ける金融の流通状態に最も鮮明に表現され、(二)同時に農産物の賣却豫約(所謂青田賣り)にも、(三)乃至糧食、農具の貸借にも、(四)及び商業資本と、高利貸資本との記帳賣買形態(農民に對する長期の掛賣り)にも、(五)或は抵當貸借中最も普遍的に行はれてゐる當典(質屋營業)と、土地擔保の貸借にも、(六)または支那固有の原始的な合作制度たる錢會(無盡、頼母子講)にも、それらの何れにも最も徹底的に表現されてゐた(中華月報、第一卷、第六期、馮和法氏の「商業高利貸資本と中國農村」の各項を抄譯)。

第五節 現段階の商業資本

「國際資本主義の侵入以來、支那の農村經濟は、甚大なる變化——即ち急激な速度を以てする崩壊への過程——を開始した。支那農村經濟の崩壊に隨伴して、土着の商業高利貸資本は、そこに當然最も顯著な特異的の趨向を特徴づけるに至つた。それは農民の過度の貧乏化によつて引起された貸借擔保の不安が、さらに高利貸者をして、その貸附利息を加重せしめ、これがために農村に於ける貸借利息は著しく奔騰せざるを得なかつたことが、その

一面であり、農村經濟の崩壊により、商業、高利貸資本の活動力と、搾取とが益々強化するに至つた事實によつて、別の一面が遺憾なく表示されてゐる。例へば農村破産の表徴の一つであるところの災荒の時期が、高利貸資本の活躍に對して、最も絶好の機會を與へた等の如きその一例である。然しながら、この場合、土着商業、高利貸資本が、農民の貧乏化を促し、さらに農民の貧乏化への發展を利用して、益々その搾取と、活躍力とを強化せしめたことは、同時に、自らの墓穴を掘るに等しい行爲でしかなかつた。例へば江蘇省に於ける長江沿岸方面を中心とした各地は、もとより商業、高利貸資本の最も活躍せる地域であつたが、現在同地方の農村は完全に破産し、高利貸資本家は、既に自作農に對しては、その土地を没收し、小作農に對しては、その草屋をすら没收して了つた。そしてこの土地及び草屋は、農産物の價格が採算原價にも達せざる客觀情勢の下に於いて、毫もその効用を發揮するところがなかつたため、彼等はこれを新興の都市銀行——銀行資本の經營に依頼するに至つた等々をその例證として擧げることが出来る。斯くの如くにして商業、高利貸資本家は、農民の手中から掠奪した「地契」(土地登記者)屋契(家屋の賣渡證)は、すべて都市の銀行に逃亡するに至つたのである」(中華月報、第一卷、第六期「商業高利貸資本と中國農村」から)。

以上の如く、商業資本の支那農村中に於ける搾取の強化は、農村經濟に對する内面的の破壊作用を逞しくしながら、益々發展するに至つたのである。

一方慢性的に推移しつゝあつたところの支那の農業恐慌——(支那に於ける農業恐慌の特殊性は、恐慌と、災荒

との交錯にあつた。この二つの大きな破壊力の挾攻の下に於いて、農村經濟の破産は、漸次深刻化して行つた。もともと恐慌と、災荒とは、極端に相反する作用である。恐慌の現象は生産過剩に表現され、災荒の現象は生産の不足に表現されるものであつた。然しながらこの極端に相反する二大作用が、時を同じくして交錯しつゝ、農業恐慌を構成してゐるところに、その特殊性がある)——は、さらに列強資本帝國主義の支那に對する進出力の加重に基き、急激な速度を以て益々その深刻の度を加へて行つた(このことは列強資本帝國主義が、その過剩農業生産品を、植民地または半植民地に對して、ダンピングすることにより、自國の農業恐慌を轉嫁せしめるべく努め、その大量の對支輸出が行はれた結果、支那の農業生産をして、一種の生産過剩に等しい假態の下に直面せしめねば熄まなかつたために引き起された現象である。同時にかうした事實は、支那に於ける農業生産物の輸入激増、とくに米、小麦、棉花、麥粉等の主要食糧品及び重要原料の輸入が、驚くべき量と額に達したのに徴して、これを知ることが出来る)。

同時に支那に於ける農業生産の部門に於いて、自然條件の劣悪(連年に渉る天災、災荒)、乃至その他の社會的條件の抑壓(原則的には自然威力の襲撃に對して、これに抵抗する強度な抵抗力を持ち得ない程、農民の生活が劣悪となつてをり、爲政者も亦、これに對し何等の社會的施設を加へなかつた)による作用と影響とが交錯し、自然支那の農業は、災荒その他による農業生産力の破壊力に基く生産の減退にも拘らず、輸入農産物の過剩状態の下に於いて、農業生産品の價格の低下に當面しつゝ、前述の如き農業恐慌の深化と相呼應して、農村はために打ちのめさ

れ、失業流民の激増と、階級分化の激化と、土地集中の強化等々の諸事象を結果づけ、未曾有の糧食恐慌は農民をして飢餓に彷徨せしめねば熄まぬまでの状態にすら立ち到らしめたのである。

斯くの如くにして、支那農村の購買力は、彌が上にも減退した生活、生産、再生産に必要な商品を都市から購入せんとして、今や、貨幣に代ふるべき何物をも持たぬ程度にまで沈淪するに至つたのである。そこには當然舊商業機構の解體すらが、傾向づけられ出したことは謂ふまでもない。

商業資本の支那農村に於ける高利貸的利潤は、斯かる際に於いては、必然的に昂められるのを常とし、その結果は、商業、高利貸資本の活躍に對して、絶好の機会を與へた筈であつたに拘らず、事實はさうでなく、商業、高利貸資本は、寧ろその回収難を懼れて、放出を躊躇したのみならず、舊資金の回収をさへ急いだのであつた（それは慢性的の農業恐慌——農村經濟破産への漸進過程中に於いてこそ、商業、高利貸資本の活躍の絶好機會であつたであらうが、如實の急速度的な、且つ最窮極にまで達した恐慌——それによる農村破産の状態の下に於いては、既に農民に借りるべき能力すら絶無となつた關係上、その活躍の範圍が著しく縮小されるに至つたことは必然であつたからである）。

以上の経緯により支那に於ける農村經濟の恐慌の深化は、農村中に於ける商業、高利貸資本の活躍の舞臺を最小限度にまで收縮せしむべく餘儀なからしめたのである。斯うした結果、大部分の商業資本は、前述の如く舊商業機構の解體（このことは商品の流通の停滞、商品の流通形態の上に於ける投機性の極度の萎縮、購買力の遞減に伴ふ

取引商談の激減、商取引上に於ける舊習慣の訂正、信用制度の縮減等々がその主なる原因であつた）による活躍舞臺の縮限と相應して、その出路を當然都市に向けたのであつた。勢ひ爾來、農村資金の都市流入が、最も顯著な傾向となつた。

農村資金の都市流入は、右の原因によるものゝほか、凶作と、農産物の値下りによつて貨幣收入の激減を來たした結果、農民の一部分は、その退職銀を以て、必要の物資を購入しまたは、租税の納付に充てなければならなかつたため、農村に於ける退職銀の都市——とくに上海——集中への趨勢を顯著ならしめたのである。

而して都市に流入した商業資本は、おのづから、銀行に集中し當然銀行資本のなかに融合するに至つた。

商業資本の都市流入には、以上の如く商業資本の意識的計畫的流動に基因するほか、國際商品の流通過程に於ける商業資本の自然的偏傾的流動——無意識に行はれた——によつて、なされた部分も亦相當に多かつた點を看過することが出来ない。それは外國商品の侵入以來、漸次その自足經濟が解體されるに至つた農村としては、専ら都市（主として經濟的首都たる上海）から商品（輸入商品を始めとして上海に於ける機械製品）の供給を受けなければならぬに拘らず、一方農産物の都市移出（多くは上海を経て海外に輸出されるものが、その大部分を占めてゐた）が、折柄の農業生産の極度の減退によつて、著しく減少するに至つた結果、従來のやうに農産物を賣つた代金で、輸入品若くは都市生産品を購入するといつた循環的作用が著しく縮小され、自然商品購入に要する資金は、農村に於ける蓄積資金が、これに充てられ、延ひて農村の資金が、都市に流出せざるを得なくなつ

たからである。そしてこの場合先づ商業資本が、商品流通の原則に従つて都市に向つて流れ、農村にとつては、最早都市に對して賣るべき商品がなくなつた關係上、さきに流出した資金が、逆流して來なかつた——。その延長として當時上海金融市場でも亦、外國銀行の手許に、この種の遊金が多く偏在されてゐた。それは輸出貿易の衰退に伴ひ、輸出資金の需要が喚起しないからであつた。尤も支那側の銀行と雖も、遊金の増加傾向は、ほど同様であつたが——。

従つて第三章に叙述するが如き、支那に於ける銀行資本の集積と、その膨脹とは、斯うした商業資本の、銀行資本への結合が、大部分を占めてゐるのであるが、さうかと謂つて、一面農村中に残された商業資本は、依然高利貸資本としての農村經濟に對する破壊作用を繼續し、同時に舊商業機構の下にその活躍を續け、さらに新興商業資本と共に、近代的商業——國際商品流通の過程の上に働いてゐることは勿論である。

舊商業機構の漸進的解體が、商業資本の活躍の方向を轉換せしめ、同時に銀行資本に融合せしめた例證としては、舊商業機構のなかに於いて、最も優勢な地位を占めつゝあつたところの舊式金融機關たる錢莊の機能が、漸を追ふて解體するに至り、あるものは新式銀行に壓倒されながら、その形態を改めてこれを新式銀行化するに至り、あるものは全く崩壊して了つた、等々の事實を擧げることが出来る。

尙ほ錢莊崩壞の過程に於いては、前述の如く舊商業機構の解體と、その動向とを遺憾なく表示してゐるほか、商業資本が帶有してゐた封建性の一面も亦、漸次他の一面、即ち資本主義性に蠶蝕されて行かうとする経路をも表示

してゐる。但しそれによつて支那民族資本としての商業資本の、封建性から資本主義性への過渡期に於ける作用と、その本質とは何んの變革をも來たさなかつたことは謂ふまでもない。

たゞこの間に於いて次に指摘するが如く、

「同時に農産物貿易の國際化と、國際金融資本主義の農村侵入後、土着の商業、高利貸資本も亦、それに屈服せざるを得ず、資本主義の代理——即ち買辦性の帶有を著しく濃厚ならしめた(中略)。近年來農村合作社の發達の結果、國際金融資本主義經濟の羽翼の下に於いて、銀行資本がこの合作社を透過しながら、農村に侵入し、土着の高利貸資本を利益の圏外に排出する作用をなした」(中華月報、第一卷、第六期、馮和強氏の「商業高利貸資本と中國農村」から)。

等々の現象を示現せしめ、農村中に於いて、銀行資本との對立の局面を形成するに至つたと雖も、銀行資本の支那農村に對する進出力は、極めて微弱たるを失はなかつたため、斯くの如き對立の局面は、依然その範圍を著しく制限されてゐたことは謂ふまでもない。

第二章 工業資本の發展とその停滞性

第一節 緒言

支那に於ける近代資本主義化の歴史は、僅々五十餘年に過ぎない。この五十餘年間の發達が、次の如き諸段階を経て、現在に至つたのである。

- (一) 第一期 軍用工業時代（一八六二年から一八八一年まで）。
- (二) 第二期 官營及び官營民有時代（一八八二年から一八九四年まで）。
- (三) 第三期 民營工業の萌芽時代（一八九五年から一九〇四年まで）。
- (四) 第四期 民營鐵道時代（一九〇五年から一九一一年まで）。
- (五) 第五期 工業資本の形成時代（一九一一年以後）。

即ち近代的機械生産工業は、先づ軍用工業の開發によつてなされ、次いで一般的生産工業に及んだのである。斯くの如くにして、その間歐洲戦争が、支那の近代資産階級を養成した搖籃であつた。爾來工業資本は相當な程度の發展を成し遂げたとは謂へ、その間種々の経緯を経て、現在の如き、民族工業の落伍状態——著しき停滞性を表現しつつ——を呈せしめるに至つたのである。

いま本章に於いて支那の民族工業資本の構成と、その停滞性に對する分析とを試みんとするに當り、先づ工業資本の形成過程を概観すべく「中國産業革命概観」から、次の項を摘録することとした。

工業資本の形成

歐洲戦争による外國商品の輸入中斷が、支那の幼稚工業の發展を促進した。斯くて所謂「國貨」の生産は當時を境として増加しながら、新式小工業が、その勃興を示現するに至つたのである。就中その中の首位に列したものは、當然棉紡織工業であり、それに次ぐを燐寸工業となした。そしてそれらは比較的小工業たるの域を脱しなかつたと雖も、工場設立の簇生が、既に輸入貨物の半數をまで防止し得たのである。とくに各種の棉織物の輸入に至つては、歐洲戦争以前に較べて、次の如く全く相反するの趨勢を呈した。

棉織物の輸出入状態

	一九一三年	一九二一年	一九二二年
輸入	二一、〇九一、〇〇〇疋	一一、三六七、〇〇〇疋	一三、四八三、〇〇〇疋
輸出	二、六八五、〇〇〇擔	一、二五〇、〇〇〇擔	一、一九二、〇〇〇擔
	九八、一二五疋	三六三、八九二疋	四一五、六三九疋
	四九、三三三擔	一〇一、六六五擔	一〇三、四二四擔

以上のほか、麥粉、紙捲煙草、皮革、毛巾、針織品、石鹼、蠟燭、化粧品等等も亦、國內生産品の増加により、

輸入の減少と、輸出の増加とを現示した。ここに工業資本の集積を見るに至つた所以であり、いま以上の諸商の数字を示すと次の如くである。

輸入貨額減少統計（單位海關兩）

	一九一三年	一九二一年	一九二二年
毛織品	九五七、八五三	二四一、一九九	一五九、一八四
針織品	一、九一三、七〇三	一、七八六、一七七	一、三四五、八二一
毛織品	四六七、四八九	三九二、〇六一	一四三、九八〇
絲帶	五一六、四九三	一五三、六五八	六〇九、四二〇
洋傘	八九五、六九二	五八四、五〇〇	九四七、三七二
其他雜貨	一、四五七、八〇〇	九一二、六六七	八、七八九、一四六
計	一〇、二八二、五三三	九、一四八、八五五	一三、二二〇、五〇二

輸出貨額増加統計（單位海關兩）

	一九一三年	一九二一年	一九二二年
紙捲煙草	三六四、六八一	一三、四〇七、六〇八	一〇、一七〇、九三三
麥粉	五一六、九九七	九、三六六、二五四	三、六五四、八一〇
皮革	四、〇八六	一一七、五六六	一七九、三六六

石鹼	一九一三年	一九二一年	一九二二年
石鹼	五、九八一	六二二、四二七	一六六、一七五
機械製紙	五三二	九〇、九九七	八七、〇四三

その他例へば機械と、原料品の輸入の増加は、工業發展の趨勢を證明することが出来る。但し原料品のうち、半加工品が多く、而かもこの半加工品の原料は最初支那から輸出されたものである點に注目すべきあるものが潜んでゐた。而して機械及び器具、並びに原料品の輸入状態を示すと次の如くであつた。

機械器具の輸入増加統計（單位海關兩）

	一九一三年	一九二一年	一九二二年
紡織機械	六四三、〇〇〇	五、一〇九、〇〇〇	二、三九五、〇〇〇
農業機械	一一三、〇〇〇	二、一九二、〇〇〇	六九五、〇〇〇
其他機械	三、七〇〇、〇〇〇	二六、七三二、〇〇〇	一八、二四七、〇〇〇
機械附屬品	五〇、〇〇〇	九三一、〇〇〇	六三四、〇〇〇
總計	四、五〇五、〇〇〇	三四、九六四、〇〇〇	二一、九七一、〇〇〇

原料品の輸入増加統計（單位海關兩）

	一九一三年	一九二一年	一九二二年
織寸材料	四九六、〇〇〇	二、二八一、〇〇〇	二、八五七、〇〇〇
棉花	三、〇一七、〇〇〇	三五、九六七、〇〇〇	四一、九五六、〇〇〇
總計	八、〇一八、〇〇〇	七三、一二二、〇〇〇	六六、七五四、〇〇〇

尙ほ支那に於ける新式工業の會社は、前北京政府農商部の統計によるに、一九二四年に至る當時既に登記されてゐた會社は、次の如く、

棉製品製造一二九、絹織物二三、麥粉九七、製油二一、燐寸六六、皮革一一、蠟燭石鹼三五、砂糖四、製紙二三、陶磁器一〇、煉瓦一〇、石灰洋灰七、鐵工二三、玻璃六、樟腦四、精鹽四、曹達四、煙草二〇、蛋粉五、鹽造九、化學工業一四、雜業五〇。

と、總計五六五會社で、その資本總額二二四、一四三、四四九元に過ぎなかつたが、これを農業と、商業に於ける會社數とその資本額に比較するとき、一九一九年現在に於いては前者が一〇二社二二、四六八、八〇四元、後者が一三二社二四、〇九一、六三〇元に對し、工業資本の集積の程度が、農業會社の約二倍、商業會社とほぼ同様の比率を保つてゐた（李達氏著「中國産業革命概論」第六章「中國境内の資本主義の發達」四「工業資本の形成」を抄録）。

第二節 工業資本の發展過程

(一) 近代工業發展の史的經過

支那に於ける新式工業の發生は、阿片戰爭の時代に醸成され、而してその正式に開始されるに至つたのは、同治初年の頃であつた。斯くて爾來前節に區分したるが如き五つの時代を劃しながら、その發展を過程したのであるが、一般的には、その發展の史的經過に對し、これを次の如く區分しゐる。

官督商辦時代	一八六二—一八九四年	約三三年	過渡時代	一九〇三—一九一一年	約九年
外人企業時代	一八九五—一九〇二年	約八年	商辦工業時代	一九一二—一九二五年	約十四年

而かも一九二六年以降は、大體に於いてその發展の停滯期に入り、漸次困憊整理期を経て近年に於ける恐慌期から、恐慌の深化に伴ふ破局的危機に直面するに至つたのである。

然らば支那の新式工業は、以上列舉した各期間に於いて、如何なる發展への經過を辿つたであらうか——以下「中國近代工業發展概論」から——

官督商辦時代

支那に於いて新式工業の創設されたのは、同治初年であり、以來漸を追ふてその勃興を來したと雖も、それらの大部分は、巨商顯貴が商人を招いて、これにその創設をなさしめたものが多く、自然最初に着手した工業は、半ば強制的の性質を帯びた軍用工業であつた。同治元年李鴻章が「製礮局」を上海に設立したのを以て、支那に於ける機械工場の嚆矢となし、次いで同二年曾國藩が、米國に赴いて鐵工業機器、洋鐵等を購入の上、同四年上海に「江南造船廠」を設立した。同五年には左宗棠がまた「船政局」を福州に設け、沈葆楨の路政大臣となるに及んで、同年當時の直隸督辦李鴻章が、天津及び太沽北塘礮台との間に電線を架設した。蓋しこれが支那に於いて電信の開設された最初である。同六年李鴻章は、さらに上海に「江南製造廠」を創設した、同年崇厚が、天津に機器局を設立し、同八年朝命を奉じて李鴻章により、その操業が開始された。その後同治十年には曾國藩、李鴻

章等の奏請によつて海外留學生三十名を米國に派遣し、光緒二年、さらに兵技學習のため七名を留學せしめ、次いで福建馬尼廠の學生が、佛、英の二國に留學の上、工業を視察した等、爾後海外留學生が益々増加し、ために新式工業の提唱が盛んに行はれ、光緒年間さらに大兵工廠——光緒三年設立された四川成都の「兵工廠」と、光緒十七年張之洞の創設した「漢陽兵工廠」とがそれであつた——が、創設されるに至つた。斯くの如くにして、軍用工業に次いで起つたものは、紡織工業であつた。而かも棉紡織工業の發達に於いては、その速度が最も著しかった。光緒四年左宗棠が甘肅に於いて機器氈呢廠を設立したが、支那に於ける新式カーベット工場の濫觴であつたと雖も、惜しいことには僻疆の地であつたため、全く世人の注目するところとならなかつた。光緒八年李鴻章によつて「上海織布局」の創設が計畫され、同局の製品は同時に沿線に於ける釐金税を免除された等、現在に於ける大工業の先鞭をつけたが、光緒十六年操業開始後十九日目に火災にかゝり、烏有に歸した。同年織布局と同時に李鴻章が、機器紡織局をも創設し、外人技師を聘いて紡織工業を開始した。これが支那に於いてその歴史の最も古い機械棉紡織工場であつた。それ以來、紡織工場の設立されるもの漸次増加し、光緒十七年には張之洞が「湖北織布局」を、同二十年には「湖北紡紗局」を、同時に「華盛紗廠」及び「裕源紗廠」が上海に、等々相次いで興つた。官督商辦時代に於ける支那の新式工業は、かうした経緯の下に發展したのであるが、その他光緒九年上海に創設されたところの「源昌機器五金工廠」、光緒二十年湖北に創設されたところの官營の「聚昌」、「盛昌」等の燐寸工場のほか、光緒十二年廣東に「維絲局」、同十九年には、武昌に「織布」、「紡織」、「製苧」、「蠶

絲」の四局の設立を見るに至つた。兎まれこの時期に於ける新式工業の提唱獎勵に對して、最も力を盡くしたのは、何んと謂つても、北洋大臣李鴻章と、湖廣總督張之洞の二人であつた。

外人企業時代

日清戰爭後、馬關條約の締結により、外人の支那に於ける工場の設立が開始された。即ち光緒二十二年馬關條約締結後の僅か一年後に於いて、上海には既に新式の外商紡績工場が五工場設立されたのである。英國系の「怡和」「老公茂」、日本系の「上海紡織」米國系の「鴻源」及び「瑞記」等々がそれであつた。これらは何れもその創始の際に於ける規模が、比較的狭小たるを免れず、五工場の紡機總錠數一五八、〇〇〇錠、織機三、五〇〇臺に過ぎなかつたとは謂へ、これを同年に於ける支那人の經營にかゝる七工場の織機一、七五〇臺、紡機總錠數二五九、〇〇〇錠に比較して、相當の勢力を占めつゝあつた（尤も光緒二十三年後、以上の情勢に大きな變化を與へ、瑞記紗廠は英國商の手に轉賣せられて東方紗廠と改稱され、鴻源紡織も亦英國商人が買入れて、のちこれを日本人の手に賣渡され、日華紡織と改稱するに至つた等、支那に於ける紡織工業は、英、日の兩國人の手に移り、同時に支那人經營の大純紗廠も、上海紡織の手に買收され、斯くて支那に於ける紡織工業を中心とする英、日の對立勢力を形成するに至つた）。次いで外人の支那に於いて製粉工業を企畫するものも亦、この時出現し、光緒二十二年英國商人が上海に「増裕麵粉會社」を設立し、光緒二十六年露國はハルビンに滿洲製粉會社を創設した。さらに紙捲煙草の消費が全國内に普遍化するに及んだ結果、斯業の最も雄厚なるもの——「英米煙公司」も創設され

るに至つた。「英米煙公司」は米國の聯合煙草會社と、英國の帝國煙草會社とのトラストであり、その資本金が三千萬弗で、爾來實力の雄厚なるがために、支那國內に於ける各煙草會社は、これに壓倒され、同社は上海、漢口等に工場を増設したが、上海工場の如き、その生産量毎年三十三億本以上に達し、雇用職工數が、一萬五千乃至二萬に上つた。然しながら、この時期に於いて支那人自身の創設にかゝる新式工業企業も亦少くなかつた。とくに紡織工業に於いては、外來の潮流に従つて、國人間に漸く、その有利なることが知悉するに至つた結果、これに手を染めるもの漸増し、光緒二十二年には、支那に於いて比較的その規模の宏大な工場——上海の華盛、大純、裕源、紡織新局等、無錫の業勤、蘇州の蘇綸、通州の大生など——が、江蘇省内に創設された。自然江蘇省は支那に於ける紡織工業の中心地帯となつた。支那人經營にかゝる新式機械製粉工業も、同時に勃興し、光緒二十六年露國が、北滿に「滿洲製粉會社」を設立したのと、時を同じくして、通州の巨商らが、南通に「大興麵粉廠」を起した。それを契機として上海では「華興」、「阜豐」無錫には「茂新」等の製粉工場が、相前後して設立され、支那に於ける現在の一大新工業部門——製粉工業——の基礎を確立したのである。越へて光緒二十三年北京の西、清和鎮に「溥益吃革公司」の創設を見るに至り、最初は官民合辦であつたが、のち「清和陸軍呢廠」と改められた。この工場は支那最大の軍服地製造工場である。光緒二十六年には開鑿鑛局附設の「洋灰公司」が創立し、同三十二年「啓新洋灰公司」がこれを買収して經營を續けたが、この工場も亦、支那で最も古い洋灰製造工場である。尙ほこの時期に於いて最も注目すべきは、「漢陽鐵廠」が民營に改められたこと、「商務印書館」の創立され

たことであつた。

過渡時代

日露戰爭は、支那に於ける工業の發展に少なからぬ影響を與へた。戦後支那政府は、從來の工業政策上に於ける軍需第一主義を捨て、専ら、實業の振興に従事することとなつた。自然支那の工業も亦官督商辦期から、商辦或は民營工業の時期に過程すべき過渡の段階に入つたのであつた。元來官督商辦時期に於ける新工業は、その資本に於いて商辦工業に比し雄厚たるを失はなかつたとは謂へ、數十年來の趨勢に加へて——(一)官紳萬能主義が専門人材の登用を重視しなかつた。(二)外人依存の過重等々の結果、著しく凋落状態に陥つたため、その後政府が漸く工業商辦の獎勵を行ふに至り、それらを原因として官督商辦工業が益々衰微しながら、商辦工業が隆興を見せるやうになつて行つた。謂ふまでもなく官督商辦工業の失敗には、もとより失敗の原因があつたと雖も、商辦工業が、これに代つて興つたことが主要な原因であり、同時に商辦工業の隆興は、政府の獎勵に基く民間企業の促進が、その主因であつた。當時政府が民間に於ける工業企業の獎勵に對して、如何に注目を怠らなかつたは、清朝が、商部の設置及び、工商業獎勵辦法の公布を決定したなどによつて、この間の経緯を窺知することが出来る。斯くの如くにして商部が新設されたのち、政府は商辦工業の獎勵に對する具體的な意志表示をなし、同時に商律(商法)及び、公司註冊試辦章程十八條を公布した。支那に於ける公司條例(會社法)は、この時公布されたものが、その最初の法規であつた。光緒三十二年政府はさらに、商部の範圍を擴張して、農工商部と改め、

同時に個人經營の商業も亦、公司と同じく註冊を申請することが出来る規定を設けた。それがために一時利權回收の聲が、海内に普遍化するに至つたのと共に、國內新工業の創設も亦、雨後の筍の如く發生した。この期間に於いて商辦工業の獎勵に關する施設も亦、少なからず實現し、光緒三十一年袁世凱は、天津に「工藝總局」を設置したほか、商部は北京に「勸工陳列所」及び各省に、高等實業學堂を新設したと共に、同三十三年「實業賞爵葉章」すら規定され、一十萬元以上の實業を創設したものは男爵を、二十萬元以上の實業を創設したものは子爵を授與することとしたなど、それであつた。而かもこの期間中に於いて大規模の商辦工業が、漸次建設され、光緒三十二年盛宣懷の創辦した「漢冶萍公司」及び、同三十三年創設された「南洋兄弟煙草公司」等は、支那に於ける新式民族工業の巨擘であり、現在に於いても、尙ほこれに匹敵するものが出ない。従つて當時既設工場の擴張、乃至増設されたものも亦頗る多く、光緒三十三年山東の「博山玻璃公司」が増資し、同三十二年には「江南造船廠」を改めて官督商辦企業となしたのみでなく、同三十三年には、張之洞が「大冶水泥廠」を設立したなどその一例である。而して斯うした過渡期に於いて、最も發達の顯著であつた新式工業は、依然紡織工業であり、これに次ぐものを製粉工業となし、そのほか陶器、煙草、製油等の各工業にも見るべきものがあつた。その投下資本についてこれを見ると、鐵工業が首位で、「漢冶萍公司」の如き一社の資本金が二十萬元に上つてゐた。資本總額の最も大きいものは、棉紡織工業であつたが、その平均資本から謂ふとき、電氣、玻璃の兩工業に及ばなかつた。蠶絲、製粉、燐寸工業等頗る發展の趨勢にあつた。

商辦工業時代

辛亥革命は政治革命であつたが、工業革命にも亦多大の影響を及ぼし、官督商辦工業は、遂に過渡期を經過して凋落から遂ひに没落への淵に沈淪するに至つた。宣統三年上海に於いて所謂ゴム株恐慌を惹起した。各錢莊は投機熱に浮かされて、ゴム株に投資したが、久しからずして恐慌に襲はれたのがそれである。次いで辛亥革命は、錢莊の莊票に對する支拂不能を起さしめ、官錢局も亦、大半これに牽制せられて倒閉した。そこで官督工業は極度の金融難に陥り、官督商辦工業も亦、工業の舞臺に活動し得なくなり、斯くて商辦工業のみが獨り隆興に赴いた。

(一) 商辦工業勃興の原因 民國元年以來、支那の商辦或は個人經營工業は、甚だしき勢を以て勃興して來たことは前述の如くである。その原因は從來官督工業の腐敗、積弊の甚だしかつたのに對する反動であつたが、更にその直接間接の原因としては次の數項を數ふことが出來た。(一) 従前支那の官吏は、山西及び外國銀行に預金するものが頗る多かつたが、近年來漸次工商業に對する投資の途を知り、また政治界の混亂に乗じて、在野政客の實業界に身を投ずるものが増加するに至つた。(二) 外國商人の支那に於いて工場を經營するものが、漸次増加し、それが支那人の企業心を刺戟することが夥しかつた。(三) 歐洲戰爭を機會として貿易の隆興が、各工場に對して巨大な利潤を提供した。(四) 支那に於いて頻發するに至つた日貨排斥運動が、國貨獎勵熱を煽り、自然各種の製造工業の勃興を示現せしめた。(五) 政府は新式機械工業獎勵の趣旨から、機製洋貨に對して免稅の特典を

與へた。(六)各種の附屬企業、例へば銀行、鐵道、航運、郵電、鑛産等が漸を追ふて發達し、且つ工商業に裨益を與へた。

(一) 歐戰以前の商辦工業 民國元年から民國十五年前後を劃期とするところの商辦工業時期を、さらに歐洲大戰を境として、これを三期に區分することが出来る。即ち歐戰以前を、その形成時期とし、歐戰中の幾年かを活躍時期とし、歐戰後を低徊時期と稱して好いであらう。元來新式工業の興起には、一定のコースがあつた。先進工業國に於いては先づ最初に發達し、資本の集中を見るに至つたものが、棉紡織工業であつた。この意味に於いて支那に於いても亦、棉紡織工業が、新式工業中の巨擘であつたのである。光緒年間から現在に至るまで、その他の新式工業は或は興り、或は衰へたと雖も、獨り棉紡織工業のみは終始前進を續けて來た。歐洲戰爭以前に於ける、支那の商辦工業の中に於いては、とりわけさうであつた。棉紡織工業以外、この時期に發展した新式工業には、依然製粉、電氣、及び燐寸等の諸工業があつたことは謂ふまでもない。

(二) 歐戰中の商辦工業 歐洲戰爭が爆發してから、支那の産業は躍つて勃興するに至つたことは既述の通りである。西歐諸國に於ける諸工業は、戰爭によりて或るものは軍需品の生産に忙殺され、或るものは、またその他の事情のために生産を停止せざるを得なかつた。さうした結果極東市場を顧るの暇がなかつたため、支那の産業は、外來の競争力がなくなつたのを千載一遇の機會として、漸次生産工場の新設されるものが簇出するに至つたからである。而してこの間の發展經過に關しては、次に表示するところの數字が、的確にこれを物語つてゐる。

工場種類	過渡時期		商辦工業形成時期		商辦工業活躍時期	
	平均毎年新設工場數	その平均資本額	平均毎年新設工場數	その平均資本額	平均毎年新設工場數	その平均資本額
生絲紡織	五/六	二二七、五〇〇元	一/三	五〇、〇〇〇元	一・六七	一七六、四〇〇元
棉紡織染	四	三八五、〇〇〇	六	四四七、二二二	五・六七	一一八、〇〇〇
製粉	二	一九四、〇〇〇	五・六七	九九、〇五九	五・六七	一六八、〇〇〇
電氣	一・二七	五九〇、〇〇〇	四	一三八、五八五	七・三三	一六〇、〇〇〇
燐寸	五/六	二〇九、八三三	四・三三	三〇、五三八	三	七三、〇〇〇

即ち以上によつて知ることを得る通り、支那に於いて新設された工場數の増加率は、歐洲戰期間内に於いて、その速度が最も著しく、その資本に於いてこそ、過渡時期の雄厚さに及ばなかつたとは謂へ、尙ほ且つ戰前に較べて増進するところ夥しく、而かも各種の新工業も亦、この時期に創設されたものが最も多かつたのである。これは確かに驚くべき進歩的現象と謂はざるを得ないのであつて、試みに民國八年の支那全國に於ける新式工場總數及びその資本を示すと次の如くである。

工場種類	工場總數	資本總額
鐵工	一〇	二一、四六七、〇〇〇元
煉糖	二	七〇〇、〇〇〇

洋	灰	四	二、七二五、〇〇〇
製	革	七	四、一〇二、〇〇〇
棉	織	八〇	四六、一二七、〇〇〇
水	道	五	三、五三三、〇〇〇
精	鹽	二	六三九、〇〇〇
煙	草	一七	七、〇三〇、〇〇〇
製	麻	一	三〇〇、〇〇〇
釀	酒	五	二、三三〇、〇〇〇
豆	腐	一	二、二〇〇、〇〇〇
印刷及び文具		一八	三、八一九、〇〇〇
精	米	一三	二、八六九、〇〇〇
製	粉	六二	一三、七一〇、〇〇〇
製	紙	七	一、七六五、〇〇〇

(四) 戦後の商辦工業 歐洲戦争後と雖も、支那に於ける新式工業は、戦時中の隆興を承けて、依然健實なる業績を續け得たが、爾來久しからざるうちに、西歐各國の經濟状態が漸次恢復し、その對支進出力を復活するに至つたのと、一方支那の商工業を制覇せんとした日本と、これらの西歐諸國との競争の激化等により、支那の産業は當然難關に直面せざるを得なかつた。然しながら、多くの工場は、戦時中に於いて、比較的鞏固な基礎を築

き上げてゐたため、これを維持し得たが、創設後その日の尙ほ浅い新設工場は、著しく動搖し、或るものはその基礎をすら脅かされつゝ、全般的に漸く整理時期に入つた。従つてこの時期に於ける民族工業中の最優勢なものは、依然棉紡織工業たるを失はなかつた。當時の棉紡織工業は、民國四年の工場數二十二、その紡機鍾數五四四、〇〇一鍾、織機二、二五〇臺であつたのが、民國九年の歐洲戦争終熄後の第一年には、その工場數二十九工場、紡機鍾數六五九、七五二鍾、織機二、六五〇臺となり、民國十四年には全國に於ける工場數六十九工場、その紡機鍾數一、八八一、八二二鍾、織機一六、三八一臺と、紡機鍾數が民國四年に較べて三倍以上に激増し、織機は七倍の増加を示してゐた。そして棉紡織工業以外にも亦、製粉、鐵工、電氣、製紙、燐寸、煙草等の各工業も亦、尙ほその現狀を維持してゐた」(龔仲阜氏著「中國近代工業發展概論」第二章「工業革命中の分期」を抄譯)。

(二) 停滯期を経て恐慌期に於ける概観

支那に於ける民族工業發展の過程は、前項に摘録したるが如く、歐洲戦争後の低徊期から、整理淘汰期を経て、さらに停滯期に入り、次いで恐慌期に直面しながら、遂に全面的破産への危機にすら瀕するに至つたのであるが、斯くの如き民族工業の停滯、恐慌の深化に伴ふ破産状態は、如何にしてこれを惹起するに至つたのであるかは第三節及び第四節に於いて「近代工業を圍む主要條件」並びに「民族工業發展の停滯落伍性」等を解剖する際に、これに言及することとし、こゝでは専ら、近年に於ける凋落状態を概観すべく、左に「民國二十四年度金城銀行營業報告」中から「中國經濟現状の分析」と題する一項を引用することとした。

「支那の新式工業は、半世紀以前に肇まつたが、當時創設されたものは、殆ど軍需工業であつた。日清戦争後、はじめて近代主要交通手段——鐵道と汽船——の出現と共に、鑛業及び各種の新式工業も亦、漸次發達し、とくに歐洲戦争當時、外貨の輸入減少は、本國工業の發展を刺戟しつゝ、以て新式工業の企業化は、遂に空前未曾有の盛況を示した。然るに戦後各國に於ける生産の復興により、支那の工業も亦凋落しながら、近年來國內農村の疲弊に伴ふ、一般購買力の低下、及び外貨のダンピングの猛烈なるがため、極度の不振に轉ぜざるを得なくなつた。支那に於ける近代棉紡工業は、四十餘年の發展の歴史をもつてゐるが、本國紡績工場の分布地域が、多く沿海一帯に集中し、九十二工場のうち、沿海地域たる江蘇、浙江、山東、河北の四省に於けるもの六十九工場に達し、上海のみでも三十一工場を占めてゐる。その他は湖北、山西の二省に六工場、河南省に四工場と、斯くの如くにして紡機鍾數の分布状態は、さらにその地域分布に對し、頗る不均衡たるを失はない。織布工業の發達も亦、相當に久しく、全國に於ける織機臺數は、二萬九千五百七十九臺に上つてゐるが、各工場の資本が極めて薄く、平均一工場につき二萬元に過ぎず、その生産量も亦一五、二五四、一五三疋と、支那の人口の巨大なのに比較して、甚だしく過少たるを免れないのである。従つて毎年布疋類の大宗輸入が行はれてをり、その工場の地域分布に至つても亦、棉紡工業と同じく、上海のみで二百十三工場、浙江、江蘇の二省の合計が、その五分の三以上を占め、その他は長江各省の十三工場、黄河區域の十二工場に過ぎない。而かもそれらの規模はすべて狭小である。機製麵粉（麥粉）工業は、支那に於ける新興工業の一つであり、製粉工場五十六工場、その資本總額二四、五五二、〇

〇〇元、平均年産額六四、九六三、〇〇〇袋に達してゐるが、これまた全國の麥粉消費量の四分の一に足らず、その不足量は、土製の麵粉と、輸入洋粉とによつて補給されつつある。さらに製粉工場の全國的分布状態も亦、沿海諸省に偏在し、河北、山東、江蘇の三省に於ける工場數が四十五工場と、その資本は總額の四分の三を占め、生産量に於いては總額の百分の八十七以上を算してゐる。化學工業中の酸、鹼（アルカリ）工業は、國防上頗る重要であり、支那に於ける製酸工業は現在その製造工場數六工場に達し、上海にあるもの三工場、天津にあるもの二工場及び廣西の一工場がその全部で、うち英國商人の經營に係るもの一工場を除くほか、他はすべて支那人の手で經營せられてをり、これらの五工場の生産量は、鹽酸年五九、七五〇擔、硫酸一一〇、二一〇擔に上つてゐると雖も、硝酸の生産を缺くことと、國內に於ける酸類の消費が日々増加しつつある關係上、毎年大量の輸入を見てゐる。斯くの如くにして民國二十三年の鹽酸輸入數量は二〇、三九八公擔、硝酸の輸入數量は二九、六一五公擔、硫酸の輸入數量も亦、一三、一七二公擔と、依然國産品の生産量は著しき供給不足を告げてゐるのである。製鹼工業は、現在その製造工場五工場を擁し（上海に一工場、塘沽に一工場、漢口に一工場のほか四川に二工場がある）、その年産量七五七、一〇〇擔に上り、その中「永利工場」は六三三、〇〇〇擔の生産量をもち、その他天然鹼の生産量が一個平均年六一〇、〇〇〇擔に達してゐる。然しながらこの部門に於いても亦、依然生産不足を來たし、海外からの供給を仰ぐ量が決して鮮少ではない。洋灰工業に至つては全國に六工場を有し、その投下資本二〇、〇〇〇、〇〇〇元、その一個年の生産量が約七百四十萬擔に達してゐるとは謂へ、これまた毎年海外から三百

七十萬擔の供給を受けつつあり、依然自給することの不可能におかれてゐる。燐寸工業は、年來その發展が頗る顯著を加へつつあつたのと、同時に外貨のダンピングにより、その生産状態に於いて、却つて過剰を來たし、皮革工業は、その生産品の價格の低廉さに於いて、國産皮革が、一般的に用ひられ、その他機器品製紙工業は、全國に四十餘の工場があり、その資本總額五、五〇〇、〇〇〇元、製産總額一千萬元に近いが、尙ほ土法による製紙業は全國に紙槽五萬六千戸を算し、その生産價額が、最近既に減じたと雖も、一七、〇〇〇、〇〇〇元に達し、これらの双方の生産額を合計するとき、二七、〇〇〇、〇〇〇元に上つてゐる。然るに毎年支那の消費額は六六、〇〇〇、〇〇〇元以上であるため、洋紙の輸入が一個年四〇、〇〇〇、〇〇〇元内外に達しつつある。さらに支那の機器製造工業に至つては、その資本の缺乏と、工場規模の狭小とにより、外國工場と對比すべくもなく、全國に於いて、その資本額十萬元以上のもの十二工場、一萬元以上のもの八十工場、三千元以上のもの百四十四工場を算するのみ。その資本總額四、二九六、〇〇〇元と、一個年の生産價額一〇、一五二、〇〇〇元に過ぎない。而して資本金十萬元以上のものは、多く江蘇、浙江の兩省に集中し、一萬元以上のものも亦、上海に集つてゐる」(金城銀行民國二十四年營業報告「五」中國經濟の分析「③」工業を抄譯)。

第三節 近代工業化を圍む主要條件

支那に於ける近代工業化への發展は、前節に叙述したるが如き経緯に基いて、そこに展開されるに至つたのであ

る。そも／＼資本主義の確立と、その正常的な發展の過程は次のやうに――

「工場制度の確立と共に、その發展に伴ふ資本家的生産の驚くべき増加――産業資本の蓄積は、商業資本をもこれに隷屬せしめ、益々生産の高度化を促すに至り、それによりて引き出される利潤低下の傾向を防がんとして、企業の結合、資本集中、獨占及び企業家聯盟等の諸段階を経過せしめた」。

一つの定律的のコースを歩んだことは謂ふまでもない。然るに支那の近代工業化――工業資本主義化は、以上に見るやうな正常的な諸段階をば、過程することがなかつたのである。

ここに支那の近代工業化――工業資本主義發展の特異性があり、これを半植民地に於ける近代工業化の特異性であると斷定してすれば、それまでであるが、斯くの如き特異性は、支那に於ける民族工業の資本主義的發展が、多くの障礙に直面せざるを得なかつた點を基礎として醸成されたものであるが、これを具體的に謂ふと次の如く、

- (一) 無制限な搾取に身を委せる非常に低廉な労働力の過剰は、技術的の改良を無用ならしめ、極めて原始的な労働の種類、例へば苦力による大量財の運搬等を残存せしめる(ヴァルガ)。
- (二) 工業的企業が外國資本によつて、支那自體のうちに設立されたとは謂へ、今日までこの資本輸出國の工業の利害の方が決定的であつた。
- (三) 支那民族資本家自身の所有する生産資本が、極めて貧弱であつた。
- (四) 生産手段の落伍と、大規模經營を必要とする重工業の發達が乏しく、到底工業生産品を輸出する程度に

は到らなかつた。

(五) 企業經營の能力に缺くことが甚だしかつた。

等々の諸項を列擧することが出来る。従つて、支那の近代工業化の意義も亦、その發展過程に於いて、國際資本主義の繼續的作用を受けつつある一般的條件を、度外視しては、これを評價することが出来ないものであり、ここに支那の近代工業化を圍む主要條件が横はつてゐるのであつた。

この間の経緯に對しては、第一編總説中「民族資本を圍む主要條件」の項に於いて、相當詳細にこれを解説したため、本節では幾分重複する點なしとしないが、左に徐雪寒氏の「植民地化過程中の中國工業」と題する論文のなかから、「支那の民族工業」或は「近代工業化の特質」について分析した一節を摘録することとした。

「一八〇四年以後——とくに一九〇〇年以來、野蠻にして且つ落伍せる支那には、沿海と草原の上に汽船と汽車とが出現し、採鑛機と採掘機とが、その運輸をはじめ、雲をつく煙突が立てられた。歐洲大戰の期間及び戦後の恐慌時代に於いて、支那の買辦、官僚、商人、地主は、さらに彼等の囊中を傾けて、その原始蓄積を運用しつつ、工業投資による利潤の蕃殖を増進した。然しながら彼等は斯かる稀有の黄金時代に直面して益々その大をなすに至つたとは謂へ、この絶好の機會を以て民族資本の根基の積極的確立に利用しようとする意志をもたなかつた。世界經濟大恐慌の爆發後、一九二八年から一九三一年の間、金高銀安の結果により、支那に於いては物價の暴騰を示現しながら、そこに假態的の繁榮を形造つた。列強の財閥は、暴落した銀を資本として、支那に輸出し、工

場を建立した。内地幾千百萬方里の水災旱害、は幾千百萬の農民を飢饉に瀕せしめたに拘らず、通商口岸の都市は極度の繁榮を招來するに至つた。斯くの如き現象を以て、あるものは支那が既に工業化し、既に輕工業化したと稱し、或るものは支那には工業企業家が決して少くないと指摘し、あるものに至つては、支那では毎年一人當りの石炭、鐵、電力、紡織品の消費量が、英、米、日、獨、佛等の諸國のそれに較べて、既に遜色がなくなつたとさへ、極言してゐるのである。經濟専門家の提示した權威ある文献も亦「支那工業化の程度は、輕工業より漸次重工業に及ばんとしてゐる」とすら主張してゐた(南開大學教授何廉博士の説)。但しここに支那の工業化が、まさに一つの民族的統一的の範疇に於いてなされたと觀察し得る勇氣をもつものがあるであらうか。さらに問題なのは、支那の工業化は何によつて強制促進された結果であらうか。且つまたそれが如何なる決定的目標に向つて前進しつゝあるかと謂ふ點である。この場合事實は最も雄辯であり、彼は我等に次の如く告げてゐる——即ち支那の工業は、とくに一切の工業の基礎をなすところの重工業の存在と、その開發とに於いて、決して、それが支那工業化の指標を代表するに足りないことを——のみでなくこのことによつてまた、支那經濟發展の半植民地性、換言せば帝國主義の支那侵略が、如何なる深度にまで達してゐたかを測定出来ると謂ふこと——を。(一)支那の工業乃至所謂工業化は、主として帝國主義の資本輸出によつて引き起されたものであり、これによつて帝國主義は、その支那に對する統治的支配及び經濟基礎の搾取を完成するに至つた。支那の鐵工業は、その埋藏量の三分の二が、既に日本の支配に移り、鐵鑛採掘權の八二%までは、その手に掌握されてゐる。即ち毎年新式方法

によつて生産されるところの百萬噸の鐵鑛石は、その九〇%以上は、日本の資本との關聯をもつてをり、四十萬噸の生鐵中、日本の資本と關係ある製鐵工場は、百分の九十五以上に達してゐる。炭礦業に於いては、毎年二千六百噸乃至二千八百噸の生産量のなかで、英國資本が二五%を占め、日本の資本が四〇%を占めつゝある（尤も滿洲の獨立後日英間に於けるこの種の比率に名義上自然變化を來したことは謂ふまでもない）。新興動力工業——電力工業——中、外資によるものは、一個年の生産量六〇%以上を算し、支那に於ける最大の發電組織——上海電力公司——は、米國資本の獨占の下にあり、斯くの如くにして、外資のこの種の工業部門の中に於ける雄姿は、支那工業化の最も主要なる本質を證明するものである。尙ほ且つ輕工業に於いて——例へば棉紡織業の如く——英・日資本が、全國の紡機總數の四二%を占め、織機臺數が五一%一五、撚糸機總數六七%五（何れも一九三四年末現在）を、それ／＼占めてゐるのである。而かも紙捲煙草工業の如き、英・米資本と民族資本との比較に於いて二十對一の比率を示してゐるのみでなく、燐寸、洋灰の方面にありても亦、日・英の資本が同様率として抜くべからざる勢力をもつてゐる。斯うして支那の工業化は、世界資本の體系中に於いて、最も明確にその半植民地化への過程を代表しつゝあると謂はざるを得ない。（二）支那の工業化は、その發展の過程中に於いて、外國資本の速度が民族工業資本に比し、遙かにこれを超越してゐる。これがために支那の工業化の發展過程に於いては、外國資本の統制力が蓄積しつゝ強化増大したことをも亦これを看過出來ぬのである。支那に於ける産炭總量中、外資の占める比率は、一九一八年の四七%六から、一九二八年には五六%二に増加し、そのうち日本の資

本と民族資本との比率が、一九一八年には、二〇%に過ぎなかつたと雖も、一九二八年には三三%に進み、一九三二年には、さらに四〇%に激増した。かやうにして、外國資本の占有するところの百分比の増加は、その半面に於いて、當然民族資本の低下を表現するものであり、この關係は、輕工業の方面に於いて、一層その趨勢を顯著ならしめつゝある。一九一六年から一九二四年の間の、黄金時代に於ける、棉紡織工業の民族資本に屬する紡機總數の増加率が、四倍であつたに對し、日本資本に屬するそれは七倍に増加し、一九二四年から一九三四年の十年間に於ける間の民族資本に屬する紡機總數の増加が、全體の三分の一であつたに比し、日本資本に屬するその増加率は三分の二に上つてゐた。さらに同期間中の織機臺數は、民族資本に屬するものが、二分の一の増加であつたのに比較して、日本資本に屬するそれは二倍以上の増加率を示した。而かも外國資本の斯うした發展は單に金融獨占資本の巨大なる勢力に隨伴してゐた證左であるのみでなく、尙ほ且つ列強の支那に於ける政治的勢力をも透過しつゝ、國內の半封建的政治機構との關聯にまで到達する目的をも果たすに至つたのである。例へばさきに自主回收されてゐた井陘礦務局が、一九二二年再び獨逸との合辦を強要され、一九三一年南京政府がある種の關係によつて、河南の中原公司と、福公司との合辦を命令したと雖も、のちこれを英國資本の統制に歸せしめ、濼州礦務局が、既にその締結せる條約の有効期間を経過してゐるにも拘らず、未だ回收するに至らない、等々の幾多の事實が、この間の經緯を語る實例であつた。現在支那に於ける外國資本の強化は、結果に於いて農村中の手工業を掃蕩してしまひ、國內市場をも開拓し盡くしながら、同時に列強の統制下に於ける獨占的輸

出をすら造成してゐるのである。このことは即ち支那の工業化の發展過程中、とくに注意せざるべからざる第二の現象であつた。(二)次いで支那の民族資本は、曾て重工業の覇權を取得し、それによつて整個なる工業の基礎を確立すると謂ふ任務をなし遂げ得なかつた。さうしたことは、當然、支那の工業化の發展過程中に於いて、民族資本をして、却つて外國資本への附庸的役割を受持たしめるべく結果づけたのであつた。斯くの如くにして自然支那の民族工業は輕工業に於いて、僅かに外國資本から残された範圍をのみ守る地位に甘んじねばならなかつたのである。とくに一面に於いて、國外市場の缺如すること、現行關稅制度の下に於いては、列強商品が、自由でダンピングを以てし得たこと、別の一面に於いて、廣大にして雄厚なる外資工場との競争により、統一的に完整した國內市場をさへ持ち得なかつた上、加ふるに半封建性的捐稅の負擔に基因した等々、一層民族工業をして、解脫への前途を探索することを可能ならしめたのであつた。而かもこの種の不幸なる命運は、必然的に帝國主義に隨着しながら、そこに益々自身の没落を早めつゝある所以を看過出來ない。列強の支那分割運動は、既に實踐に着手し、現在恐慌の狂風暴雨は、まさに全世界にたちこめてをり、列強諸國はその恐慌の禍患を植民地または半植民地に轉嫁せしむべく奔命し、支那の民族資本は彌よ衰微に轉じて行つた。こゝに列強資本の優越的地位の下に於ける支那の工業化の命運を顯出してゐる」(「中國經濟論文集」第二集「植民地過程中的中國工業」一「中國の工業化」を抄譯)。

第四節 民族工業發展の停滯性

前節に略述したところの支那に於ける工業化への發展過程に於ける一般的主要條件は、民族工業の發展の停滯性のなかに於いて、最も強烈に作用しつゝある。而して民族工業の發展の停滯性は、近年の恐慌深化の渦中に於いて、一層その本質的作用を發揮しながら、民族産業資本の根柢を脅かすこと著しく、各工業部門をして破産への危機にすら瀕せしめるに至つたことはさきに解剖した通りであるが、斯くの如き發展の停滯性は、何によつて醸されるに至つたのであるか。本節では専ら、この點を究明せんがため、左に「中國經濟現勢講話」のなかから「中國民族工業發展の癥結」と題した項目を摘録することとした。

「支那工業の近代化、換言せば支那の工業化は、手工業生産から轉じて機械生産の過程に入らしめたが、それは歐米列強とその行き方を異にしてゐたことは謂ふまでもない。斯くの如くにして支那の工業化は、外力の壓迫と、外資の侵入との客觀情勢の下に於いて、その發展の過程が、單に外資に附着しながら、異常な艱澁な進行を續けたのであつた。歐洲戰爭中に於ける、支那の民族工業の勃興は、歐米帝國主義が戰爭に忙殺されて、支那に對する經濟侵略を一時放棄しなければならなかつた結果であり、これに反して大戰の終熄後、帝國主義の再度の積極的對支經濟侵略の渦中に於いては、さらに世界經濟の一般的危機の深化と共に、益々その侵略を強化せしめるに至つた等、自然支那の民族工業は、彌よそれに壓迫せられつゝ、終ひに氣息奄々たらざるを得なかつた。同時に

別の一面に於いては支那の封建勢力が、完全に消滅せず、民族工業に對する障蔽的作用が緩和されなかつたのと、支那の農民大衆が、農村副業の崩壊と、農村經濟の加速度的な破産とにより、工業製品に對する購買力の減退と共に、支那の民族工業の危機が、さらに日増しに深化するに至つた。斯うした環境の下に於いて、我等は再び支那の民族工業の發展上に於ける主要な癥結について、詳細にこれを探究せんとするものである。

(一) 以上に對して先づ第一に擧げなければならぬのは、外貨のダンピングが、異常に猛烈に行はれたこと、その影響とについてである(中略)。而して外貨のダンピングが如何にして行はれるに至つたかは、支那の關稅制度と、輸入稅率の關係に基因してをり、支那がその輸入稅率を完全に自ら決定し、または隨意にこれを増減することを得ない點にかゝはるところ絶大であつた所以を指摘し得る(中略)。とくに一九三四年七月一日に施行した新稅制の如きは、この種のダンピング貨物に對する輸入稅率をして、却つて輕減せしめるの結果をすら齎した。外貨が支那市場に於いて、ダンピングを強化し得る原因は自らこゝにあつた。さらに帝國主義列強の、ダンピング政策の勵行が、支那に於ける外貨の輸入の上に、著しい作用と影響とを及ぼした。それは高度に發達した資本主義的生産技術が、この商品の原價をして著しく低下せしめ、當然その對外輸出の能力を、彌が上にも昂揚させたからであるのみならず、あらゆる政策——とりわけ最も重要なのは、通貨の膨脹と、爲替管理政策の施行及びその運用とにあつた——は、その輸出商品のダンピング的能力を、多々益々増大させねば熄まなかつた等、そこにも亦、帝國主義商品の支那市場に對するダンピング強化の重要な原因があつたからである。兎まれ外貨の支那

に對するダンピングの結果は、一面商品の價格を低下せしめ、一面所謂國貨の國內に於ける既得市場の一部分或は大部分を奪取したのである。これがために支那の民族工業は、その發展を阻止され、愈々衰退に陥らざるを得なくなつたのであり、以上は、支那の民族工業の發展上に於ける癥結の一つであつた。

(二) 第二には、外資の支那に於ける企業勢力の膨脹を擧げなければならぬ(中略)。外國資本の支那に於ける企業勢力の膨脹が、支那の民族工業の發展に打撃を與へた點は、外貨のダンピングに較べて、さらにより峻烈であつた。それは外貨のダンピングに對しては、相當の程度まで、當局の手によつて、相對的、部分的に、これを阻止し得るからであつた——即ち輸入稅率を提高し、或はダンピング税の徵收、等の方法を運用することにより——のみでなく、外國貨幣の支那貨幣に對する低落は、また或る種の爲替平衡の方法を運用しながら、これに對應することが出来るに反し、外國資本の支那に於ける企業の擴張に對しては、それを阻止すべき何等の方法がなかつたのと、一面外國資本は、不平等條約を根據として、民族工業と同様の、完全な權利を享有し得たからである。例へば廉價な工賃と、低廉な原料とに恵まれる點に於いて、外國資本による企業は、民族工業と何んの差異もなかつた。とくに在支外資企業は、雄厚な資本と、高度的技術と、精密なる經營方法とをもつたため、その生産品の原價が、支那國産品に比較して、著しく低廉たるを失はなかつた。このことは棉紡織工業について謂ふとき——在支日本紡織工場と華商紡織工場とを比較するとき——一目瞭然たるものがある。即ち在支日本紡織工場は、機械の精良と、經營方法の完備せるがため、同一綿糸の產出量に對し、前者の消費原棉が、後者に較

べて、甚だ少なく、同一紡機機數、或は同一織臺數に對する、前者の使用工人が、後者に比して頗る寡少であり、同一期間内に於ける前者の産出製品が、後者に比較して夥多である等、一々列擧することの繁に堪へない程である。外資の支那に於ける企業擴張の容易に行はれ得るのは、このためであり、民族工業のこの方面に於いて受けつゝある打撃は、とくに痛烈なるものであつた。

(三) 第三には税捐の負擔の加重を擧げなければならない。外貨のダンピングと、在支外國工場の勢力の擴張は、民族工業が受けたところの國外帝國主義の打撃であつたが、捐税の負擔の加重は、國內封建勢力が給與したところの、民族工業に對する牽制であつた。單に統税について謂ふも、去年燐寸統税税率は、一倍以上に増加し、最近財政部は棉花統税二割の増高を決定した等、その顯著な例證である。この點について特に注意すべき部分有二つある。その第一は所謂統税税率が、在支外資工場に對しても亦、不平等條約の關係により、完全に民族工業の各工場と一様であることに存し、これを民族工業の保護或は獎勵の立場から觀るとき、民族工業にとつては、著しき不利たらざるを得ないのであつた。その第二は統税の徵收に對して採つたところの等級税制度の齎らす作用である。この制度は表面上頗る公平たるを失はなかつたと雖も、その實無形のうちに、在支外資工場に有利にして、華商工場に對しては少なからぬ不利益を與へたからである。それは在支外資工場の生産にかゝる商品が、高級品であるに對し、華商工場のそれは、下級品または中級である點に胚胎してゐた。例へば綿糸統税についてこれを謂ふとき、二級税制——二十三番手以内は一梱につき二元を徵收し、二十三番手以上は、一梱について三

元を徵收する制度——は、在支日本紡織工場の製品が、すべて細番手を主として、四十二番手以上が多く、華商紡織工場の製品が、二十三番手内外の太番手が多いため、太番手と、細番手との比較が、その價格の上に於いて、平均三倍以上の差があるに拘らずその税額の差は一元内外でしかなく、このことは、綿糸統税は實際上日本資本の企業に有利で、華商の企業に不利な結果を與へてゐることとなる等、その實例である。その他捲煙統税に於いても亦、斯くの如き事情とほど似た點があり、況んや國産商品は、統税の徵收に於いて、斯かる差異による不利益を受けつゝあるほか、各地に於いて徵收せられる苛捐雜税が、依然頗る多く、殆ど枝擧に暇がない状態たるに於いてをやである。

(四) 第四には國內市場の割據性——國內市場の統一不能——を擧げなければならない。このことに關しては、これを二つの方面から觀察する必要がある。その一つは交通事業に於ける民族資本の不發展——とくに内河、沿岸航業が殆んど英・日の兩國の操縦下におかれてゐる——が、民族工業に及ぼすところの影響と、その一つは各省に於ける地方政府が、各々の稅收關係により、各種商品の國內市場に於ける流通を阻礙しつゝある點とであり、とくに後者に至つては、從來の釐金は撤廢されたと雖も、その後種々の雜税が、種々の名目によつて施行されてゐる（廣東省政府が最近土産の保護に藉口して、省外の移入商品に對する保護税を徵收するに至つた等その一例である）。斯くの如き諸事象は、疑ふべくもなく、國內市場分割の性質を具有してゐるのであつて、斯うした市場分割性の表現は、民族工業の生産品に對し、その國內市場を愈々縮小せしめねばならなかつたことは謂ふまでも

ない。

(五) 第五には国内外市場の萎縮を擧げなければならない。世界經濟恐慌が発生して以來、今日に至るまで最早五年の歲月を經過したのであるが、斯くの如き持久的に繼續せる世界恐慌は、生産の社會性と、分配の私有性との間に於ける矛盾によつて造成されたところの、生産過剰が、既にどのやうな程度までの高度な段階に達してゐたかと謂ふことを表現してゐるものであつた。その結果は一面に於いて商品價格の暴落を促し、一面に於いては、勞農大衆乃至小資産階級の生活の悪化による世界市場の特殊の萎縮現象を形成せしめた。斯うした客觀情勢の下に於いては、只輸出にのみ依頼してゐたところの支那の若干の民族工業部門は、例外なく少なからぬ影響を受けねばならなかつた。同時に列強の世界市場に對する爭覇戰の激化が空前の程度にまで立ち至つた際、彼等の所有せる最高度にもで發展した資本主義的生産技術に對して落伍せる、大半手工業生産たるを免れない、支那の民族工業の生産品は、自ら帝國主義商品と競争するの可能さへもなかつた。例へば日本生絲の世界市場の獨占は、支那生絲の米國に於ける既得市場を、完全に奪つて了つた等、その一例であつた。かやうにして海外市場の萎縮は、帝國主義商品の競争に従つて、支那の民族工業に脅威を與ふること夥しく、一方國內市場も亦、輸入外貨と、在支外國資本工場を生産品を以てせるダンピングとにより、その一部分、或はその大部分を奪はれるに至つた上、農村の加速度的破産が、支那農民の極度の貧困と、大量の失業者の續出とを原因として、さなきだに縮小を餘儀なくされた」(「中國經濟現勢講話」第四講「工業」)「中國民族工業發展の癡結」を抄譯)。

第五節 現段階の工業資本と産業部門の分散

支那に於ける民族商業資本が、頗る畸形的な發展を過程した半面に於いて、民族工業が、その發展を停滯しつゝ、著しく落伍するに至つたため、そこには當然正常的な資本の集積及び集中の行はれなかつたことは、さきに解説した通りである。

そしてその間正常的な、資本の集積乃至集中が行はれなかつたために、依然商業資本をして、その畸形的な發展を繼續せしめたのみでなく、商業資本が遂ひに銀行資本のなかに融合し、以て銀行資本の驚くべき膨脹をすら示現させるに至つたと雖も、以上の経緯の下に於ける民族資本の發展の必然的結果としては、銀行資本が産業資本のなかに入り込む作用が、少しも働き出さなかつたのである。このことを逆に謂ひ換へると、支那の民族資本は、商業資本と、銀行資本とのみが畸形的に發展して、工業を中心とする産業資本の發展が、少しもこれに伴はなかつたのであつた。

同時に斯うした點は、前述の民族工業のもつ基本的な發展の停滯性に基く、必至的結果であることは謂ふまでもないが、一般通俗的には次の如く、

(一) 支那人には機械工業を中心とする新式企業に對しての經營上の才能を缺いてゐた。同時に商業上に於ける經營の才が發達してゐた。

(二) 一般商業活動上に於ける封建性の諸缺陷が、當然期せずして民族工業に於ける諸企業に對して、その利潤を擧げしめなかつた。

(三) 株式會社による企業形態が、少しも發達するに至らなかつた。
等々の諸事由によるものと解釋されてゐたのである。

X X

「株式會社は、先づ第一に資本の多量を株式によつて調達することを得た。このことは、生産の規模、企業の内容及び形態を擴大することを可能ならしめた。また第二に株式會社は、その資金の調達に於いて、個人企業よりも有利に銀行の信用を利用し得る。このことは資本を増大することによつて、より大なる利潤をつくり得る。その他價格の競争に於いては、個人企業よりも有利であり、また所謂企業者利得の發生を可能ならしめる。これらの株式會社の組織、運用より生ずる利益は、多くの企業をして株式會社化せしめる。而してこの株式會社の發展は、益々大企業の成立、發展を可能ならしめるのである」(石濱知行氏著「資本主義の成立とそれ以後に於ける經濟の發展」から、改造社版、經濟學全集、第三十二卷)。

然るにあらゆる基本的、または附帶的原因によつて、株式會社組織による企業形態——即ち以上の如き先進資本主義國に於ける企業の發展過程——の發展を不可能ならしめたところの支那にとつては、當然産業資本の流通形態が、著しく制限されざるを得なかつたのである。

勢ひ、そこには各産業部門に於ける資本の増員が、毫も發展しなかつたのは謂ふまでもなく、而かも新式工業化の發展過程に於いて、生産手段の著しい貧弱さが、常に隨伴しながら、生産手段に於ける夥しい落伍と、經營上の技能の劣悪とに基く利潤の貧弱とは、多々益々工業を中心とする産業への資本の投入を回避せしめたのであつた。斯くの如くにして、支那の民族工業を中心とする各産業部門に涉り、その發展の段階たる企業結合、資本集中の如き、到底これを示現するの前提条件をすらもつてゐなかつた。従つて次に摘録するが如く——

「利潤の追求を目的とする資本家は、利潤率下向の傾向を防がんとして、自由競争を緩和し、またはこれを廢除して價格、従つて利潤を高めんとする。こゝに獨占なる形態が生ずる。乃ち企業の結合を生ぜしめる。乃ち異種または同種の企業が結合することによつて、獨占を形成し、以て生産物の價格を高からしめ、従つて利潤を上昇せしめんとするのである。企業の結合は、乃ち資本の方面より謂へば、資本の結合であり、資本の集中である」(石濱知行氏著「資本主義の成立とそれ以後に於ける經濟の發展」から)。

と謂つたやうな、先進資本主義國の産業資本の發展への段階には、絶對的に到達し得なかつたのである。即ち各企業の個々の競争が續けられたのであつた。とくに斯うした場合に於ける民族工業資本のもつ大きな缺陷は、以上の理由に基いて表示されつゝあるところの、各産業部門の分散状態にあつた。

と共に、一方民族工業資本にとつての對立的競争相手たる、國際商品と、在支外國資本企業との壓迫を受くるところ非常に痛烈なものがあつた。自然世界恐慌につれて深化するに至つたところの經濟恐慌に直面するや、一たまり

もなく、その根柢から動搖せざるを得なかつたのである。

以上の経緯に従ひ、支那に於ける民族工業資本は、新式工業化の發展の停滞性を基調として、前節に略述したるが如き過程の下に、著しき落伍状態に沈淪せざるを得なかつたのであり、その間に於ける民族企業の個々の對立と、産業部門の分散状態——工業を中心とする民族産業資本の孤立状態——とは、さらに必然的に工業資本の發展を阻止したのみでなく、實際的には、ところ／＼に於いて、商業資本にすら隸屬するの奇現象をさへ現出せしめた。而して商業資本が、その畸形的發展の窮極に於いて、銀行資本のなかに融合したのに反し、民族工業資本は、銀行資本の支配下に、辛うじてその餘命をつないでゐるに過ぎない一般的情勢を示現してゐる。

第二章 銀行資本の集積と膨脹

第一節 緒論

「商業資本とは反對に、株式會社及び銀行の發達につれて、著大な發達を遂げたのは、貸附資本、または貨幣資本である。」「銀行資本は、銀行によつて處理される貨幣資本であり、銀行自身の資本と、銀行預金とから成る。産業及び商業資本に對する貨幣資本の優越は、銀行資本の形態に於いて達せられる。だが銀行資本の發展は、信用の發展を豫提する。」「銀行は一面に於いて、商業及び商業資本家の出納係となり、その支拂取引の媒介者として作用する。かくして無数の支拂事務を集中的に處理し、あらゆる地點のあらゆる企業家間の決済を可能ならしめ、簡單ならしめることによつて、支拂取引關係の範圍を擴大する。そこに銀行の一機能がある。次ぎには銀行は資本信用の媒介者として、休息態資本をば、作用態資本へと轉化する。その吸収と、集中と、配布とによつて銀行は、休息態資本の全額をば、社會の全資本循環の續行のための必要最低限まで縮少する。銀行はさらに第三の機能として、ひとり産業及び商業資本家の休息態資本のみならず、他のあらゆる階級の私有に屬するところの貨幣で、貸附資本態に變じ得るものを蒐集し、生産的資本家階級の使用に附するものである。かくて銀行家によつて管理され、銀行によつて貸附られ得る資本の中には、尙ほ金貸資本家の預金があり、地代所得を代表すると

この地主の預金がある。また銀行が、預金に對して利子を支拂ふやうになるや否や、零細な金額からなる他のあらゆる階級の貯へが、銀行に預け入れられる。かくして銀行は全社會の貨幣資本を集中する。個人の手にある時には、餘りに小額に過ぎて殖價作用に適しないところの貨幣もかくて銀行に集中されるれば、強大な貸附資本を形づくり、銀行はその力を以て、借手——生産的資本家——に臨むことが出来る。零細な資金を吸収するために、銀行は比較的高率な利子を支拂ふことを厭はない（猪俣津南雄氏著「金融資本と帝國主義」から）。

以上は銀行の機能及び銀行資本集積の過程を解説した理論の一部であり、先進資本主義國に於いては、常に斯うした過程の下に、銀行資本が集積され、次いでその發展が、金融資本を形成するまでに達したのである。

支那に於ける銀行資本も亦、大體右のやうな集積の過程を辿り、銀行資本の機能としても亦、先進資本主義國のそれに比較して、ほど大差がないと雖も、たゞ「休息態資本が、生産的資本家階級の使用に任せ得なかつた」、點と、「銀行が強大な貸附資本を形づくり、その力を以て生産的資本家に臨む」ことが出来ないこと程左様に生産資本家の組織が、微弱である點に於いて、先進資本主義國の銀行資本集積・集中との對比上に於ける本質的の差異を、そこに提示せしめつゝある所以を看過出来ない。

斯くの如くにして、斯うした差異を基調とした發展が、銀行資本をして、一種の特異的な段階への成長を過程せしめたのであり、自然民族産業資本家對銀行資本との間も亦、著しく非定期的な關係の下に繋られるに至つたのである。換言せば、支那に於ける民族産業資本家對銀行資本との關係は「銀行が産業資本家への使用に任ずる貨幣資

本は、一部は流動資本に、一部は固定資本に轉化され、そのいづれに轉化されるかに依つて、貸附資本の回收が異なり、回收方法の相違は、貸主たる銀行と、借主たる産業企業家との關係の深淺、疎密を決定する」と謂ふ定期的作用を無視しつゝ、最も淺く、且つ最も疎であり、同時に株式會社企業の成立の極めて少ない支那に於いては、——

「株式會社企業の成立は、資本家の機能、剩餘價値の分配原理、所有及び企業の集中過程、産業企業家對銀行の關係に於ける重大な變化を引き起す」——べき、資本の集中過程にも従はず、資本家の機能、剩餘價値の分配原理、所有及び企業の集中過程、産業企業家對銀行等の諸關係に於いて、何等の變化をも引き起さないものであつた。

勢ひ支那に於いては、落伍せる民族産業資本が、依然孤立の状態にあり、産業資本が銀行に結合しないで、寧ろ商業資本に隷屬しつゝあるのは、その基本的な原因は、當然斯うしたところにこれを求めねばならない。

そこで支那の銀行資本のもつ特質は、後述するが如く（及び前各章に於いても部分的には處々でこのことに觸れておいたが）、國際金融資本に附庸する買辦資本となつて了つた以外に、以上述べた諸點をも、これを考慮のうちに入れる必要が生じて來る譯である。

然らば支那に於いて民族資本機構を構成する銀行資本は、如何にして形成されるに至つたか。——以下「中國産業革命概観」から——

銀行資本の形成

「支那に於いて、現在純粹の意味に於ける國民經濟が、既に成立してゐたか否かと謂ふことには、少なからぬ疑點

がある。少くとも資本集中の過程の中に於いては、未だ全く地方経済の領域を離脱してゐないと稱すべきであつた。錢舖、錢莊等は、漸次その組織を擴大しつゝ、新式銀行化するに至つたと雖も、その資金の流通は依然地方の市場以外に出でなかつた。例へば従來中央銀行としての「中國銀行」、「交通銀行」等が存在してゐたのであつたが、それらすら、各地の支店は原則上、該地方をその營業範圍となし、その發行するところの紙幣も亦、たゞ該地方にのみ通用しながら、甲地で發行する紙幣は、乙地に於いて無條件で兌換することさへ不可能であつた。それがために國內に分散せる資本は、集中する作用と機会とを缺き、工業の需要するところの大企業の方面に對する放資を不能ならしめた。自然産業に向つての放資は、たゞ小規模の地方的商業投資に利用され得たのみであり、甚だしきに至つては、その或るものは、地方の官僚資本を吸収して投機事業を営み、政府の發行にかゝる公債の賣買をのみ行つた等、資本流通の範圍は、すべて商業の性質を帯びてゐるに外ならなかつた。勢ひ常に地方的財閥或は軍閥と結託し、時にはこれらに内債を募集せしめて、その所得の資金は單に政治的投機、または政治的活動にこれを流用したのである。斯くの如くにして生産方面に對する投資に至つては、少しもこれを顧みないのであつた。斯うした結果、往々にして一度失敗に陥らんか、完全に破産して恢復の能力をさへなからしめた。とは謂へ、斯うした渦中に於いて支那に於ける新式銀行は漸次發達して行つたのである。いまこゝに歐洲大戰以後に於ける錢莊と、新式銀行との勢力關係を知らんがため、これを數字的に示せば次の如く、錢莊の衰退に反して新式銀行の隆興が窺知されるのである。(資本額單位元)

年次	銀行業		錢莊業	
	數	拂込資本額	數	資本額
一九一二年	五〇	三六、二五四、九一九	四、六六一	七五、〇九八、三一二
一九一三年	四四	二七、三〇一、五三六	四、七六一	八六、六二八、六六四
一九一四年	五九	一九、七二六、七一六	四、四九一	五三一、一〇〇、六三五
一九一五年	四三	二四、一三六、四二六	四、二七四	六四、四六三、〇二一
一九一六年	四八	三七、八〇三、六九〇	三、四二四	二四六、二二九、二六二
一九一七年	五八	四六、〇七二、六一一	三、一八六	一七一、四五七、三七三
一九一八年	六〇	三四、六八五、一九五	三、〇五八	一六九、三二七、七二六

元來支那に於いては商業金融機關は、古くから存在してゐたが、新式銀行に至つては中外通商開始以後、外人のそれに倣つて創立されたものである。新式銀行創立の趨勢は、一八九六年に始まり、そのち八年を経て、前清戸部銀行の設立以來、二十餘年の間に於いて、その發展は頗る顯著なるものがあつた。歐洲戰爭期間、一時交易所企業の勃興を見るに至り、一九二二年交易所の濫設が遂に恐慌を發生せしめ、當然各種の企業をも急速に低下させたのであつたが、反對に銀行企業の隆興を促し、以て新式銀行を簇生せしめた。試みに一九一〇年民國成立以降の新設銀行數を列擧すると次の如くである。

民國成立以降の新設銀行統計

年次	新設數	資本總額(元)	拂込資本額(元)
一九一一年前	七	三四、七三九、〇〇〇	一七、五〇九、〇〇〇
一九一二年	七	七五、一四六、〇〇〇	二六、六五一、〇〇〇
一九一三年	一	五、〇〇〇、〇〇〇	一、三〇六、〇〇〇
一九一四年	三	八、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇
一九一五年	三	二六、〇〇〇、〇〇〇	二四、五〇〇、〇〇〇
一九一六年	五	三、四二〇、〇〇〇	一、七三九、〇〇〇
一九一七年	七	一三、七七八、〇〇〇	九、九〇〇、〇〇〇
一九一八年	一一	一四、四〇〇、〇〇〇	五、〇四六、〇〇〇
一九一九年	一二	三二、一六五、〇〇〇	八、一六七、〇〇〇
一九二〇年	一九	五六、二九〇、〇〇〇	二四、五四二、〇〇〇
一九二一年	二八	四六、一五三、〇〇〇	一五、五〇三、〇〇〇
以後	三	一二、五七八、〇〇〇	一五、九八九、〇〇〇
計	一〇六	三二七、六九三、〇〇〇	一四四、〇六六、〇〇〇

註——最近四、五年來に新設された銀行例へば中央銀行、國貨銀行等は、これに加へなかつた——

而して前北京政府經濟討論處の調査によれば、一九二二年には、十八行増加し、一九二三年には一五行の増加を見るに至り、一九二四年には八行、一九二五年上半期には五行を増し、一九二五年七月末現在に於ける新式銀行

は、一四一行、その資本總額三七五、一五〇、〇〇〇元、拂込資本額一五八、一六〇、四七一と計上されてゐた。新式銀行が發展の段階に入つて以來、外國銀行と中外合辦銀行の勢力は、既に漸次縮少するに至つた。このことは土着資産階級の發達の一つの顯著なる現象であると稱すべきであつた。外國銀行は、支那の經濟組織の幼稚な時代に於いては、該國人の金融機關たるに過ぎなかつたが、外國財政資本を主として、支那に對する借款供給の増加と共に、漸次外交政策上の主要勢力となり、遂ひに支那政府と該國との外交政策をすら左右するやうになつた。同時に商業の方面に於いても亦、その絶大な信用を利用しながら、支那人の預金を吸収し、とくに軍閥・官僚等の外國銀行に預金するものが最も多かつたのである。延ひて外國銀行は近年までは支那新式銀行の總銀行たるかの如き觀をさへ呈したのであつた。然しながら最近に及んで一般普通の商人は、外國銀行に對する預金に多くの不便を感じ出した結果、これを支那新式銀行に移すもの漸く増加し、國內經濟界の中心勢力は、自然新式内國銀行に轉じて行かうとする事實を看過出来ない。例へば通貨に於いてその銀條は、外國銀行によつて供給されたと雖も、これを造幣廠に送つて銀元に鑄造しつつ、市場に流通せしめる事務は、支那銀行の掌理するところとなつた等、その一例であり、就中政府の借款と、財政整理等の事宜に對しても亦同様、當然支那銀行公會の意見を蔑視することが出来なくなつた事實など、一層この間の經濟を表徴するに足るものがある。と謂つたからとて、各銀行の實力からこれを見ると、支那新式銀行は、一千萬元以上の資本を擁する銀行が、十行に過ぎず、五百萬元以上の銀行も亦十三行を算するのみ、その他は、百萬元以上のもの六十一行、以下すべて百萬元以内の資本

である等、實際上頗る貧弱たるを免れず、その国内財政界、金融界に於ける活動は、單に外國銀行の獨占せる市場中の一小部分の利益を占めるのみに止つてゐた。

これを要するに歐洲大戰以來の支那に於ける産業界の情勢は、簡單に次の如く説明し得るのであり、その間に於ける銀行資本の集積も亦、一種の脆弱な基礎の上に於いてなされて來た點を看過出来ないものである。

(一) 小農の破産と、生産上に於ける傾向が原料輸出の一方面にのみ趨るに過ぎなかつたため、全體の收穫は漸を追ふて減少した。

(二) 舊式手工業は著しき打撃を受け、新式小工業がこれに代つて漸次資本集中の趨勢を顯著ならしめた。

(三) 小商業は大商業資本の操縦するところとなり、その獨立性を失つたが、大商業資本は、また外國資本に依頼して發展し、國外華僑の國內に於ける投資の曙光を顯出した。

(四) 舊式金融業は漸を追ふて集中の傾向をとり、新式銀行事業は、多く政府公債の引受けに専念して投機的の性質を帯び、資金を大企業に供給する能はず、その結果たゞ單に商業資本の畸形的發展を表示したに止つた。

(五) 工業の發展は、商業の發展と並行すること能はず、農民失業の速度は、工業發展の速度と一致せず、失業農民は工賃労働者なることを不可能とされ、そこに廣大な失業者群を形成した。

(六) 加ふるに軍閥の割據、兵匪の頻出は、生産事業の發展を阻礙すること夥しかつた。

(七) ためにそれらの桎梏を受けて消費は欲望の増大と共に擴張し、官僚資本と商業資本とは當然政治的投機

に趨り、生産企業の發達を著しく不能ならしめ、依然國內は混亂状態を續けた」(「中國産業革命概観」第六章「中國境内の資本主義の發展」三「銀行資本の形成」を抄譯)。

X X

爾來支那に於ける銀行資本は、依然として以上の如き經過の下に集積・集中されつゝその發展を續けて來た。とくに近年に至つて銀行業が驚くべき程度の發達状態を示し、銀行資本が飛躍的な膨脹を示現するに至つたのである。然しながら、さうした發展は決して健全な發展振りと言ふことを得ず、寧ろ一種の畸形的な發展の段階を過程した點に、その特異性があつたことを重視すべきであらう。

「帝國主義商品のダンピングと、在支外國工場の壓迫とは、支那の農村經濟をば極度に破産に導き、支那の産業に對しては、これを日にく凌落の淵へと追ひ込んだ。これがために支那の金融業も亦、健全な發展への段階を過程し得なかつたのである。而かも支那の金融資本が、産業資本としての發展段階を過程しなかつた點、及び産業資本との結びつきのないことは、自らの出路を閉塞するの結果を招致し、遂ひにそれ自身をして畸形的な發展形態を造成せしめるに至つたと共に、支那金融業の變體的な發展をも促進したのであつた。但し斯くの如き發展を過程せしめたことには、二つの原因が潜んでゐた。その一つは支那の巨大な産業——例へば上海電話會社、上海電力會社またはその他の各大紡織工場、炭、鐵礦工場等の如く——は、すべて外資の壟斷するところとなり、且つ本國の工場が著しき營業不振に陥つて、時には閉鎖するものをすら簇出せしめた上、加ふるに銀行の貸出利

息が頗る高率たるを矢はなかつたため、自然工場にこれを借りる力さへなく、勢ひ銀行資本と産業との方面に於ける相互關係が全然缺如してゐた等の諸點に存し、も一つは商業の方面に於いても亦、銀行預金と、商品の流通上に於ける資金の多くが、依然錢莊に依據してゐた點にあつた。近年來錢莊の一部分の營業(例へば爲替の如き)が、漸次銀行の代替するところとなり、銀行は従前に比較して、さらに多くの商店の業務を經營したと雖も、銀行の巨額の遊資は、單に商業の方面に於ける一部分の用途を充たし得たのみに過ぎず、多くの預金は、その金庫の中に停滯せざるを得なかつた。従つて銀行の業務は、専ら投機事業、公債投資、地産、標金、保險等の上にその經營の範圍を劃定した。この結果は當然銀行業の虚偽の繁榮を招致し、同時に急性な恐慌を醸成するに至つたのである。これがために支那の銀行業は、公債及び地産の兩方面に偏在しながら、産業と隔離すること甚だしく、こゝに於いて支那銀行の性質は、たゞ商業資本主義となり、斯うして支那金融資本の特徴は一種の商業資本主義と成つて了つた」(「中國金融資本論」第一章「中國金融資本の特殊性」三「中國金融資本の奇詭的發展」から)。

とは、「中國金融資本論」の著者王承之氏の説くところであり、支那の銀行資本を解剖する上に於いて、斯うした特異性と特異性の發展とを考慮することなしには、その核心を把握し得ないのである。

X X

支那に於ける銀行資本の發展及びその過程を解剖せんとするに當つては、前述の如く、銀行資本がその成長への

段階を過程しつゝあつた間に、一方舊式金融機關——錢莊の衰退——寧ろ崩壊への途を辿つて行つた事實を、とくに重視しなければならぬ(このことは第一編のなかでも一寸觸れておいた)。而して支那の錢莊が何故崩壊への段階を過程するに至つたかの問題については、本章の各節に於いて、そのところ／＼に考察が試みられてゐるためここではこれを省略するが、参考のため著者が曾て「支那に於ける錢莊の崩壊過程」(上海雜誌、一九三五年二月發行)と題して解説した、一篇の結論を左に再録しておかう。

「民國二十三年三月十日、國民政府財政部は廢兩改元を宣布した。このことは新興銀行資本と、封建的勢力との鬭争の結果に於ける、封建勢力の敗亡を意味するものであつた。「銀兩」は封建時代の遺物であつて、疑ふべくもなく「實銀」を製造する「銀爐」と、その品位を鑑定してこれを保障する「公估局」とは行會制度と、封建制度の獨占であり、各地の銀兩が各自に政をなしてゐたことは、充分に貨幣制度の封建性的制據を表現しつゝあつた。自然「銀兩」の廢除は、支那貨幣史上に於いて劃期的な事柄であつたのである。斯くの如くにして新興銀行資本の封建勢力に對する鬭争は、結局封建勢力の敗亡に歸したのであるが、これによつて錢莊はその機能の大部分を消滅するに至つた。錢莊の基本は純粹な商業資本であり、支那に於ける資本集中の過程に於いて、一種の變態的金融資本すらが漸次成長しつゝあつた際(支那には民族産業資本の集積が頗る薄弱であつたことは勿論である)、純粹な商業資本の派生的産物である錢莊が、一歩々々没落への段階を過程したのは、必然の徑路であり、上海に於ける錢莊の消長に徴しても亦、民國十四年に八九莊を算したものが、二十四年に至り五五莊に激減した等、寧

ろこの間の経緯を説明してゐた。

第二節 新式銀行の發達とその現勢

「支那に於いて新式銀行制度が發生してから、現在に至るまで、まだ四十餘年を経たに過ぎないため、その成長の過程に於いては、甚だしく短かいのである。従つてその進歩の度合も亦、著しく緩慢たるを免れない。然しながら今日の支那に於ける金融市場に於いては、既に漸次その健全なる機構を構成してゐる。即ち國家經濟建設の過程中に於いて、その偉大なる力を發揮しつゝあることは中外人士の等しく認むるところである。元來銀行の定義には、各國學者の間で均しくその説を異にし、あるものは「預金の收支、財産交換の便利な機關である」と謂ひ、或るものは「信用授受の機關である」となし、あるものは「資金需給の調節機關である」と説いてをり、斯くの如くその謂ひ表し方に不同があると雖も、その意義に至つては以上の各説の何れもがこれを的確に表示してゐる。前清時代光緒三十四年、政府はかつて「銀行則例」十五條を制定し、「各種の兌換、預金貸金、割引、地金の賣買、及び紙幣の發行等を營むものを皆銀行と稱す」と規定した。民國二十年國民政府は、銀行法五十一條を公布し「預金及び貸金の收授、手形割引、爲替或は擔保貸出の三項の業務の一を營むものを銀行となし、その自ら銀行と稱せざるものをも銀行と見做す」旨規定した。紙幣の發行及び國庫經理に至つては、政府の許可を得た特權とし、一般銀行の業務ではないため、未だ規定が設けられてゐないが、さらに儲蓄銀行法、中央銀行法が

相繼いで公布された等、支那の銀行制度はこゝに始めて大いに整つた。而して支那の銀行の歴史上から之れを謂ふとき、銀行としての先驅者は、第一が固有の金融組織であり、その第二は外商の支那に於いて設立した金融機關であつた。支那固有の金融組織は、例へば票號、或は錢莊等が、既に數百年以前に成立されてをり、その組織の上に於いて、業務の上に於いて、現在の新式銀行と同様ではなかつたと雖も、その金融組織の基礎を樹立し、預金、貸金等の習慣を養成したのと、及び従つて銀行創設に適する環境を造成しながら、銀行の發生に裨益した功績は、これを看過し得ないのである。蓋し一種の新事業の產生は、固より實際上これを需要するか否かによつて決定さるべきものであるが、社會に於いて斯うした需要に對する認識を培養することなしには、短時間の間に、よくその功を奏するに至るものではないのであつた。従つて票號、錢莊等の二、三百年來に渉る苦心經營の結果、一般人民の金融組織に對する認識を養成することがなかつたならば、恐らく支那に於ける新式銀行の產生が、今日の如き隆興を示現し得なかつたであらう。斯くの如くにして新式銀行の產生は、一面に於いて固有金融組織の影響を受けた結果であると雖も、他面新式銀行の規模は、完全に他國のそれに倣つたものであつた。それは外商の支那に於いて設立せる金融機關が、頗る多かつたからである。外商銀行が支那に於いてその支店を設立したのは、道光二十八年、英國系の東方銀行上海支店が最も早く、咸豐七年に設立された英國系の麥加利銀行上海支店、及び同治四年の設立にかゝる英國系の匯豐銀行上海支店等々、これに次ぎ、爾來既に九十年の久しきに及んでゐる。その間光緒二十二年には、新式規模を以て出現せる最初の華商銀行——中國通商銀行——が設立された。そ

してその内部組織は、すべて匯豐銀行を參酌したものであつた。このことは當時尙ほ法規上制定された條文がなかつたため、寧ろ實勢上必然であつたと謂へやう。中國通商銀行の成立後の九年目、即ち光緒三十年の春、戶部の「銀行の創設を以つて幣制普及の樞紐となすべし」との奏請により「大清戶部銀行」が試験的に創設された。その「試辦銀行」章程三十二條は、隱然支那に於ける國家銀行制度の法律化への發端であつた。光緒三十四年に至り、戶部を改めて支那となし、「大清戶部銀行」も亦、その名稱の改稱を奏請の上「大清銀行」と改め、「大清銀行則例」二十四條を公布した。こゝに於いて支那に於ける國家銀行の雛形が出来たのである。民國元年大清銀行を改めて、さらにこれを中國銀行と名づけ、同時に政府の主張によりその組織をも改造しつゝ、遂に大清銀行を整理解散して、別に財政部から株金を募集した上、同時に制定された中國銀行則例三十條により「股份有限公司制度」を採つた。蓋し、これによつて官商合辦の銀行を以て國家銀行としての職能を享有せしめたものであつた。民國十三年孫文が廣州に政府を建立した際、中央銀行が創設され、次いで十七年國民政府の南京遷都と共に、中央銀行條例二十條、中央銀行章程四十五條を公布した上、現在の中央銀行が同年十一月一日上海に於いてその成立を見るに至つたのである。二十二年には廣州の中央銀行が命令によりて廣東省銀行と改められ、支那に於ける國家銀行の基礎が初めて確立するに至つた。斯くて民國十七年十一月、國民政府が中央銀行を設立したとき、同時に中國銀行及び交通銀行の兩銀行條例をも制定し、交通銀行を政府特許の全國に於ける實業發展促進のための銀行と定め、中國銀行を政府の特許による國際爲替銀行となし、その後さらに銀行法、兌換券發行税法、銀行業

収益税法、儲蓄銀行法、中央銀行法等が、相前後して立法院會議を通過して公布され、支那の銀行制度はこゝに初めて、第一期時代の雛形から、第二期時代の發育期に入つた」（中國銀行總管理處經濟研究室發行「中行月刊」第三卷、第二期「現段階の中國銀行業」を抄譯）。

以上は雜誌「中行月刊」の誌上に於ける「現段階の中國銀行業」、「我が國銀行業の回顧」の一節である。斯くの如くして發展の段階に入つた支那の銀行業は、現在（一九三六年六月末現在）その行數に於いて一六四を算するに至つた。

(附表) (一) 歷年銀行開設の年別統計

年 度	設立銀行	閉鎖銀行	廢存銀行	年 度	設立銀行	閉鎖銀行	廢存銀行
光緒二十二年	一	一	一	光緒二十八年	一	一	一
同 三十三年	三	三	一	同 三十四年	五	三	二
宣統元年	一	一	一	宣統二年	一	一	一
同 三年	三	二	一	民國元年	一四	一一	三
民國二年	二	一	一	同 三年	三	一	二
同 四年	七	五	二	同 五年	四	三	一
同 六年	一〇	九	一	同 七年	一一	六	五
同 八年	一五	九	六	同 九年	一六	一四	二

支那資本機構・財閥・政權

五萬元以下のもの	七	五萬元以上のもの	一二
十萬元以上のもの	三五	五十萬元以上のもの	三六
百萬元以上のもの	五八	五百萬元以上のもの	八
一千萬元以上のもの	七	未詳	一
總計	一六四		

一四六

と、一千萬元以上の自己資本を擁する銀行が七行を算してゐるのである。

而かも右の銀行に投下された資本の増加は、とくに一九三二年以後に於いて、一層その趨勢を顯著ならしめた。そしてその最大の原因は五分の一以上の銀行が、一九三二年以後に設立されたものであるがため、一九三三年より、新設銀行数の増加の結果、従つてその投下資本も亦、これにつれて増加し、次いで一九三二年前に設立された銀行と雖も、その拂込資本額の増加を圖るに至つたことが、とくに看過出来ない要素であつた。試みに一九三二年以後、一九三六年までの銀行に對する投下資本の増加率を示すと次の如くである。(單位元)

種別	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年
中央及び特許銀行	五、四七、三〇〇	五、四七、三〇〇	一三、七五、六五〇	一五、七五、七五〇	一五、七五、七五〇
指 數	100	100	二五〇	二九九	二九九
省市立銀行	三、七〇、七三三	四、〇五、九七三	三、〇八、一七〇	三、七、二六、一七〇	五、四、九、九、七〇
指 數	100	一一一	八二	一〇〇	一四八

種別	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年
商業銀行	五、七〇、八九五	六、六四、三、五〇	七、〇〇、三、〇〇	七、四、六、九、一三三	七、〇、七、九、四、五三
指 數	100	一一四	一二二	一二九	一二七
儲蓄銀行	三、四、〇、〇〇〇	三、四、九、八、〇〇	三、四、九、七、四〇	二、五〇、一、〇、〇〇	三、五〇、一、〇、〇〇
指 數	100	一〇一	一〇一	七九	一〇一
農工銀行	一、七、七、四、八一	三、三、二、四、二、七四	二、六、三、七、三、九四	二、八、七、〇〇、六、九	三、三、八、八、〇、五、六
指 數	100	二二五	一四九	一六三	一八八
專業銀行	一、九、八、三、七、〇〇	一、八、三、七、三、六、六	一、八、五、四、九、六、六	一、八、四、七、七、八、〇〇	一、九、五、八、八、〇〇
指 數	100	九三	九三	九三	九六
華僑銀行	二、五、五、九、三、〇〇	四、五、五、九、三、〇〇	四、七、八、六、八、六、六	四、七、三、〇、八、五、九	五、〇、二、三、六、九
指 數	100	一七八	一八七	一八五	一九六
總計	一一、八、九、九、九、九	一五、〇、八、五、三、三三	一五、三、一、九、〇、一、六	一五、八、四、六、〇、二七	一六、〇〇、五、七、四、九
指 數	100	一二八	一二五	一二七	一三六

尙ほ一九三二年以後に於いて、既設銀行が、その自己資本の急激な増加を促すに至つた例證としては、上海に於ける主要銀行——中央銀行及び、上海銀行公會の加入銀行中の主なるもの、並びに四行儲蓄會を加へた二十八銀行の、拂込資本の急速度の増加の跡に徴して、これを知ることが出来る(こゝに謂ふところの二十八銀行とは、中央、中國、交通、通商、浙江興業、四明商業、儲蓄、浙江實業、廣東、江蘇、中華、聚興誠、新華、上海商業儲蓄、鹽業、中孚、金城、華僑、中國農工、大陸、東萊、永亨、中國實業、東亞、中興、中南、國華、聚業、四行儲蓄會の

二十七銀行一儲蓄會を指すのである。これらの各行は、支那に於ける銀行数の六分の二に過ぎないのであるが、その自己資本は、二億八千萬元、その總資産額四十五億元、分支店數七百六十行に達し、全國銀行の實力の三分の二以上を占めてゐる。

主要二十八銀行の自己資本増加表（單位元）

一九二二年	九五、五〇九、五七八	一九二二年	一〇一、九九六、六一一
一九二三年	一〇七、五二八、七一四	一九二四年	一一二、七一九、一七六
一九二五年	一一四、〇六五、四三四	一九二六年	一一四、九九六、八九〇
一九二七年	一二七、〇四九、五四三	一九二八年	一四四、一六〇、〇九三
一九二九年	一四九、〇二五、二六八	一九三〇年	一五〇、一九七、八六八
一九三一年	一五五、七八四、七八五	一九三二年	一五六、七七七、六七六
一九三三年	一七三、八八五、三二六	一九三四年	二五四、四三九、九七六
一九三五年	二八〇、四四〇、〇七六		

兎まれ支那全國に於ける銀行數一六四行、その分支店數一、三三二行、及びその擁する自己資本四〇〇、〇〇〇、〇〇〇元といふ額は、前述の如くこれを一九三〇年以前に較べては、寧ろ驚くべき膨脹であり、而してこれらの分布状態を見るに、その大部分は、上海を中心とする九大都市に集中してゐるのであつて、これを各省について見ると、江蘇、浙江の兩省に於けるものが大部分を占め、著しい偏在状態を示してゐる。いま試みにこれらの分布状態

を表示すると次の如くである。

全國銀行本店及び分店の分布統計

地點	本店	分支店	計	地點	本店	分支店	計
上海	五八	一二四	一八二	天津	八	五八	六六
北平	三	五六	五九	青島	三	二〇	二三
杭州	六	一五	二一	南京	二	五一	五三
重慶	九	一七	二六	漢口	四	二九	三三
廣州	六	一六	二二	江蘇	一三	二〇〇	二一三
浙江	一七	八五	一〇二	山西	一	三二	三三
甘肅	一	四	四	河北	一	四九	四九
河南	一	四九	五〇	陝西	二	四九	五一
四川	六	五八	六四	江西	三	六六	六九
安徽	一	五五	五六	湖北	一	三五	三五
湖南	一	三〇	三一	貴州	一	二	二
雲南	一	六	七	福建	一	五七	六一
廣西	一	三〇	三一	廣東	一	一五	一五
新疆	一	八	九	察哈爾	一	四	四
計				計			

支那資本機構・財閥・政權

總計	一	八	九	一五〇
其 他	一	一三	一三	一
總計	一六四	一、三三二	一、四九六	四
				五
				一〇
				三三
				四三

因に支那に於ける銀行は、一般的にこれを次の七種類に分類されてゐる。

- (一) 中央銀行、(二) 特許銀行、(三) 省市立銀行、(四) 商業銀行、(五) 儲蓄銀行、(六) 農工銀行、(七) 專業銀行、(八) 華僑銀行。

以上のうち中央銀行を國家銀行として、國民政府が直接これを經營し、その資本金額は一億元の全額拂込済であり、中國銀行、及び交通銀行を、國民政府の特許によつて設立された銀行として、これを官民合辦組織となし、中國銀行を國際爲替專營の特許銀行として、その資本總額四千萬元の全額拂込済、交通銀行は、全國の實業發展に對する特許銀行と定め、その資本金額二千萬元の全額拂込済となつてゐる。就中この三銀行の資力の雄厚さは、全國銀行に冠たるものあるは勿論、その分支店も亦多く、且つ各地に廣く分布され、その發行にかかる兌換券は、全國通行の法幣として定められてをり、その他國庫の經理、或は一部の國庫經理の特權をも有し、支那に於ける銀行中の領袖である。而してその自己資本は、全國銀行のそれに對比して、百分の四十三を占め、分支行數は三五〇行と、全國銀行の百分の二十六に達してゐる。

X X

省立銀行は全部で十八行。全國各省（甘肅、青海、察哈爾、綏遠、貴州等の各省を除くほか）に涉り、すべての省に設けられてゐる。その主要な使命は、全省に於ける金融の調節、省庫の經理、並びに國稅收支の代理をなすにあるが、多くの省銀行は從來、兌換券發行の特權をもつてゐた（近來幣制の改革後法幣の確定と共に、その兌換券發行の特權は自然消滅したと雖も、現在ではそのうちの數省——江蘇、浙江、安徽、江西等の如く——が、三百萬元を限度とする補助紙幣の發行を許されてゐる）。とくに邊疆の各省、例へば寧夏、西南、廣西等の如く——の省銀行は、他に銀行が設置されてゐないため、すべて各該省に於ける唯一の金融機關となり、自然少なからざる重要性を發揮しつゝある。市立銀行は、現在七市に七行設置されており、上海、南京、青島、北平、天津、廣州、南昌等の如く、何れも市政府から設立されたもので、市金庫を經理するほか、青島市農工銀行及び廣州市立銀行には兌換券發行權を特許され、上海市銀行は輪渡業務（渡船業）を經營してゐる。同時に七銀行は、すべて各該市政府の所在地にあり、省銀行も亦各該省政府の所在地に設けられてゐる（四川、江蘇、安徽、河北、湖北等の五省は省内の通商大都市に所在する）。斯くて省市立銀行二十五行の自己資本は五千四百萬元で、中央銀行の半額にも及ばないのみでなく、省立銀行の資本は多く百萬元以上、市銀行の資本は百萬元以下であると雖も、その分支店數が三百三十一行に上り、とくに各地方に散在してゐる點に特色をもつてゐる。

X X

商業銀行の行數は最も多く、従つてその分支行も亦頗る多い。然しながらそれらの大部分は通商大都市に設けら

れてをり、内地に設立されてゐるものは甚だ多い。自然その分布區域は、省市立銀行のやうに普遍してゐないのである。商業銀行の主要な使命は、商業資金の調節にあり、預金と貸付とを主となし、爲替による資金の往來を以て商業資金調節の中心としてゐる。その成立の最も古い中國通商銀行、及び規模の頗る大きい上海商業儲蓄銀行、金城銀行、その他婦人の手で設置された上海女子商業儲蓄銀行等、すべてこれに屬し、就中、大中銀行、中南銀行、四明商業儲蓄銀行、北洋保商銀行、浙江興業銀行、豐業銀行等は、何れも財政部から兌換券の發行權を獲得し、そのほか多くの商業銀行は、儲蓄部を兼營してをり、儲蓄兼營の銀行は全部その名稱にこれを表示してゐる。例へば上海商業儲蓄銀行等の如くに——。而していま商業銀行の行數を見るに七四行に達し、八種の銀行中、その行數に於いて最も多く、全國銀行の百分の四五を占め、その拂込資本額七千九百萬元——これを中央銀行一行に比して尙ほ及ばないとは謂へ、その分支行數三六二行と、省市立銀行に較べて遙かに超過してゐる。然るにその分布狀態に於いては省市立銀行の普遍化に到底匹敵し得ないのである。而かもこの種の商業銀行中、とくに注意すべきは、その本行の所在地點が上海市にあるもの四十行、天津、北平、青島、重慶、杭州、漢口、廣州等の八大都市にあるもの二十行、その他の各省縣にあるもの十四行に過ぎないことに對してであり、各省縣に於けるものと雖も、その多くは沿海各省に偏在し、江蘇、浙江の兩省に十一行、福建に一行、その内地に所在するものは、僅かに歸安、自流井に各一行づつを算するのみである。ここにも亦支那に於ける銀行資金——乃至資金流動上に於いての特異的な畸形狀態を遺憾なく表現してゐる。

X X

儲蓄銀行の行數は最も少なく、現在僅かに六行に過ぎない。それは儲蓄事業が、各種の銀行によつて、これを經營されてゐるからであり、前述の特許銀行、商業銀行、及びその他農工銀行、專業銀行すらが、何れも儲蓄業務を兼營しつゝある。而してそれらの儲蓄兼營銀行は、別に基金を支出して儲蓄部を設置し、會計を獨立した上、無限責任組織の下にこれを專營せしめてゐる。従つて一九三四年國民政府が儲蓄銀行法を公布し、同法によつてこれら各銀行の儲蓄事業を管理することとした等、單獨に儲蓄事業のみを營む儲蓄銀行の比較的振はない所以は、この點にあつた。さらに支那に於いて儲蓄銀行の發達しない原因としては次に列挙する三項を數ふことが出来る。

- (一) 儲蓄銀行の資本が比較的少なく、勢ひ預金者の信用を惹き得るに充分でなかつた。
- (二) 營業の範圍も亦狭く、同時に吸收し得た資金の消化に困難である。
- (三) 前述の如く資本の比較的雄厚な、且つ歴史の古い他の銀行が、何れも別に基金を置いて儲蓄業務を專營してゐる結果、一般儲蓄銀行はこれらの資本の雄厚な信用の鞏固な儲蓄兼營銀行に對し、これに對抗し得ない。

X X

農工銀行は農工業に對する貸出を行ふ銀行で、農工經濟の發展を圖ると謂ふのを、その主要な目的となしてゐる。工業の方面では、不動産或は機械を擔保とせる貸付、及び貨物に對する保證貸付、或は荷爲替等をも取扱ひ、農業の方面に對しては、法律によつて組織せる農民產銷合作社を貸出の對照とし、とくに種子肥料の購入等の生産的貸

付に重きを置き、農産物の抵當貸付、或は種々の技術改良についての信用貸付をもなすこととなつてゐる。勢ひ農工銀行は純民間經營にかゝるものが比較的少なく、省縣立または官民合辦の性質のものが多い。江蘇省農民銀行などその最も著名なものである。而して農工銀行のうちでは中國國貨、中國農工、中國農民、中國實業、江蘇省農民、浙江實業、農商銀行等の七行が、その資力の雄厚さと、設立の歴史の古い點とにより、顯著な成績を挙げつゝあるが、その他の縣立或は民營の農工銀行は、資本が貧弱であるため、農工銀行としての使命を充分に發揮することすら不可能な状態にあることを免れない。斯くの如くにして現在の農工銀行は、その數に於いて三十二行に過ぎず、その拂込資本額も亦三千三百萬元と、中國銀行一行の拂込額にも及ばず、百萬元以上の資本を擁せるもの九行、そのほか十萬元以下のもの、甚だしきに至つては五萬元以下のものが十五行に達してゐる程の貧弱振りを示してゐるのである。その分支行數百八十六行と、これまた中國銀行一行のそれにも及ばない。

專業銀行に至つては、その營業の範圍が頗る狭く、うち著名なものは鹽業銀行、上海綢業銀行、上海煤業銀行、浙江興業銀行等であるが、全體の總資本額一千九百五十萬元、分支行數五十一行と、交通銀行一行のそれにすら及ばないのである。但しその拂込資本額は百萬元以上のもの多く、五十萬元以下のものが極めて少ない點——即ち平均資本額百萬元以上となつてゐる——に特徴をもつてゐる。

X X

華僑銀行は、もとゞ商業銀行の部類に歸納せしむべきものであるが、その本行は多く國外に設けられ、支那に於ける華僑の金融状態を表現しつゝあるがために、華僑銀行としてとくに商業銀行から引離されてゐる所以であり、現在の行數九行、本店を香港、新嘉坡に置くもの多く、マニラ、ニューデランドに各々本行を設置せるものもある。分支行數は三十餘行に達してゐると雖も、別に分支行を設けないもの、或は國內に分支行をおかないものが四行ある。(以上——民國二十五年「全國銀行年鑑」を參照)

第三節 銀行資本の驚くべき膨脹

支那に於ける銀行業の發展は、その新設銀行數の増加、または銀行に於ける自己資本の激増と謂ふことよりも、さらに驚くべきは、それらの銀行の支配する資本の増加にある。いまこの種の銀行資本の増大に對する適確なる調査資料がないため、その膨脹の過程を數字によつて具體的に表現することは困難であるが「民國二十五年全國銀行年鑑」の發表による「最近四年間の營業狀態の分析」に徴するに次の如く

種目	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年
在 庫 現 金	二七九,六〇〇,七五五	三二一,七五五,三三三	二六七,九〇〇,三三三	四三三,五〇〇,八五五
等三章 銀行資本の集積と膨脹				一五五

支那資本機構・財閥・政權

各種貸金	一、八七、四〇六、〇三五	二、三三、〇八六、九三三	三、一八五、四三三、四六〇
有價証券	三、六、四〇八、二六七	二、三六、九〇一、〇七四	五、九三、四三六、六八九
發券準備金	四、〇、四八五、二八八	五、八、二七三、七六八	八、六一、七九三、三〇〇
領用發券準備金	五、九、九三八、二二六	六、六、八七四、二五三	一、五九、六八二、七三三
土地建物器具	八、九、二三三、二二九	一〇、五、二五七、〇八一	一、三八、八八六、二四四
其他科目	四、一、四八、五五八	六、一、四八六、三六六	七、六、七、八〇〇
本年純損	一、三、八五五	三、九、一〇〇	一、三、〇〇一
資産總額	三、〇〇三、一六二、〇一〇	三、六、七、七三六、五七五	四、二、九、五八七、〇七一

負債總額(單位元)

拂込資本	三、四、八、九九、九二九	三、五、〇、八五五、三三三	三、四、一、九〇、一七六	三、六、八、四六五、一六〇
積立金其他	三、一、〇一、七〇三	七、七、四七、〇二二	七、五、七〇八、九七五	七、八、七三九、三六七
各種預金	二、二、五、六六七、四六二	二、五、九四、三九、五五五	二、九、八一、七三、一八二	三、七、九、四七、七〇五
爲替勸定	三、三、三九、五〇〇	二、七、六二七、七〇七	四、二、七九六、九七七	六、五、七六六、七二五
兌換券	四、五、一、五九〇、四一八	五、五、一、九〇、九三三	六、三、三、五三三、三三三	八、六、七、九八四、三三四
領用兌換券	五、五、二〇一、三二六	七、八、七〇九、六二九	二、五、二、三三〇、〇七〇	一、六、四、八六六、七一一
其他	四、三、三、四八、八七八	六、一、二九三、五〇八	七、四、四六二、三六五	六、六、八六五、三二五
本年純益	二、九、三、三三、九七二	三、三、三、三、八一九	三、九、三、三、七五三	六、六、七、三、三三三

負債總額 三、〇〇三、二二二、〇一〇 三、六、七、七三六、五七五 四、二、九、五八七、〇七一 五、四、一、九〇、一七六

と、一九三五年末に於ける數字は、負債總額が、五、四二八、六五二、一一九元、その預金總額が三、七七九、四一七、七七〇元となつてをり、一九三二年のそれに較べて、僅々三箇年に於いて、六割強の激増を告げてゐる。

而してこれを前記の上海に於ける主要銀行二十八行(四行儲蓄會を含む)の發展經過に徴するるとき次の如く

上海主要銀行二十八行の資本狀態(單位元)

年次	負債總額	預金	拂込資本
一九二四年	九七四、〇〇〇、〇〇〇	六三六、〇〇〇、〇〇〇	一一三、〇〇〇、〇〇〇
一九二九年	一、九四二、〇〇〇、〇〇〇	一、三三〇、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇
一九三〇年	二、三三三、〇〇〇、〇〇〇	一、六二〇、〇〇〇、〇〇〇	一、五〇、一九七、〇〇〇
一九三一年	二、五七〇、〇〇〇、〇〇〇	一、八六一、〇〇〇、〇〇〇	一、五、七、八四、〇〇〇
一九三二年	二、七四八、〇〇〇、〇〇〇	一、九七四、〇〇〇、〇〇〇	一、五、七、七、〇〇〇
一九三三年	三、二九九、〇〇〇、〇〇〇	二、二四九、〇〇〇、〇〇〇	一、七、三、八八五、〇〇〇
一九三四年	三、八四九、〇〇〇、〇〇〇	二、七五二、〇〇〇、〇〇〇	二、五、四、四三、〇〇〇
一九三五年	四、九九八、八三二、〇〇〇	三、五二九、二〇〇、〇〇〇	三、六〇、四四〇、〇〇〇

(以上「中國重要銀行最近十年營業概況研究」より引用、一九三五年の分は「民國二十五年全國銀行年鑑」から著者の計上せる數字)

と、その負債總額が四、九八九、〇八三、〇〇〇〇〇元、預金總額が三、五一九、二〇〇、〇〇〇〇〇元、それ〴〵激増

してをり、これを一九二四年のそれに比較して、何れも五倍以上の増大を呈してゐる。とくに上海に於ける主要銀行二十八行の預金總額三十五億餘元は、これを東京手形交換所社員銀行の預金に比し遙かに超過してゐるのであつて、就中この激増振りが最近四年間に涉り、著しき飛躍的の數字を示しつゝある點に於いて、寧ろ驚異を禁する能はないのであつた。

世界經濟恐慌以來、支那に於いても亦、前各章に叙述したるが如く、農村經濟の破局状態、各産業部門の破産頻出等々、彌上恐慌の深化を示現しつゝあつた渦中に於いて、獨り銀行資本のみが、斯くの如き驚くべき膨脹を來たすに至つたところに、支那經濟——とくに支那の民族資本機構——資本集積の過程——に、特異性が横はつてゐるのである。

試みに全國に於ける銀行の内容を左に摘録しておかう。

種別	手持現金 (單位元)			
	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年
中央及び特許銀行	一三、七三三、四九九	一三、九八〇、五五五	八九、八八六、八一八	二五、五六二、九五二
指 數	100	100.14	六七.七三	一八四.一九
省市立銀行	一八、七七八、三三三	一七、〇三三、一七三	二〇、一七八、九七三	九、六五六、八六六
指 數	100	九〇.七〇	一〇七.〇六	四八.一〇
商業銀行	七三、六四一、一九七	七五、九五二、三三三	八一、五五七、八五三	六二、五七三、二六四
指 數	100	一〇三.三三	九七.七三	八四.五三

種別	積立金 其他 (單位元)			
	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年
儲蓄銀行	二、二七九、八四二	一、九七五、六三三	一、三三三、六七九	八七五、四六四
指 數	100	八六.七四	五九.一六	三九.六六
農工銀行	七、八四三、三九五	九、九〇八、〇一八	一三、三三三、三三三	二六、四七五、三〇一
指 數	100	一二六.二九	一五八.二九	三三七.三三
專業銀行	九、六七三、〇七八	一一、三四〇、九一五	一〇、九八五、七五五	七、四七五、五〇四
指 數	100	一二七.二五	一一三.五八	七七.七七
華僑銀行	三、五三六、五九九	六四、五五八、五八九	六六、四〇三、八二五	七二、九六七、四八九
指 數	100	一八二.二六	一八六.三四	二〇四.七五
總計	二七、九六〇、七九五	三二、七五九、二二三	二八、二〇九、二二五	四三、五〇八、八五七
指 數	100	一一七.〇九	一〇七.七〇	一五七.五三

種別	積立金 其他 (單位元)			
	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年
中央及び特許銀行	二七、三四三、六九七	二五、八三八、四五四	一四、三四一、七一九	一五、二六二、八六六
指 數	100	一〇九.八五	五三.一八	五七.九四
省市立銀行	三、六三三、八〇一	四、一三八、三三〇	四、七三六、三三三	五、七〇〇、七〇八
指 數	100	一一二.〇〇	一三〇.七〇	一五七.五九

支那資本機構・財閥・政權

種別	商業銀行	儲蓄銀行	農工銀行	專業銀行	華僑銀行	總計	預(單位元)
中央及び特許銀行	一九三二年 九四〇,〇七五,四二九	一九三二年 一,一四六,九二五,二九二	一九三二年 一,一五二,一七五,三三〇	一九三二年 一,一五二,一七五,三三〇	一九三二年 一,一五二,一七五,三三〇	一九三二年 六,〇〇一,七三三	一九三二年 九四〇,〇七五,四二九
省市立銀行	一九三二年 一〇三,一三八,五五五	一九三二年 一,一八二,七三三,〇〇〇	一九三二年 一,一八二,七三三,〇〇〇	一九三二年 一,一八二,七三三,〇〇〇	一九三二年 一,一八二,七三三,〇〇〇	一九三二年 六,〇〇一,七三三	一九三二年 一〇三,一三八,五五五
中央及び特許銀行	一九三三年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三三年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三三年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三三年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三三年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三三年 六,〇〇一,七三三	一九三三年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇
省市立銀行	一九三三年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三三年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三三年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三三年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三三年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三三年 六,〇〇一,七三三	一九三三年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇
中央及び特許銀行	一九三四年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三四年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三四年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三四年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三四年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三四年 六,〇〇一,七三三	一九三四年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇
省市立銀行	一九三四年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三四年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三四年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三四年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三四年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三四年 六,〇〇一,七三三	一九三四年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇
中央及び特許銀行	一九三五年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三五年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三五年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三五年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三五年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三五年 六,〇〇一,七三三	一九三五年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇
省市立銀行	一九三五年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三五年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三五年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三五年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三五年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三五年 六,〇〇一,七三三	一九三五年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇

種別	商業銀行	儲蓄銀行	農工銀行	專業銀行	華僑銀行	總計	各種貨金(單位元)
中央及び特許銀行	一九三二年 七六,九三三,八四三	一九三二年 一八,五二一,五三三	一九三二年 一三,六〇四,三三一	一九三二年 一三,〇三三,〇三三	一九三二年 七九,三五八,六九七	一九三二年 二,二二五,六六七,四三三	一九三二年 七〇,九三三,六九四
省市立銀行	一九三二年 一〇三,一三八,五五五	一九三二年 一,一八二,七三三,〇〇〇	一九三二年 一,一八二,七三三,〇〇〇	一九三二年 一,一八二,七三三,〇〇〇	一九三二年 一,一八二,七三三,〇〇〇	一九三二年 六,〇〇一,七三三	一九三二年 一〇三,一三八,五五五
中央及び特許銀行	一九三三年 八四八,五五七,三三八	一九三三年 三二,七五五,〇五六	一九三三年 一七,四八八,〇三三	一九三三年 一四,一〇〇,〇三三	一九三三年 二九,五七一,三六〇	一九三三年 二,九四四,三九,五五五	一九三三年 一,〇〇一,八〇三,〇〇〇
省市立銀行	一九三三年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三三年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三三年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三三年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三三年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三三年 六,〇〇一,七三三	一九三三年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇
中央及び特許銀行	一九三四年 一,〇〇〇,〇〇〇,〇〇〇	一九三四年 四二,八九九,三三三	一九三四年 三三,〇三三,〇三三	一九三四年 一五,〇〇〇,〇三三	一九三四年 一四,七七七,三六九	一九三四年 三,九八一,三七七,一八三	一九三四年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇
省市立銀行	一九三四年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三四年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三四年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三四年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三四年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三四年 六,〇〇一,七三三	一九三四年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇
中央及び特許銀行	一九三五年 九四三,三三三,三三三	一九三五年 三二,七八八,〇〇〇	一九三五年 三三,八五五,〇七四	一九三五年 一七,四八八,〇三三	一九三五年 二六,一八〇,〇三三	一九三五年 三,七七九,四二七,七〇五	一九三五年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇
省市立銀行	一九三五年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三五年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三五年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三五年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三五年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇	一九三五年 六,〇〇一,七三三	一九三五年 一,一〇一,八〇三,〇〇〇

第三章 銀行資本の集積と膨脹

支那資本機構・財閥・政權

種別	中央及び特許銀行	省市立銀行	商業銀行	儲蓄銀行	農工銀行	專業銀行	華僑銀行	總計
一九三二年	九〇,九八,三五三	一七,三二八,五九九	六三,四一八,八〇四	一五,〇九九,三六六	二五,五七七,二六六	一六,〇六四,七〇〇	六八,〇〇四,〇八六	一,八五七,〇六六,〇三五
一九三三年	六三,一四三,四九〇	一七,七二一,五三三	七九,五五三,三二九	二五,九三三,八四八	二五,三〇三,三五〇	一三,二〇〇,三三三	九六,八〇〇,九三二	二,三三七,〇六六,九三三
一九三四年	三〇,〇八八,四〇一	一五,七五〇,七七七	八六,四八四,九二五	三三,八四三,九三三	一八七,三二七,六九九	一六〇,八二二,五七七	一〇六,六八二,六三三	二,〇六六,九三三,三二二
一九三五年	三四一,九九六,四九九	一八六,一七四,四四四	八〇九,三五五,二五〇	三七,六七四,二二五	二八,四四三,三九九	一四六,六六七,五八七	八〇,三三二,四七五	三,一八五,四三三,四六〇

一六二

有價證券(單位元)

種別	中央及び特許銀行	省市立銀行	商業銀行	儲蓄銀行	農工銀行	專業銀行	華僑銀行	總計
一九三二年	九〇,九八,三五三	六,三三〇,四四一	七八,八二二,一九九	三,三五四,二六三	三,七九〇,〇九八	二〇,一二三,五七七	四,三〇三,四一六	三六,〇〇八,三六七
一九三三年	六三,一四三,四九〇	六,七七一,八七一	二,〇八八,四〇五	五,三六〇,二九四	三,九三六,五四九	二,二四四,五二〇	二,三三三,〇三七	二五六,九〇一,〇七四
一九三四年	四〇三,一七四,五五三	二,二八九,九三六	一八九,九九二,三三八	七,三六六,五三三	四三,二六八,二〇三	二五,五五五,七五五	二〇,〇三三,四八一	四六六,二二一,五二七
一九三五年	六四六,九九四,三三八	二六,二四四,四三三	一四九,〇三三,九四八	六,〇三二,三九八	三〇,四六六,六五七	二九,四七三,〇九九	二〇,五五三,三三六	五九三,四八八,六八九

一六三

發行兌換券(單位元)

種別	中央及び特許銀行	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年
中央及び特許銀行	三二八,九三三,三三三	三三〇,七九四,九〇九	四〇三,一七四,五五三	六四六,九九四,三三八	

支那資本機構・財閥・政權

支那資本機構・財閥・政權	指 数	100	166
省 市 立 銀 行	指 数	100	166
指 数	100	166	166
商 業 銀 行	指 数	100	166
指 数	100	166	166
儲 蓄 銀 行	指 数	100	166
指 数	100	166	166
農 工 銀 行	指 数	100	166
指 数	100	166	166
專 業 銀 行	指 数	100	166
指 数	100	166	166
華 僑 銀 行	指 数	100	166
指 数	100	166	166
總 計	指 数	100	166
指 数	100	166	166

(以上何れも民國二十五年全國銀行年鑑の發表)

右に引用した數字が示す如く、支那に於ける銀行資本の膨脹は、當然預金及び銀行券の増大によつて成されたこ

とを指摘せねばならぬのであるが、銀行預金の増大は、銀行が高率なる利子を預金者に提供し得たため、そこに巨大な預金の吸収を結果づけるに至つたのと、巨額の資金が生産行程から離れて、利潤の機会を求めつゝ、銀行に集中するに至つたからであり、前述の如く、國內産業の極度の萎縮と、不振とにより、利潤の機会を失つた資金が、産業から離れて當然銀行に集つた所以である。

そこにはまた前各章に略述した通り、地方に於ける社會状態の不安の増大に伴ひ、地方資金の都市集中が行はれた點もあつたであらうし、支那内地の農業及び、商工業に投下されてゐた個人の資本が、恐慌の發展と共に、主要都市に集中した過程もあつたであらう上、支那銀行の對在支外國銀行との利子の差異が、これらの外國銀行の預金を支那銀行に移動せしめたことをも亦、さうした原因の一つに數へ得たであらうは勿論、舊式金融機關たる錢莊の機能の縮少につれて、錢莊預金の銀行移轉も同時に行はれたであらうとは謂へ、兎まれ、銀行資本の驚くべき膨脹は、支那を中心とする經濟恐慌の深化の渦中に於いて、一層その趨勢を加へて行つた事實は、さきに摘録した數字がこれを證明してゐるのである。

即ち支那の銀行資本の膨脹は、歸着するところ支那農村經濟の破局的凋落、民族諸工業の破滅、商業の全面的破産等を背景として實現されるに至つたのであるから、生産行程から離れた資金の集中が、如實の銀行資本の膨脹を促進したものであると謂ふを得べく、自然恐慌が銀行資本の集中に、少しも障礙を與へなかつたのみでなく、寧ろ産業の荒廢が、銀行資本の増大を促す原因であつたところに、支那に於ける銀行資本機構構成——その集積、集中

支那資本機構・財閥・政權

種別	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年
省市立銀行	四九,六七,四〇八	七二,三六,五〇〇	七〇,八〇,六六六	三三,一〇〇,〇〇〇
商業銀行	一〇〇	一四三,七〇〇	一四三,六〇〇	二七〇,一〇〇
農工銀行	一〇〇	五五,二六,七九〇	七五,九五〇,〇〇〇	二七,六九四,三四六
專業銀行	一〇〇	一五〇,〇〇〇	二二〇,〇〇〇	七〇,五〇〇
華僑銀行	一〇〇	五三,七六,九八七	六四,二五,八三八	五〇,四一八,九七八
總計	四五一,五九〇,四一八	五五五,一九〇,九三三	六三三,五三三,三三三	八六七,九八四,五七四
中央及び特許銀行	一〇〇	二二,八五	一七〇,八五	一九三,三
純益 (單位元)	一〇〇	九六,五五	一四,二八五	一五,〇〇

種別	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年
省市立銀行	一,四六八,三三七	二,五六二,五三二	三,六四四,八四二	五,四四三,六八
商業銀行	一〇〇	一七五,八六	二四八,三〇	三三〇,六九
農工銀行	一〇〇	七,九六,三三六	九,三三,三二九	八,八三六,三五
儲蓄銀行	一〇〇	一〇〇,〇〇	一三〇,〇〇	一一九,〇〇
農工銀行	一〇〇	二八五,三三七	三三八,〇一九	一九二,〇八四
專業銀行	一〇〇	一〇七,三三	八三,〇三	六六,九七
華僑銀行	一〇〇	一,八九八,八七	二,八四,二四九	二,七七,三七七
總計	二,六五三,九三三	三,九七〇,九三三	五,〇〇〇,九三三	六,七五八,〇〇〇
中央及び特許銀行	一〇〇	三三,三三,八一九	三九,三七,五三三	五,五七,三〇三
資産總額 (單位元)	一〇〇	二二,八	一三三,五三	二五,二

支那資本機構・財閥・政權	指 数	100	100	100	100	100	100	100	100
省市立銀行	指 数	100	218.70	136.08	331.60	210,666,499	279,665,629	447,507,457	500,312,110
商業銀行	指 数	100	225,355,559	279,665,629	447,507,457	500,312,110	500,312,110	500,312,110	500,312,110
儲蓄銀行	指 数	100	225,355,559	279,665,629	447,507,457	500,312,110	500,312,110	500,312,110	500,312,110
農工銀行	指 数	100	225,355,559	279,665,629	447,507,457	500,312,110	500,312,110	500,312,110	500,312,110
專業銀行	指 数	100	225,355,559	279,665,629	447,507,457	500,312,110	500,312,110	500,312,110	500,312,110
華僑銀行	指 数	100	225,355,559	279,665,629	447,507,457	500,312,110	500,312,110	500,312,110	500,312,110
總 計	指 数	100	225,355,559	279,665,629	447,507,457	500,312,110	500,312,110	500,312,110	500,312,110

(以上何れも民國二十五年全國銀行年鑑の發表)

右に引用した數字が示す如く、支那に於ける銀行資本の膨脹は、當然預金及び銀行券の増大によつて成されたこ

とを指摘せねばならぬのであるが、銀行預金の増大は、銀行が高率なる利子を預金者に提供し得たため、そこに巨大な預金の吸収を結果づけるに至つたのと、巨額の資金が生産行程から離れて、利潤の機会を求めつゝ、銀行に集中するに至つたからであり、前述の如く、國內産業の極度の萎縮と、不振とにより、利潤の機会を失つた資金が、産業から離れて當然銀行に集つた所以である。

そこにはまた前各章に略述した通り、地方に於ける社會状態の不安の増大に伴ひ、地方資金の都市集中が行はれた點もあつたであらうし、支那内地の農業及び、商工業に投下されてゐた個人の資本が、恐慌の發展と共に、主要都市に集中した過程もあつたであらう上、支那銀行の對在外國銀行との利子の差異が、これらの外國銀行の預金を支那銀行に移動せしめたことをも亦、さうした原因の一つに數へ得たであらうは勿論、舊式金融機關たる錢莊の機能の縮少につれて、錢莊預金の銀行移轉も同時に行はれたであらうとは謂へ、兎まれ、銀行資本の驚くべき膨脹は、支那を中心とする經濟恐慌の深化の渦中に於いて、一層その趨勢を加へて行つた事實は、さきに摘録した數字がこれを證明してゐるのである。

即ち支那の銀行資本の膨脹は、歸着するところ支那農村經濟の破局的凋落、民族諸工業の破滅、商業の全面的破産等を背景として實現されるに至つたのであるから、生産行程から離れた資金の集中が、如實の銀行資本の膨脹を促進したものであると謂ふを得べく、自然恐慌が銀行資本の集中に、少しも障礙を與へなかつたのみでなく、寧ろ産業の荒廢が、銀行資本の増大を促す原因であつたところに、支那に於ける銀行資本機構構成——その集積、集中

の過程を中心として——の特異性がある。

この間の経緯に對しては、王承之氏の「中國金融資本論」では次の如くこれを極論してゐる。

「こゝに二つの相反する趨向がある。一つは華商銀行の預金の逐年増加であり、一つは在支外國銀行の預金が、民國二十三年以後漸次減少して行つたことである。この二つの事象を表面的にのみ見るならば、華商銀行が欣欣として繁榮に向ひ、在支外國銀行は日に衰微しつゝあるかの如くに認識される。然しながら實際はこれに相反してゐる。即ち華商銀行は預金の増加を圖るにあらずんば、新らしき前途を開拓することを得なかつたからであり、在支外國銀行は預金の減少によつて、何等支那に於けるその支配力を喪失しなかつたのである。而かも華商銀行の預金の増加は、大體次の諸理由に基いたのに外ならぬのであつた。(一)不斷の恐慌の渦中に於いて銀行は自身の安全と、對外信用の鞏固を保持するため、ひたすら預金を收集することに努めてその對策に備へた。(二)最近幾年來の農村破産は、愈々徹底的となり、而かも農村社會の不安は、富者をして郷村に安居する能はざらしめ、紛々として都市に移住させた。同時にその貯存の現銀も亦都市に搬出しつゝ、これを銀行に預金した。(三)爾來市場の不景氣が愈々甚だしく勳勞大衆の消費力が益々減退するに至り、これがため國際貿易の入超が逐年減少し、自然外國に支拂はれる現銀も亦これに隨つて遞減した。然しながらかうした銀行の手持現銀の増加は、工商業の繁榮によつて來たしたものでなく、無論出超の結果からでもなかつた。實際的には前記の三原因の變體的發展に外ならないのであつた。在支外國銀行の手持ち銀の減少は、去年米國の銀政策實施後、大量の現銀が流出するに

至つたからであり、このことは在支外國銀行自身には何等の損失もなく、反つてその利潤と積立金を増加せしめた。勢ひこれを以て帝國主義金融資本の支那金融に對する統制と、支那の民衆に對しての搾取の別の一方式であつたとすら謂ひ得る」(「中國金融資本論」第一章「中國金融資本の持特性」五「中國金融資本と産業」抄録)。

以上の如く支那に於ける銀行資本の膨脹、その集積と集中とが、産業の破産と、農村經濟の破局の上に築き上げられたところに、その特異的な發展の過程があつたのであり、この點に關し、章乃器氏著の「中國貨幣金融問題」の如き、大體左の如くこれを評價してゐる。

「金融は經濟社會の循環系であり、工商諸業の樞紐であると謂ふ説には誤りがなく、如何なる資本主義國家に於いても、金融資本はその一切を支配してゐる(中略)。一九二九年より世界恐慌の開始以來、各國の金融業は、すべて痛烈な影響を受け、米國に於いては、閉鎖銀行が數千行に達し、獨・佛の諸國に於いても亦、巨大な銀行が何れも破産に陥つた。ただ英國の銀行のみは、比較的さうした慘狀に直面することを避け得たのみであつたが、それとても亦金本位を放棄することによつて金融業の危機を緩和せざるを得なかつた。然るに支那に於いては全くそれらと相反するの現象を呈現するに至つたのである。即ち農村の破産が、日一日と深刻化し、都市工商業の恐怖は、益々峻烈を極めて行つたに拘らず、銀行の新設のみが益々増加し、既設銀行の利潤は依然として縮減しなかつたのであつた。これらは畢竟如何なる原因によつた結果であらうか。いま斯うした特殊現象に關しては、既に幾多の意見が行はれてゐるのであるが、一般的に唱へられてゐるが如く、それは現金の都市集中の理由に基

くことは勿論であり、一面現金が都市に集中し、一面都市に於いては資金が比較的複雑な工商業に對して放資されなかつたからであつた。即ち銀行業者の多くはこの資金を最も簡単な公債の上に於ける投資に行使したからである。而してこれによつて一般人の腦裡に銀行業が最も簡單であり、最もその獲利に容易な事業であるとの觀念を懷かしめたことが、新設銀行を不斷に簇生せしめた所以であると謂はざるを得ぬ。さらにまた、一般的に銀行が危険性の比較的輕微な營業であると、認識するに至つたことも亦、新設銀行の勃興を來たせしめた直接の動機であつた。謂ふまでもなく、過去三年間に於いて最も峻烈な經濟恐慌の影響を受けたものは、工業資本家であり、而かもこれらの工業資本家は、既に破産を決意するに至つたときに於いてすら、その環境が容易にこれを許さなかつた。そして破産の後に於いては、その資本が一厘も残らなかつた。それは工業資本家の所有するところの固定資産（平時に於いてさへ、それを以て資金を融通することが殆ど不可能であつた）が、一朝破産に陥らんか（それはすべての工業が不景氣の頂上に達した時であつた）、全くそれらの工場建物は、結局古木材、古煉瓦としてこれを處分する外に途がなく、機械の設備も亦、單に古銅、古鐵として賣却すべく餘儀なくされるに至つたのである。尙ほ且つこれを一般販賣商について謂ふときも亦、恐慌の必然的表現は物價の暴落にあつたため、斯くの如き物價暴落の渦中に於いて、これらの工業生産品を手持ちせる販賣商——特約販賣商或は小賣商——は、必至的に財産價値の遞減による損失を免れないのであつた。これに反して銀行業は、斯かる點に於いて最も恵まれてゐた。當然それは支那に於ける銀行業のみの独自の現象であつたと謂へよう。即ち銀行の所有する固定資産は土地

建物のみに過ぎず、都市の土地建物の價値は、過去幾年間に於いて、その低落の度合が、一般商品に比較するときは著しく狭小であつた。特に支那の銀行業は、平時一般工商業との關係が頗る稀薄であつたため、工商業の破産の彼等に與へる間接的打撃が、極めて軽く、且つ甚だしく限られてゐた。このことはその主要投資が國債であり、國債の價値は、「九・一八」事變の後、猛烈な崩壊を呈示したと雖も、結果に於いては依然健實たるを失はなかつたからである。右の如く銀行業の經營が至極簡單であり、その危険性が比較的輕微であるとの認識が、新設銀行の勃興を促した一面の原因であつたと共に、一種の歴史的原因も亦、これに隨伴してゐた。即ち錢莊業の衰微がそれである。錢莊業は工商業との關係が、銀行に較べて深く、就中農村との關係に於いて密接であつたため、過去三年來、その受けた影響は、銀行に比較して一段深く、且つ顯著であつた。而かも上海に於ける錢莊は、もと／＼その經營振りの健實な點に於いて稱を稱へてゐたが、近年來閉鎖するもの續出するに至つたのと、かゝる場合、合資組織であるがために、出資者が無限責任たることを要した結果、資本家は漸次錢莊業の經營を忌避し、その出資から脱退するものが出で、自然多くの錢莊は銀行に改造され、一部分の錢莊責任者らは、別に銀行の組織に着手してその將來に備へた。尙ほ新たに錢莊を設置せんとしたものも亦、初志を捨て、銀行を設立したのである。但しこのことは國民經濟の觀點から見て頗る畸形的であつたことは勿論、斯うした畸形的の發展には、自ら必然的な特殊の因果關係を具有してゐたのである」（章乃器氏著「中國貨幣金融問題」のうち「我國銀行業の前途」

を抄録)。

以上の事實——銀行資本の驚くべき膨脹は、結局特殊な原因に基く畸形的な發展でしかなく、寧ろ産業の荒廢の上に樹立された、變體的現象であると謂ふことは、最近に於ける銀行の預金と、貸金との状態を考察するとき、最もよくこの間の経緯を窺知し得るのである。

この點については最近の数字がないため、「民國二十四年全国銀行年鑑」に擧げられた次の数字を見ると、

全國銀行の預金額の内容(單位元)

種別	一九三二年	一九三三年
當座預金	九九二、四九六、一七三	一、〇二五、六〇二、八〇六
定期預金	六〇二、一〇五、七五七	七五〇、六九八、七八四
儲蓄預金	一八〇、〇七〇、二〇五	二五一、四八三、〇六〇
その他預金	四〇九、八〇七、八二〇	五九七、三六四、二九〇
合計	二、一八三、七五九、九五七	二、六二五、一四九、〇四〇
全國銀行の貸付金額の内容(單位元)		
種別	一九三二年	一九三三年
當座貸金	七六七、五〇八、六〇六	一、一〇〇、二一一、一六五
定期貸金	五六六、四七八、五九七	五九三、八一六、三四四

その他貸金	六二二、八七六、九三四	五九三、八一六、三四四
合計	一、九四六、八六四、一三七	二、三六五、六九三、〇〇六

と、當座貸金、當座預金が、何れも増加してゐるのであるが、これは、當座貸付の増加は、市場の凋落と共に、銀行の資金が、錢莊または商品に多く融通されたため、當座預金の増加は、市場の混亂に伴ひ、預金者が、定期預金を忌避し、任意に引き出すことの出来る當座預金を、選ぶに至つた結果である。

次いで一般預金の増加には、工商業の凋落が著しくこれに反映してゐたことは前述の如くである。斯かる例證としては銀行預金に於ける預金者層を検討するとき、同時に工商業預金が各種の預金に對する比例に於いて、甚だしく小さいのを見るならば、一層銀行資本の膨脹が、産業の凋落の上に築き上げられたと謂ふ理由をハツキリと首肯し得るであらう。そのために最近三年間に於ける中國銀行の預金の内容を左に摘録しておかう。

最近三年間の中國銀行の預金内容百分比

預金種類	一九三三年	一九三四年	一九三五年
個人及び團體預金	五〇・二〇	六二・八八	五八・二七
工商業預金	四五・六六	三一・三四	三六・三三
政府機關預金	四・一四	五・七八	五・四

即ち右の表によれば、中國銀行に於いては過去三年間に涉り個人及び團體預金が漸増し、その反面に於いて工商業者の預金が却つて減少してゐるのであり、これによつて、工商業の凋落が、益々激化し、他面巨額の資金が生産

から離れて休眠態資本となつた所以を發見し得ると同時に、そこには工商業の破局的恐慌が、さらに迅速を加へ、さうした基礎の上に於いて、銀行が遊資の推積に悩まされるに至つた経緯をも、看取出来るのである。こゝに擧げた例證は單に中國銀行一行の状態に過ぎぬのであるとは謂へ、これを以て全般を推測するのに決して難くない。

X X

兌換券の普通化が、銀行資本の膨脹を招來せしめた他の一つの原因であることは、今更謂ふまでもない。これは發券銀行に對して、巨額な發券利益を提供することにより、直接銀行資本の増加を促したのと同時に、兌換券の普及が、直接間接的に資金の流通化をそゝること夥しく、且つ兌換券の流通擴大が、通貨の膨脹を齎らしたのみでなく、信用制度の擴大を誘致した等、何れも銀行資本の集積、集中の積極的の助力を與へたからである。

兌換券は、一九三五年十一月五日、國民政府の幣制改革の斷行と共に、中國、交通、中央の三銀行發行の兌換券が、法幣と規定され、その他の發券銀行の兌換券は、何れも十一月五日現在の發券額を限度として、三箇年間は、その流通を許されたが、兌換準備はこれを前記の三銀行で管理するに定められ、斯くして整理への過程に入つたが、兌換準備は、正貨準備六割、保證發行四割で、四割の保證發行は、政府公債及び確實なる證券、短期商業手形等を準備としてこれに充て、これらの證券、手形は何れも一割以上の利子を保有し得るものであり、發行兌換券は、その四割は發券課税一・二五%を負担の上、發券利率によつて運用されてゐたのである。而かも斯うした發券の利益は、獨り發券銀行のみでなく、領用制度（これは支那に於いてのみ見る制度であつて發行權を持た

ない銀行、錢莊は、發券銀行と特約して、規定された準備金を供托の上、銀行券の代理發行を受け得たのである）によつて、發行權をもたない銀行と雖も、或る程度まで、これに均霑することが出来た。而して斯くの如き制度の發展につれ、銀行券の普通化が、急速に實現され、同時に相互扶助關係が、銀行券の信用を昂め、銀行券そのものゝ社會的基礎を著しく鞏固ならしめた。

斯うした経緯に基き、支那に於ける兌換券の發行額は、漸増の趨勢を辿りながら、銀行資本の膨脹を促す要因をなした——無論一九三五年十一月五日以後、發行權が中央、中國、交通、の三行に集中せられるまでの期間に於いて——。

(附表)——全國銀行に於ける發券統計(單位元)

銀行名	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年
中央銀行	三九,九九五,三六〇	七一,〇六三,三〇一	八六,〇四八,六一七	一七九,九二三,五四〇
中國銀行	一八四,四二六,九三七	一八三,七二六,九七七	二〇四,七二三,四六三	二八六,二四五,〇四二
交通銀行	九四,五〇〇,九二五	九三,〇〇四,六一一	一一二,五二二,四七二	一八〇,八二五,六五〇
山西省銀行	二,一七五,七三四	四,六四四,〇八四	六,一二五,四五二	六,九四九,七二九
山東省銀行	—	一,七一三,〇〇〇	二,〇六〇,〇〇〇	二,三八〇,〇〇〇
江西裕民銀行	三九七,八五七	四二六,五六八	六三四,八六五	七八八,三七〇
河北省銀行	二,七八七,五〇三	二,九六三,八四九	—	—

支那資本機構・財閥・政權

河南農工	一、四二八、〇三三	一、〇六八、四二四	六九八、五四〇	三九五、四一〇
青島市銀行	—	—	八、一〇八	七八、四一〇
南昌市立銀行	三三五、六〇六	二六三、二七五	三二四、八二二	四五九、一六〇
浙江地方銀行	—	一、三五二、四五八	三、四七三、三一三	三、四九三、八二二
陝西省銀行	一、三九八、一四四	一、八四一、一三六	二、六一二、八九三	四、八三三、八一九
湖北省銀行	二、九〇〇、五〇〇	四、一一一、四〇〇	六、〇七五、〇五〇	七、八四七、八〇〇
湖南省銀行	一、五一〇、四〇〇	三、二七六、五一七	七、二三一、七五〇	八、七七八、四〇〇
富漢新銀行	二、九八二、〇〇〇	一三、〇三六、一〇〇	—	—
寧夏省銀行	—	八五〇、〇〇〇	二、四五〇、〇〇〇	—
廣州市立銀行	—	—	—	五、九二五、四七二
廣西銀行	—	四、四三七、八七一	五、二四四、四一九	一六、七七六、四一二
廣東省銀行	三三、七六一、六三六	三一、三九九、七二六	三三、三三三、八九八	七五、五〇二、九六五
大中銀行	—	二一七、〇六二	四六六、九三六	一、七二二、五二一
中國通商	一一、二七六、八七三	二五、〇九一、四六〇	四四、九八一、九〇〇	—
四川美豐	六三〇、七九二	一、〇四五、六九一	五三七、四九一	九二五
四明商業儲蓄	一五、〇九四、六〇〇	一九、四九七、六〇〇	一八、三一〇、三〇〇	一九、二二〇、八〇〇
北洋保商	一、四三七、六〇〇	一、四八四、四〇〇	二、〇一三、六〇〇	六、五八〇、〇〇〇
浙江興業	七、〇八八、九一七	八、一八六、八七二	九、二一四、七七三	—

一七七

豐業銀行	一七〇、〇〇〇	一六〇、〇〇〇	一七〇、〇〇〇	一八〇、〇〇〇
中國農工	四、七〇九、六〇〇	一〇、二二四、七六七	一二、二二五、五四七	一六、四五四、五一七
中國實業	三五、八六〇、四八五	四〇、〇〇〇、六八〇	四三、五〇〇、八一八	—
陝西地方實業	三四七、七〇〇	五三四、五四〇	九五四、〇九一	一、二九三、三五四
義東地方	—	—	一、八一三、〇〇〇	二、八二四、三〇〇
中國墾業	五、二二一、〇〇〇	六、四四五、〇〇〇	七、〇九五、〇〇〇	七、四九六、〇〇〇
江西建設	—	一三四、四〇〇	九三七、七六〇	九一〇、四七二
邊業銀行	一、一三五、五〇〇	九六五、〇〇〇	四八八、一〇〇	二七〇、四〇〇
香港國民商業	一六、七二一	一六、一四四	一四、二八五	—
總計	四五一、五九〇、四一八	五三五、一九〇、九三五	六二二、五二二、二二三	八六七、九八四、三七六

(以上民國二十五年、全國銀行年鑑から)

(註)——現行法幣の準備制度は、現銀準備六割の内容を現銀百分の二十五、その他は外國爲替、在外資金をも含むことに改正した。尙ほ現在の法幣發行額は、一九三六年十月二十五日現在、中央銀行三〇五、八三三、七八一元、中國銀行四一一、〇七三、七八一元、交通銀行二四四、六二〇、七一一元と計九六一、五二八、二七三元の外に、中國農民銀行紙幣一〇〇、〇〇〇、〇〇〇元を加へて一、〇六一、五二八、二七三元の筈である(法幣以外各銀行の發券額にして法幣に準じて適用することとなつてゐる分は、自ら以上三行のうちに含まれてゐることとなる。それは發券八銀行の準備金が、何れも三行に保管されてゐるからであり、その保管の割當は、中央銀行には同行が接收した中南銀行(十一月三日現在の發券額七二、二八一、四〇〇元)及び中國農工銀行(十一月三日現在の發券額八、三四四、三八二元)の二行を、中國銀行は、同行の接收した四明商業儲蓄銀行(十一

月三日現在の發券額一八、二二〇、八〇〇元)及び中國實業銀行(十一月三日現在の發券額四四、四六三、四二一元)の二行を、交通銀行は同銀行の接收した中國通商銀行(十一月三日現在の發券額二六、六一七、一〇〇元)及び浙江興業銀行(十一月三日現在發券額九、四四八、七七二元)並びに、中國實業銀行(十一月三日現在の發券額七、四九六、〇〇〇元)であつたため、結局以上八行の發券額が前記の數字のなかに含まれてゐる。——尙ほそのほか各省銀行の輔幣券に中國農民銀行の輔幣券三〇、〇〇〇、〇〇〇元を加へたものが同時に流通しつゝある。

但し以上の兌換券の發行額は、これを預金の數字に對比するとき、著しく僅少であり、銀行資本を膨脹せしめた要素としては、比較的重要性を帯びてゐないやうに見受けられるのであるが、支那に於ける兌換券が銀行資本の發展上、乃至金融市場膨脹の上に於いて頗る重要な機能を有してゐた點は、さきに指摘したるが如き銀行資本の特質について見るとき、益々これを明らかにし得るのであり、銀行資本の集中・膨脹に對して、兌換券の受け持つた重要な役割はこれを看過出來ないのであつた。

それは四割の保證發行に對する準備が、専ら政府發行の公債を以て、これに充てゝゐたのと、後節に叙述する通り、銀行資本の集積に當り、政府發行の公債が、先進資本主義國に於ける株券、社債等とその形態の上に於いて、ほぼ似通つた作用を齎らしたからであり、斯うした事實について、これを見るとき、兌換券の増大が、銀行資本の膨脹に對して、如何なる程度までの影響と作用とを與へたかを窺知し得るのである。

さらに兌換券の發行額の増加が、中央財政の赤字填補による公債の濫發と結びついて、一種の通貨膨脹の作用を起したに止り、荒廢せる産業の救済には、何等貢獻するところがなかつたのであり、斯かる關係に對し、王承之氏の「中國金融資本論」は大要左の如く論斷してゐる。

「九發券銀行及び二十銀行の領用にかゝる發券額、並びに領用額は、何れも激増しつゝある。この増加の原因が何れにあつたか。我等が若し兌換券の増加を銀行の工商業に對する貸出の増加、或は市場の繁榮が、益々通貨の流通を需要した結果であると認識するならば、それは大きな錯誤である。とくに民國二十三年度に於ける兌換券の増加は、財政上の巨額の支出から來たのであり、一種の通貨膨脹であつた。従つて工商業への貸出及び市場景氣の恢復に對して、關係するところ極めて鮮少であつた。即ち一九三五年の春、財政部の發行した一億元の金融公債の如き、一半は、中央、中國、交通の三銀行の資金に充當して、その發券能力を増加し、一半はこれを工商業の救済に用ひたが、それとても實際上單に各銀行の手許逼迫に對して、融通したに過ぎず、二千五百萬元の信用擔保貸出の如きも、單にそれは錢莊に融通したのみに止り、工商業者にしてその恩恵を受けたものが甚だしく鮮少であつた」(「中國金融資本論」第一章「中國金融資本の特殊性」四「中國金融資本と産業」から抄譯)。

X X

斯くの如くにして支那に於ける銀行資本の驚くべき膨脹の過程は、これを一面から見るとき、支那銀行業の現代化——こゝに謂ふところの現代化とは資本の集中化と、その組織化の問題を指すことは謂ふまでもない——への過程であり、一部の間では、斯うした所謂支那銀行業の現代化に對し、大要次の如く、これを評價してゐる。——以

下「中國經濟年報」(民國二十五年)第二章「一年來の幾多の重要問題」五「中國銀行業の現代化問題」から——
 現代化の徵象 中國銀行經濟研究室の發表せる統計によれば、中央、中國、交通等の主要銀行二十八行の拂込
 資本額の増加率は次の如く(單位一千元)、

年 別	總額	指數	年 別	總額	指數
一九二一年	九五、五〇九	一〇〇	一九三二年	一五五、五〇九	一六三
一九三二年	一五六、七七七	一六三	一九三三年	一七三、八八五	一八二
一九三四年	二五四、四三九	二五七			

と、一九二一年より一九三二年に至る十年間に於いてその指數一〇〇より一六三に増大し、次いで、一九三一年より、一九三四年に至る四年間に於いては、さらに二五七と飛躍するに至つた。而してこの二十八銀行の拂込資本は一九三五年に於いて、また巨大な増加を示した。それは單に中央、中國、交通の三銀行にのみついてこれを見ても、同年四月の金融公債發行後、政府持株六千萬元を増加した。斯うして最近數年來に於ける銀行資本集中の現象は、この拂込資本のみから見ても非常に明白である。さらにこの巨大な資本の活動過程中に於いて銀行が如何にしてその財富を蓄積するに至つたかに對しては、その積立金と逐年の純益とについて見なければならぬ。前記の主要二十八銀行の例をとると左の如く(單位元)、

年 別	積立金	純 益
一九二一年	三五、三五三	一一、六六七
	(指數)	(指數)
	一〇〇	一〇〇

一九三一年	四七、三四七	(一八七)	二〇、八四一	(一四五)
一九三二年	五一、八七六	(二〇五)	二六、二八六	(二〇八)
一九三三年	六〇、八八四	(二四〇)	二六、八一	(二二)
一九三四年	未詳		三一、二四八	(二四六)

と積立金に於いては一九二一年より、一九三三年に至る十三年間の額が一倍半となり、純益額は一年々々その大を加へて行つた。こゝにも亦雄厚なる銀行資本の威力を現出してゐるのである。その他貸出業務と發券業務の擴大に至つては、益々そこに銀行資本の雄厚さを具體的に表現してゐる。例へば前記二十八銀行の貸出額は、一九二一年に於いて五一五、〇〇〇、〇〇〇元に過ぎなかつたと雖も、一九三一年には一、六〇三、〇〇〇、〇〇〇元と、三倍餘の激増を呈し、一九三四年には、さらに二、二五三、〇〇〇、〇〇〇元と著増しつゝ、これを一九三一年に比較するとき、百分の四十までの増加を見せ、その増加率の速度が、愈々強化するに至つた。發券に於いては、中央、中國、交通の三行を主となしてゐるため、いま三行の發券額を表示すると次の如く(單位千元)、

年 別	中 央	中 國	交 通
一九二八年	一一、六九六	一一、九五〇	未詳
一九三四年	八五、三三九	一三六、八六八	五七、八八三
一九三五年	一七六、〇六五	一七五、六六七	八四、三一〇

(一九三一年に於ける全年發券額を一〇〇とす)

と、寧ろ驚異的な發展振りをそこに見出し得るのである。而してこれを各行別について謂ふとき、即ち中央銀行を主とし、年別について謂ふならば、一九三五年末を最となすのであるが、このことによつてまた國家銀行と、新貨幣政策とが、紙幣の増發に對して不可分の關係を保有してゐる點を看過出来ない。前述の資本と積立金、及び發券の各項を見ると、最近數年來の銀行資本の雄姿が如何なる輪廓を具へてゐるかを明白にすることが出来るのであると雖も、斯くの如き雄姿は全國農村の凋落と工場閉鎖と、財政の涸渇乃至外貨の充滿せる恐慌の渦中に於いて、顯出したものであることを忘れてはならない。それに次いで支那銀行業の組織の合理化に關しては、こゝに幾多の事實を擧げて解説する必要がある。第一、一九三二年三月の上海事變後、上海銀行業聯合準備委員會と、栗據(手形)交換所とが設立され、同業者間の聯繫關係が比較的密接となつて行つた。第二には一九三二年四月廢兩改元の實現と共に、長江下流に於ける幣制の統一を招致するに至り、金融組織からこれを謂ふとき、これによつて新式銀行をして、舊式金融機關たる錢莊に打ち勝たしめたのであつた。第三には一九三四年の春、銀行資本家の提唱しつゝあつた信用合作事業の姿態が始めて開始するに至つたことであり、爾來比較的積極的に農村に侵入し、その組織系統が、各種の舊式關係を透過しながら漸次擴大して行つた。第四には一九三五年四月財政部が金融公債一億元を發行して、中央、中國、交通の三銀行の政府持株を増加したことであり、これによつて國家銀行の鼎立を見るに至り、十一月に新貨幣政策を頒布した後は、益々國家銀行の威力と一般金融業に對する統制力を強化せしめたのであつた。單に斯うした四項のみを以てしても、支那の銀行業は經濟的、政治的の各

種の動力の下に於いて、それ自身の組織が、相當に完備して來たことが明らかに看取出來るのである。

現代化の評價。 以上指摘した各種の事實に對し、即ち支那銀行業が如何に日増しに現代化しつゝあつたかと謂ふ點に關しては、これを單純に否認し去ることが出来ないとは謂へ、一般的に評價されつゝあるが如く、誇大に認識することをも亦避くべきである。この點に於いて、支那の銀行資本が、如何にして集中されて行つたか。また如何なる影響を齎らしたか等々を分析するとき、一層然りであつた。疑ふべくもなく支那の銀行資本の發展は、生産過程との間に於ける關聯がなく、寧ろ一般産業の多々益々衰退しつゝある渦中に於いて、愈々發展への速度を加へたのであつた。このことは最も容易に解釋出來る事實であつて、それは支那の銀行資本が、決して偶然に生れたものでないといふことゝ、その發生後、専ら列強商品の販賣、或は政府の外債處理に替ることによつて、自身の成長を來たすに至つた諸段階や、及びさらに外債の侵入に隨伴しながら、政府の借款に應じ、或は政府の内債の消化に努めつゝ、彌よ集積と集中への發展段階を進めて行つた過程に徴するとき、自ら這般の經緯が判明するのである。同時に銀行資本は、また通商口岸對各省との間に於ける爲替業務をも經營した。この種の業務の多くは、半ば國際商品の流通によつて引起されたものである。そしてこのことは支那國民經濟の向上發展の產物であつたとは謂へ、實際上、國際商品の内地に對する侵入と、その流通網の擴大によつて誘致され、且つ進展するに至つた現象であつた。従つて舊式金融機關たる錢莊組織をして、その買辦的職能を盡くすことをすら不能ならしめ、自然新式銀行をしてこれに取つて代らしめる機會を形づくるに至つたのである。一九三六年中國經